
ワールドアウトサイダー

シロタカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワールドアウトサイダー

【Nコード】

N7132U

【作者名】

シロタカ

【あらすじ】

幼なじみの二人は、冒険の果てに一本の剣を見つけた。幼き思い出、二人だけの秘密。しかし、あるいはその剣を見つけたことが、大きな分岐点だったかもしれない。十四歳、中学二年生、夏。少女はヒーローだった。少女が行く道に『無理』や『不可能』は存在せず、少女の歩んだ後に『無敵』や『最強』のレッテルが踊った。そんな彼女も、今や“引きこもり”であり、一年以上の不登校が続いていた。八月一日 少女の誕生日に、少年はプレゼントと称してデートへ誘う。かつて剣を見つけたあの場所で、一年間云えなかつ

た言葉を告げる 「どうして、殺した？」。閉塞する二人に示される、最後の可能性は異世界。世界を渡り歩く日々の始まりに、止まっていた二人の時間が動き始める……。 （作者HP『零円少女』
<http://zero.girlfriend.jp/>）

prologue「世界の果て」

二人は手を繋いでいた。

洞窟を見つめていた。

深い闇だった。

男の子と女の子。食い入るように見つめる様こそ同じだったが、その二人の瞳に宿る輝きは、まるで正反対だった。弱気にうるんだ瞳、期待に輝く瞳。男の子は腰の引けた様子で、女の子は胸を張っている。

面白いものを見つけたの。

小学校の休み時間、女の子は楽しげに云った。

男の子は早くも後悔していた。遊び相手に引つ張られるまま、こんな所まで来てしまったことを悔やんだ。残念ながら、怪物が大口を開いたかのような暗闇は、とても楽しいものには見えなかったのだ。

紅葉の山は、住宅街の中に、ぽつりと残された無人島のような場所である。木々に覆われた山奥には、人々の話し声も車の騒音も届かない。静寂が耳に痛く、険しい山道に乱れた心臓のリズムだけが、唯一の生きた音に聞こえた。

「ねえ」

弱気が漏れる。

足を踏み込めば、もう二度と出られないのではないか。

男の子は悪い予感を覚えていた。

ここから逃げ出す言い訳ならば、既に幾つもできあがっていた。しかし、それを口にしかけて、男の子は寸前で思いとどまった。握った手に力を込めれば、自然と、握り返す力も強くなる。

顔を上げれば、女の子が笑っている。

「さあ、冒険だ」

神様を信じる人がいる。

男の子は、神様なんて信じていなかった。そんなものに頼る必要がなかった。手を握れば、そこに、世界で最も確かなものがある。わずか十年にも満たない人生の中で、男の子は既に信じられるものを見つけてしまっていた。

神様でも頭を下げるような、そんな女の子。

もちろん、彼女と共にいることは、何よりも大変なことだ。破天荒で何を考えているかわからず、トラブルメーカーでいて、どんな名探偵よりも早く物事を解決する。『平凡』や『普通』という言葉はどこかへ忘れてきたようで、『無敵』や『万能』という言葉ばかり、安っぽいアクセサリ感覚で身につけている。

そんな女の子に馴染めず、離れて行った友達も数多い。だが、男の子は手を離さず、その横に立っている。決して逃げない。それが、幼い男の子の選んでしまった 情けなく、無様で、愚かしい生き方だった。

洞窟へ。

闇の中へ。

暗闇は重く、初めて知ったその感触に、男の子は胃が持ち上がる感覚を覚えた。まっすぐ先へ進む彼女に併せて、必死に歩みを進める。

「大丈夫」

女の子は、独り言のようにつぶやいた。

慣れ親しんだ声である。闇の中で、男の子は見失わないように必死だった。光は見えず、道すらも見えなかった。だから、彼女だけが頼りなのだ。声だけではない。

その存在が、男の子にとっては、何よりも 。

幼かった。

そこに思い至り、一度、手が止まる。

馬鹿らしい。

そんな風に、ため息をつく。

彼は、無知な子供で、弱い子供で、馬鹿な子供で　そして、幸福な子供だった。何も考えずに、彼女を受け入れていればよかった。彼女がいれば、何も考える必要などなかった。

単純だった。

彼女が好きだった。

洞窟の最奥。

行き着いた場所には、本当の闇が広がっていた。

どれくらい歩いてきただろう。

どれくらい深く潜っただろう。

ごつごつした地面の感触が途絶えてしまった。片手で周囲を探しても、そこにあるはずの洞窟の岩肌を掴めない。空気の流れる音もせず、湿った土の匂いもしない。何も見えず、何もない。

途方もなく広い場所に出たようだ。

隣に立つ彼女の顔すら見えない闇の中である。男の子は、突然の孤独感に包まれた。思わず、何でもいいから大声で叫び出したくなつたが、この場の静寂を破ることは、何か途方もなく恐ろしいことにも思えた。

男の子は立ちすくんだ。

どうしようもできず、この場が、自分の限界と知った。
「すごいね」

彼女は、いつだって、何もかもを飛び越える。

「世界の果て、みたい」

いとも簡単に、彼女は繋いでいた手を離した。

男の子が「あっ」と声をあげるより早く、彼女は軽やかに深淵の闇へ踏み込んでいく。「ここにいて」と、彼女は短く云った。「目印だからね」と、笑って付け足した。

「何も見えないのに……」

どうやって目印になると云うのだろう。

そんな抗議に、彼女はあっさり答える。

「何処にいても、何も見えなくても、見つけられる」

「嘘だ」

「本当だよ」

彼女は断言する。

「君だって、簡単にできる。ほら、やってみて」

言い切ると、彼女は闇の中へ駆け出した。今度は呼び止めることもできない。足音は素早く遠ざかり、徐々に小さくなり、消えていく。闇の中へ溶けてしまった彼女は、その姿はおるか、気配すら感じられない。

「さあ、ほら」

闇の彼方から、呼び声。

「見つけて」

その声の遠さから、やはり途方もなく広い空間が広がっているのだと知れた。果たして、どうなっているのだろうか。洞窟の中に自然にできた空間とも思えない。だが、そんな疑問を冷静に考えている余裕はなかった。頭の中は、目の前に迫った問題で一杯だ。

闇の中を進んで、彼女を見つけないといけない。

「はやく」

「わかった。わかったよ」

恐る恐る、男の子は一步を踏み出した。

何も見えない。踏み出した一步には、何の保証もないのだ。地面を踏むはずの足が、不意に空を切り、奈落の底に落ちていくという

可能性も、ないとは言いい切れない。

彼女は無事だった　と、男の子は胸の内で繰り返す。だから、自分も大丈夫なはずだ。足を踏み出した先が、崖になっているような事はないはずだ。

彼女の顔が見たかった。

落ち着けという気持ちと裏腹に、歩みは自然と早くなる。歩きながら、最後はさながら徒競走のラストスパート。ゴールテープを切るかわりに、すがりつくように彼女の手を握りしめていた。男の子はその瞬間、大きく安堵の息をついた。

「ほら、やつぱり」

「なに？」

「見つけられた」

安心感と共に、全てを見透かしているかのような彼女の表情が憎らしい。

「君が、見つけられないわけ、ないもんね」

「なんだよ、それ」

苦々しくつぶやいたところで、男の子はふと気づく。

「あれ？」

「明るい。」

何も見えなかったはずの暗闇が、ぼんやりと薄れている。相手の表情を見てとれる程には光があった。その怪訝な表情に気づいてか、女の子はにっこり笑った。

「冒険には、やつぱり宝物だよな」

光源は、すぐ近くにあった。

鉛のように重い闇の中、蛍のように儚い光がこぼれていた。それが何なのか、男の子にはわからなかった。いや、正確に云うならば、何であるかは一目瞭然だったのだが、光を帯びていることが、とても不思議だったのだ。

蝶が蜜に吸い寄せられるように、二人はそれに近づいた。手を伸ばせば触れられる距離で、二人はそれを見下ろした。

「これって……」

男の子は、言葉を失くす。

それは一本の剣だった。

両刃の剣が、抜き身のままで、地面に突き立っている。このような洞窟の奥底で、果たしてどれほどの間、そこにあったのだろうか。年月を感じさせるような錆もなく、曇りのない刃は、月の光のような冷たさで、静かに、淡く、輝いている。その美しさを見れば、長い年月、放置されていたとも思えないが、闇の中で沈黙する剣の姿は、まるでそこにあるのが当然のようでもあった。まるで星の煌めきのように、想像も及ばない時間を、そこで佇んでいたようにも思えた。

刃は、ぞつとする輝きを持っていたが、洞窟を染める光源はそこではなく、剣の中心部にあった。柄から鰐にかけて、剣は実用性を失わない程度に、細やかな装飾が施されていた。よく眺めれば、そのデザインは竜を象ったものだとわかる。

その竜の瞳である。はめ込まれているものは、宝石だろうか。だが、自然と光を放つような天然石を、男の子は知らなかった。反射する光もない洞窟の中で、竜の瞳は自ら輝きを放っている。

「待つて」

彼女の鋭い言葉で、男の子は我に返る。

そして、茫然と自らの手を眺めた。

いつしか気づかない内に、手を伸ばしていた。自分の意思ではなく、ただ魅入られたかのように、剣を掴もうとしていた。彼女の手がそつと押しやるように触れても、男の子の心は、まだ虚空をさまよっていた。

「大丈夫」

彼女は云う。

「大丈夫。見ていて」

有無を云わせぬ強い言葉に、男の子は自然と一歩後ろに退いた。

彼女は、剣と正面に向き合った。

持ち手は、ちょうど彼女の胸のあたりにある。子供の背丈に対し、剣はとても大きく見えた。闇の中、剣から零れる光に、彼女だけがスポットライトを浴びるかのように浮かび上がる。

女の子と剣。

世界は、その二つだけを残し、消えてしまったようだ。

「大丈夫」

繰り返される同じ言葉。

最初、男の子はそれが自分に向けられた言葉だと思っていたが、どうやら違ったようだ。女の子の視線も意識も、今は、一心に剣に向かっている。彼女が口にする言葉も、剣に向けられている。

「伊吹力ナ」

彼女は名乗る。

「君は、誰？」

ゆっくりと伸ばされた手が、剣を掴む。

静止していた時間が、その瞬間、堰を切ったように流れ出した。彼女は眼を見開き、小さな呻き声を漏らした。その体躯が、不自然に折れ曲がる。まるで痛みに耐えるかのように、腕が震えている。だが、震える腕には力が込められている。剣を離さない。やがて呻き声は、とても大きな叫び声に変わり、男の子が尻込みしている内、悲鳴に似た絶叫に変わった。

心の奥からの叫びだった。

それが最高潮に高まった時、剣が、地面から抜けた。

「力ナ」

呪縛が解けたように、男の子は前へ飛び出る。

子供の体躯には不釣り合いな剣が、闇の中、天へ向けて伸びていた。ゆったりと緩慢な動きで、彼女は剣を振り上げていた。声は途絶え、悲鳴も消え、彼女は頭上からそそく剣の光の中で、まさに照明を浴びる主人公のように、ヒーローのように、立っていた。

高々と、その右手に、剣を掲げている。

「待って」

彼女に触れようとした手を、男の子は寸前で止める。

「まだ、終わっていない」

剣は振り上げたまま、彼女は横目で男の子を捉える。先ほどの叫び声が嘘のように、その表情にはいつもの余裕が戻っている。瞳には無邪気な光、口元には楽しげな笑み。

いつもの女の子だ。

そう、いつもの女の子のはずだ。

無意識に、男の子は胸の内で言葉を繰り返した。

「さあ」

彼女は既に、剣に向かっていた。

「君の、名は……」

彼女は云う。

「名は……」

さて。

物語の始まりは、いつだっただろうか。

時折、考える。

もちろん、明確なスタートラインなど存在する訳がない。一人の人間を語ろうとするならば、始まりはその生まれ落ちた瞬間だろう。生を受けて、死ぬまで。それが、人の一生という物語である。

しかし、物語を、誰かに語って聞かせるものと考えるならば、語り始めるにふさわしい“始まり”は存在するはずだ。滑稽だろうか。あの瞬間を“始まり”とする事は、無意識に、自身の誤りを認めたくないという事に繋がってしまう。

何が間違っていたのか。

或いは、何も間違っていなかったのか。

どうすれば、ハッピーエンドに辿りつけたのか。

或いは、そんなものは最初から存在しなかったのか。

結局、このプロローグは、一人の少年の愚痴である。悔恨である。意味のない懺悔である。これを記すことは自己満足以外の何物でもなく、だからこそ、これは誰に見られることもなく、書かれた瞬間に焼かれて消える。

しかし、例えば。

これを誰かが目にする機会があるとすれば、それは 。

或いは、そういう奇跡が起きたということかもしれない。

「カラドボルグ」

彼女が叫ぶ。

それが、剣の名だった。

そこから起こった出来事は、男の子にとって、それまでの短い人生の中で経験したと比較しても、遥かに不思議だった。

彼女の右手が掲げていた剣は、その名を告げられた瞬間、光となつて弾けた。

剣の装飾部 竜の瞳から零れていた光とは比較にもならない。

刀身も含めて、破裂したように光となった。突然の出来事に、男の子は手で顔を覆い、目を閉ざした。瞼の向こう側で光が踊っている。闇に慣れた瞳に、それはあまりにも刺激的だった。

幾ばくかの後、恐る恐る開いた眼で、男の子は宇宙を見た。

「きれいな」

女の子は笑っていた。

宇宙の中心で、彼女は両手を広げていた。

洞窟の奥底、ここには果てがなかった。果てのない空間に、無数に散らばった剣の光が、億千の星の輝きのように、この場を埋め尽くしている。錯覚だとわかってても、男の子は体が浮いているような感覚に包まれた。

彼女はどこか遠くを見ていた。

宇宙の遙か彼方を、自分の居場所でも探すように、一心に眺めていた。

「さあ」

凜、と。

「おいで、カラドボルグ」

彼女の一声が、全てを終わらせる合図となった。

星々の煌めき　　剣の断片たちは、彼女が高々と伸ばした右手に、渦を巻いて集った。宇宙が、彼女という中心へ、吸いこまれていく。そのたつた一本の右手に、全ての光が吞まれていく。体中を包む光の奔流、魂まで焼かれてしまいそうな光の渦の中、彼女は涼しい顔で、自らの手を見つめている。

光の欠片が、最後の一片まで吸い込まれてしまうと、広場には闇が戻った。

尻餅について、男の子は放心していた。何も見えない、何もわからない。突然の暗闇に、まるで世界から見捨てられたかのように錯覚する。彼女が剣に触れた瞬間から、時間にすれば、ほんの一時に過ぎないだろう。そのわずかな時間に体験したことが、心を粉々に砕いてしまった。

立ち上がれない。

どうすればいいのか。

何も見えない、何もわからない、何もできない。

「カナ」

だから、男の子はその名を呼んだ。
世界で一番信じられる名を呼んだ。

「ユウ」

彼女が、名を呼んだ。

闇を切り裂いて、女の子があらわれる。

「行こう」

伸ばされた手。

迷うことなく、男の子は掴み取る。

大人顔負けの力で、男の子は引つ張り上げられる。そして、息つく間もなく、駆け出した女の子に引きずられていく。「ちょっと」と慌てる。「待つて」と叫んだ。そんな悲鳴も空しく、無邪気な笑い声が洞窟にこだまする。

そう、いつしか洞窟の中だ。

足は、岩肌を踏みしめている。土の匂い、洞窟の冷たい空気。斜面を駆け上がっていた。男の子は息も絶え絶えだったが、女の子はいつもの余裕綽々な態度で、走りながらも大きな声で叫んでいた。

「これは、秘密ね」

答える余裕のない男の子へ、女の子はさらに告げる。

「二人だけの秘密」

言葉を返す余裕はなかったが、どうしてと理由を訊くまでもなく、男の子は理解した。だから、無言のまま力強くうなずいた。走りながらも、横目で男の子の顔を見て、女の子は笑う。前を見れば、既に洞窟の出口がすぐそこへ見えていた。

秋の空の下へ。

光の中へ。

相馬ユウは回想を終える。

物語の“始まり”だけを記し、“終わり”は記さない。それがなぜかと問われても、ユウには答えるすべがない。ユウが語ることの

できる言葉は、思いのほかに少なかった。

では、日常を始めよう。

物語の果ての日常。

望まれない日常の物語。

二人は手を繋いでいる。

その手は、もちろん、真っ赤な血で汚れている。

第1話「日常らしさ」

ある少女がいた。

ある少女の誕生日はすぐその背後まで迫ってきており、それはさながら、包丁を持った不審者が夜道をひたひたと付いて来るような不気味さで、相馬ユウの心を追い詰めていた。毎朝、携帯電話のアラームで目を覚まし、寝ぼけ眼のままユウは日付を確認する。そうしてディスプレイに表示される無機質な数字を眺めては、死刑宣告までのタイムリミットを計算していた。

ため息の出るような日課。

実際、ユウは毎朝ため息をつく。

もちろん、確認も計算もする必要がなく、目覚めるたびに日付は一つ進み、猶予はすり減っていく。同じ日が繰り返されることはなく、時間は止まらない。神様がおまじないでもしてくれない限り、一日は二十四時間で塵もなく消え去り、次の二十四時間が機械的に生産されていく。

時間は平等だ。

平等など信じないユウでも、そう思う。

だから、その日も至極当然に、新しい一日がやってきた。

七月二十日。

『title：君と僕の友情と恋心』

携帯電話には、そんなタイトルのメールが一通。

ユウは携帯を握りしめたまま、ベッドから抜け出した。カーテンを開ければ、朝日が部屋を白く染める。クーラーのお陰で冷えたままの身体には、窓も開けて、生ぬるい風で季節を思い出させる。

学校の制服に着替えはじめて、そこでようやく携帯電話を開いた。

朝のニュースでも眺める気分で文面に目を通し始めたが、読み進める内、ユウは徐々に肩を落としていく羽目になった。

『おはよう。こんにちは。こんばんは。もしくは、シンプルに「やあ」というかけ声でもいいし、「元気？」とたずねてもいい。どんな挨拶をしたところで、君のそっけないメールには挨拶の一文はないだろうし、僕自身も挨拶の意味を失っている。知ってのとおり、僕は昼も夜も区別のつかない状態で、時間の感覚を忘れてしまっている。だから、今が「おはよう」なのか「こんにちは」なのか「こんばんは」なのか、わからない。さらに、僕がメールを送る相手は君だけだ。一日の中で、君だけに何十通も、時に何百通もメールを送っている。それだけの数を送っておいて、いまさら「やあ」も「元気？」もないだろう。「やあ」と云ってみたところで君は何も云わないことを僕は知っているし、君が元気だということも、僕は知っている。つまり、僕が挨拶をする相手は君だけなのに、僕は君に挨拶する意味を失っている。ならば、挨拶など抜きにして、最初から本題を云えばいいと君は云うだろう。実際、君と僕はそんな感じだ。昨日のメールのやりとりをひとつ、例に見てみよう。僕のメール「今、なにしてるかな。僕はお風呂に入ったところで、片手にドライヤーを持ちながら、片手でこのメールを打っている。男の子である君にはわからないだろうけれど、女の子である僕が髪を乾かすのはちょっとした大仕事なんだよ。特にこの一年ずっと髪を伸ばし続けているから、どんどん億劫になる。ちょっとした願望とわがままを云えば、君に髪を乾かしてもらえると助かるよ。ほら、お風呂あがりに寄り添いながら、髪を乾かしてもらうなんて、いかにも恋人同士みたいじゃないか」、君のメール「勉強してる。髪切れ」。このシンプルなメールのやりとりから見えてくるものは、なんと云っても、君と僕の関係性だ。ほら、なんて仲がいいんだろうか。互いのメールには相手に対する遠慮もないし、気負いもない。そして、重要なところは、挨拶もないということさ。僕が考えるのは、挨拶というのは距離を測るものなんだよ。「おはよう」と云う。それに

対して、相手も返事をする。いや、返事をしないかもしれない。どちらでもいいんだ。そのレスポンスが、相手との距離を如実に示すんだからね。相手が何と返事をするか、すぐに返したか、間があったか、目線はこっちを向いていたか、立ち止まったか、声の調子、指先の動き、その後に会話をするかといった様々な要因をもとにして、人は無意識のうち、一瞬で、相手との距離を測りとる。そして、その後の言動を選択するんだよ。だからきっと、みんな、挨拶は大事と云うんだね。挨拶しないと、人と人は、距離もわからないまま向かい合うことになる。それはとても怖いことだ。真剣勝負で、相手の間合いも掴めぬまま、どんどん距離を詰めるようなものだ。迂闊だね。危険じゃないか。挨拶の有無が、命取りになるんだよ。ねえ、でも、君と僕には挨拶などないよね。それはとてもとても素晴らしいことで、君と僕には挨拶など必要なく、距離を測る必要もなく、命のやりとりをする必要もなく、挨拶をしたならば、距離を測り合ったならば、命のやりとりをしたならば、どんな結果になるのだろうという、そんな思いつきの実験、僕の好奇心なのである。ああ、返事が楽しみだ。それが大好きな恋人からのものなのだから、なおいっそうのことだよ。愛しているよ、ユウ君』

差出人の欄に表示されているのは、勝手知ったる幼なじみの名前。実際のところ、『メール1件』という表示を見た時から、相手の予想はついていたユウである。不必要な長文と空虚な内容に目を通した今では、彼女の心境までありありと見えるようだった。

曰く、「暇だ」と、このメールは訴えている。

夜という長い時間を持て余し、ベッドの上でごろごろ転がりながら、意味もなくなったらと文章を打ち続ける彼女の姿が、ユウには簡単に思い浮かんだ。

ため息をひとつ。

最後に彼女に会ってから、ちょうど一週間が経過している。会いに行くべきだろうーと、ユウは胸の内ですぶやいた。

『title: Re・君と僕の友情と恋心』

自室を出て、リビングに向かって階段を降りる間に返信をした。

『おやすみ』

リビングに入れば、鼻歌まじりに朝食の準備をする母親の姿があった。ダイニングテーブルには既に一名分、空になった食器が並んでいる。その横に、読み終わった新聞が綺麗に畳まれていた。

「父さんはもう出かけたの？」

「あら、ユウちゃん。おはよう」

「おはよう」

普段よりもやや早めに起きたユウだが、それでも父親の顔を見ることは叶わない。

「あらあら」

ユウが新聞へと手を伸ばす傍ら、焼きあがったトーストを皿へと持ってきた母親が、驚いたような、困ったような調子ですぶやく。

そして、あらためて、ユウの顔をのぞき込んだ。

「ユウちゃん、顔色悪いわね」

夜遅くまで勉強するよりも、身体を大切にしないーそんな風に助言する母の言葉を聞き流し、ユウは新聞片手に朝食を食べ始める。

一面の記事は、ヨーロッパで起こった列車事故についてだった。

大きく載った写真には、鉄橋が裂けた様と溶けた数両の列車が写し出されている。大規模テロの見出しを見て、ユウは物騒な世の中だと他人事のように考えた。

「方法が変わっただけで、ちょっと前の爆弾テロとやってることは同じなのに、こうして騒ぎ立てるのは好きじゃないわね」

大きな事件だけに、テレビでもトップニュースとして扱っているらしい。テレビ画面を眺めながら、母親が苦言を呈していた。コメ

ンテーターが、危険思想と禁止技術の結びつきについて言及している。

「やっぱり複雑な気分になるわね」

そもそも禁止技術という呼称が差別的だろう　ユウはそう思う。時代が変われば、世の中の仕組みも変わる。社会の仕組みが流動的であることは、母親は三度目の世界大戦で知ったと云う。ユウは禁止技術で知った。

気分の良いものでもなかったので、ユウは話題を変える。

「そういえば、定期試験、今回も一位なら、この一年間ずっとトップだったことになるよ」

「それは、まあ、素晴らしいことね」

並の親ならば喜びそうな話だと思っただが、さらりと受け流される。母親は鼻歌まじり、再び踊るような足取りでキッチンへ向かった。

「昨日ね、お買い物でばったり上野君のお母さんに会ったんだけど、ユウちゃんのこと、すごく誉められたわ。成績は良くて、色々なクラブから助っ人を頼まれるぐらいに運動もできて、礼儀正しくて、女の子にもモテモテで……」

「母さんは、的確に俺の嫌がる言い方をするよね」

ため息混じりにユウが云えば、くすくすと笑い声。

「そうね。お母さん思っただけど、そんな周りの評価なんかより、身体の方が大事よ。今回の試験も、一位を取ったから、それで何か良いことがあるわけじゃないでしょう」

「成績優秀者は、奨学金とかあるよ」

「あら、それなら頑張っただけじゃない」

態度がくるりと一回転した。

その豹変に、ユウは肩を落とす。

別にお金に困っているわけでもないだろう　と、家を出た後、考えた。仰ぎ見た我が家は、静観な住宅街の中でも、十分に立派で大きい。父と母、息子一人の三人家族が暮らす分には、むしろ部屋は余り気味だ。これまで家計が逼迫したという話も聞いたことがな

い。

だから、母親の言葉は単なるジョークである。ユウにはわかっている。あの母親は、自分の子が睡眠時間を削って勉強するような優等生であるよりも、赤点の答案を庭に埋めるぐらいの茶目つけあるタイプであることを望んでいる。

より正確に云うならば、無理をするよりも、あるがままであることを望んでいる。

しかし、それは、無理な話だ。

ユウはもう、一年前には戻れない。

「行つてきます」

見慣れた町並み、風景。小学生の頃と変わらない通学路を歩みながら、途中、曲がり角のカーブミラーに目をやった。湾曲して写り込む姿は、確かに中学二年生、十四歳の自分のものだ。

この一年で、随分と身長が伸びた。

顔立ちも、やや幼さが抜けた。そんな風に、ユウは自覚している。眼差しが陰しくなった。弱気を隠すようになり、作り笑いが上手くなり、振る舞いを考えるようになった。「子供らしく」という母親の方針で、常に短めに切っていた髪を、以前よりも長くしている。

そういえば、忙しく歩くようになった。

やがて町の中心に行き着く。

青鳥町の中心　そこに位置する七守学園は、ユウが物心ついた頃から通っている学校である。幼稚園から大学までを広大な敷地におさめた学園は、学生の総数が三万を超える巨大な教育機関だった。多くの同級生と同じく、ユウもエスカレーター式に中等部まで進学してきた。

「おはよう」

級友達に声をかけながら、ユウは教室に入る。期末試験も大詰めの日、普段よりも早く登校した級友達は、粛々と勉強を続けていた。

窓際が一番後ろという特等席から、ユウは皆の様子をうかがう。

その後、周囲に倣って教科書を取り出すと、そのまま顔を隠して、あくびをした。

夜遅くまで起きていたせいだろう。夜は眠れないというのに、いざ朝になれば途端に眠気が遅いくる身体の不調を、呪わざるえなかった。

毎晩、遅くまで勉強を続けた理由は、なにも良い成績が欲しかったからではない。眠れない そんなシンプルな理由で、ユウは夜遅くまで起きていた。気まぐれに読書をして、音楽を聴いても、何の気晴らしにもならなかった。机に向かって教科書を開いていたのも、自分を誤魔化すポーズに過ぎない。

教科書よりも、机上に置いたデジタル時計を眺める時間の方が多かっただろう。

日付と時刻、タイムリミット。

心を占めるのは、彼女のことばかりだ。

「さあ」

歓声。

幾人もの叫び声。

「夏休みだ」

正午間際。

七守学園中等部、二年一組の教室。

最後の試験が終了した瞬間、誰かの叫び声と共に、教室は花火の爆ぜるような歓声に包まれた。ユウがため息と共に見やれば、補修や追試の常連組ほど、これからバンジージャンプにでも挑むような昂ぶりを見せている。夏休みという誘惑に全神経を傾け、試験結果という目前の不安から逃れようという心情が透けて見えるようだった。

た。

「おいおいおいおい、相馬君」

「気持ち悪い。なんだ、その呼び方？」

「余裕だな。さすが、余裕だな」

試験から開放された途端、一人の友人が勢いよくやって来る。

「ユウ。ユウ様、お願いします」

横柄な態度が一転。

拝まれた。

「どうか、俺を赤点にしないでください」

「それを俺に云ってどうする」

「赤点で補修なんてなったら、次の大会に出られないんだよ」

中学校に入ってから悪友である上野カズユキは、陸上部に所属していた。短めの髪に、細めの筋肉質な体つきは、さながらスポーツマンの見本のようなものである。唯一、金に染まった髪色が、一昔前の中学生男子のイメージとは異なるらしい。そうした親世代の感覚は、ユウにとっては理解しがたい感覚だった。

「来年は優勝を目指せよ」

「もう出られない前提か」

カズユキが机を勢いよく叩く。

反射的に、ユウもカズユキを勢いよく叩いた。

「だから、俺に頼んでも、どうしようもないだろう。試験が始まる前だったら、勉強を教えてやることもできたけれど、そもそもお前それすら拒否したはずだ。『試験の日に隕石が校舎に落ちる確率に掛ける』とか自信満々に云っていたのを覚えているぞ。いや、本当、その瞬間の滑稽さと虚しさは酷かった」

カズユキは胸を押さえて、苦しそうに涙を流している。

涙の理由は、親友の説教に感動したのか、鳩尾にパンチを受けたせいなのか。おそらく前者だろうと、ユウは想像する。

「だって……」

カズユキは絞り出すように云う。

「だって、勉強したくねえもん」

ユウは絶句した後、カズユキの頭をはたいた。
しばし、沈黙が虚しかった。

「それで、だ」

一呼吸ついた後、カズユキは話を再開する。

「どうかしてくれ」

「無理だ」

「無理じゃない」

「いや、無理だろ」

終わった後の試験を、誰がどうにかできるというのか。

「お前ならできるだろ」

若干癩癩混じりに、カズユキが叫ぶ。

「お前が一声かければ、この学園の先生は何でも云うことを聞く
て噂だぜ」

「俺、何者だよ」

「代理だろ」

当たり前のように、カズユキは云った。

その言葉に、ユウはため息をついて、天を仰いだ。

この一年で耳に馴染んでしまった『代理』という二文字を、ユウは無言で噛みしめる。瞬間、狙ったようなタイミングの良さで、別の級友が「代理、テストどうだった？」と叫んでくる。曖昧な笑みと共に、ユウはひらひらと手を振ってそれに答えながら、もはや『代理』と呼ばれることに抵抗がないことを自覚した。

「もう、代理があだ名だよな」

カズユキがしみじみつぶやく。

「やめろよ。ただ生徒会長代理ってただけだろ」

「いや、お前、それだけじゃないだろ」

カズユキが指折りながら数えていく。

「俺が知っているだけでも、五つの部長に四つの委員長の代理だろ？」

「もう数えたくもない」

正確には、他にも非公式な団体やプロジェクトの代表代理を含めれば、足の指を加えても足りなかった。点数稼ぎのため、学級委員長やクラブの部長を掛け持ちする優等生は何人もいるが、ユウの現状はその範疇にない。

「そう、代理だからだよ」

カズユキは勢いづいて云う。

「それだけの仕事やってるから、お前の云うことは先生たちも無視できないって話だぜ。実際、お前が意見して変わったこと、たくさんあるだろ。野球部の練習スペースの話とか文化祭の中止撤回とか、旧校舎の建て替えも……」

「いや、それ、買いかぶり。俺はあくまで『代理』として、それぞれの立場で必要なことをやっているだけで、それはたぶん、俺以外の人間がやっていても同じ結果になっただけのこと。それをただ単に、一人の人間が全部やっているから目立つただけだよ」

「いや、一人でやれてるから、異常なんだろ」

ユウはこの一年を振り返る。

忙殺という言葉の意味を、肌で実感するような一年だった。目の前に地平線まで続くように、『問題』という名の何重もの壁が立ちはだかつている。時に乗り越え、時に叩き壊し、とにかく目の前のことだけを考えて突き進んだ。しかし、次から次へと課題は舞い込む。人が活動している限り、トラブルに暇はないのだと知った一年でもある。

「試験の点数を改竄するなんて、どんな『代理』の仕事の内にも入ってないな」

「やっぱりダメか」

カズユキは大きなため息と共に、天を仰いだ。

どうやら、最初から本気で云っていたわけではないらしい。あまりに芳しくない試験の出来栄に、多少の悪あがきと気分転換がしたかっただけなのだろう。

「実際、そこまで悪いのか？」

「微妙。赤点になるかどうか、ボーダーぐらい？」

「まあ、補修日程が大会と被らないぐらいは、頼んでおくよ」

その一言に、カズユキは勢いよく飛び上がる。

「まじで。まじか。さすが、ユウ。いや、ユウ様」

「テンションあげるな。鬱陶しい」

一転して晴れやかな顔になるカズユキを横目に、ユウはため息をつく。

カズユキが怪訝そうな顔になり、「まさか、お前、試験悪かったのか？」と尋ねてくる。ユウは無言で首を振って「試験はどうでもいい」とつぶやいた。「どうせ一位だし……」と付け足せば、カズユキが歯ぎしりした。

「じゃあ、なんでそんなに暗いんだよ。夏休みだぜ。輝ける夏休みだぜ」

「夏休みだけど、特に輝いては見えないな」

「どうして？」

「色々と面倒が多いからな。『代理』の仕事や、それに……」

携帯電話が振動した。

ポケットから取り出せば、『メール1件』の表示。

「誰？」

と、カズユキ。

メールを開く前に、ユウは言い当てる。

「『代理』の元凶だよ」

差出人欄に踊るのは、幼なじみの名前。

「カズ」

「ん？」

「俺は今、生徒会長『代理』だったり、委員長『代理』だったり、部長『代理』だったり、まあ、色々な『代理』をやっているわけで、そのせいで、あだ名まで『代理』になりかけているわけだけ……」
誰にでもわかる異常事態。

一人が掛け持ちするには無理のある肩書きの数だが、この世には、『無理』や『不可能』という言葉が泣いて逃げ出す少女が、一人だけ存在した。

入学式の翌日、当時の生徒会長を引きずり降ろした。

誘われる部活動を拒まず、手当たり次第に入部した。

立候補がない仕事には、「じゃあ、僕がやるよ」とへらへら笑って手を上げた。

彼女は、中等部進学と同時に、多種多様な団体、組織、活動に参加し、当然ながら、その全てでトップの位置に座ることとなった。勿論、十数年の付き合いであるユウには、予測できた事態だった。彼女が身を置く環境としては、遊びのようなものだ。彼女は涼しい顔をして、役目をこなすだろう。彼女は呼吸をするように当然に、皆を幸せにするだろう。

だから、ユウは何も心配していなかった。

だから、このような事態になるとは、欠片程も想像していなかった。

「結局、俺は、彼女の『代理』なんだよな」

「お前……」

カズユキが呆然とつぶやく。

「お前、そのメール、もしかして……」

カズユキが肩を震わせる。

「そのメール、伊吹さんからだな」

教室中に響きわたる大声で、カズユキは叫んだ。試験後の弛緩した空気の中、随分と騒がしかった教室が、水を打ったように静まり返る。カズユキの大声に驚いたわけではないだろう。皆、おそらく、その名前に反応したのだ。

伊吹カナ。

静寂の中、誰かが、ささやくようにその名を口にした。

一度、火がついてしまえば、後は燃え広がるだけだった。ざわめきは教室いっぱいに広がり、ただ一人、ユウだけが頭を抱えて沈黙

した。

「ユウ、お前」

カズユキが怒声を発した。

「やっぱり伊吹さんに会えるんだろ。会ってるんだろ？」

カズユキの一声は口火を切っただけに過ぎず、前から後ろから、級友たちの追求の手が迫ってきた。「伊吹さん、元気なの？」「家にいるの？」「入院しているって噂もあるけど……」「転校しちゃうって噂、マジ？」「ねえ、なんで学校に来ないの？」「ユウ、事情知ってるんだろ」「教えろ」「ちゃんと話せ」「そもそも、本当に付き合ってるのかよ」

彼女　伊吹力ナ。

七守学園のヒーローにして、最終兵器。学校内でその名を知らぬ者はいないのではないかと疑われるほどの有名人。名前だけでなく、特徴的な容姿から、一目見た者に忘れられることもない。無数のあだ名を持ち、数多の通り名を付され、冗談のような伝説をずるずると引きずりながら、輝ける未来に続く栄光の道をスキップしていた彼女。

ただし、現在、不登校。

昨年度の夏休み以降、彼女は一度も学校に登校していない。

よほどのことがあったらしい。軽々しく口にしてはいけないほどの何かがあったらしい。彼女に変調を来すほどの出来事とは何だろうか。あれなのだろうか。やっぱりあのことなのだろうか。でも、わからない。なんだろう　と、噂が噂を呼ぶ形で、いつしか、彼女のことは触れるのも躊躇するような、湿った雰囲気漂わせるものとなった。

『ねえ、相馬君』

数えるのも馬鹿らしくなるほどの回数、ユウはこっそり尋ねられた。

『付き合ってたあなたなら、何か知ってるんじゃない？』

そんな風に、誰かが云った。

『幼なじみのお前なら、何かわかるんじゃないのか?』

そんな風にも、誰かは云った。

ユウはいつでも、苦笑して、言葉を濁して、『何も知らない』『何もわからない』という顔で、ため息をついてきた。ユウの方から彼女の名を口にするようなことはなかった。七守学園では、彼女と一番親しかったのがユウであることは有名な話だ。そんなユウが口を閉ざすことで、伊吹カナの存在は、ますます安易に触れてはならないものとして、タブーとなったのだ。

一年間。

思えば、日々、好奇の視線にさらされてきた。

会話の端々で話題に上りそうになれば、ユウは笑顔で誤魔化した。

『ねえ、どうして……』

誰もが、同じことを云う。

『伊吹さんが、学校に來ない理由って……』

誰もが、同じ疑問を感じていた。

『やっぱり、妹が亡くなったから?』

ユウは、沈黙を貫いた。

口を閉ざし、耳を塞ぎ、目を瞑り、心を消し、彼女など最初からいなかったように振る舞った。

それは、彼女のためであり、自分のためであり、彼女の妹のためだ。

ならば、この状況は、その反動ということである。皆の好奇心や疑問を解消せず、ただ煙に巻いてきたことで、いつしか我慢の限界が来ていた。それを見抜けなかった己の未熟さを恥じつつ、ユウは周囲を眺め回す。

級友たちの顔が、よく見渡せた。

教卓の上は見晴らしがいい。

「さすがに、教卓の上にまで追いつめられるとは予想外だった」
感極まってつぶやいた言葉も、怒声にかき消される。

「おい、ユウ」

目の前には、暴徒と化した級友たちが、海原のように広がっている。足を取って教卓の上から引きずり降ろそうとする無数の手。それらを蹴っ飛ばしながら、ユウも吠える。

「落ち着け」

だが、既に言葉は意味を失っている。もはや騒ぐことが目的になっているのではないかという一団を眺め、ユウは肩を落とす。

「なにをしてるの？」

突如響いた素っ頓狂な悲鳴に、教室が静まり返る。全員の視線が、教室の入り口に向いた。目をまん丸にして呆けていた担任が、我を取り戻したように、一步前へ出る。

「相馬君、教卓から降りなさい」

担任である彼女、市井ユカリは今年度から赴任したばかりの新任教諭である。特徴的な生徒の多いことで知られる七守学園でも、とりわけトラブルメーカーの集まった二年一組を任され、最初の頃はげっそりとやせ細っていたものだ。そんな彼女も一学期を乗り越え、やや遅くなったようである。理解できないであろう状況を前に、教師として毅然と振る舞う彼女の姿に、ユウも多少の頼もしさを感じた。

「しかし、先生。この状況で教卓から降りると、八つ裂きにでもされかねない勢いなんです……」

「だったら、相馬君以外のみんなは、先に自分の席に着きなさい」

その一声で、皆、興を削がれたような面もちで自分の席へ向かう。危険がなくなったことで、ようやくユウも教卓の上から飛び降りる。

「先生、良いタイミングでした。助かりました」

「相馬君、ちゃんと教卓の上を拭いておいてね。それから、後で職員室に来ること。とりあえず、今は席に着きなさい」

頭痛がするかのよう額を押さえながら、ユカリは云う。おとなしくその言葉に従って、ユウも自席へ着いた。未練がましい皆の視線を受け流す意味でも、窓の外へ目を向けた。

ホームルームが始まる。期末試験を終えた以上、今学期も残すと

ころは終業式、一日だけだ。とりたてて重要な連絡事項があるわけでもなく、些細な事務連絡と諸注意が続く。

ユウの意識は、既に別の方へ向いていた。学校が休みとなれば、諸々の『代理』の仕事はあるものの、自由に使える時間は格段に増える。

残り、十日。

伊吹カナの誕生日、八月一日。

それまでにできること、やらなければいけないことは何か、ユウは考える。

得られた答えは、とてもシンプルだ。

とりあえず、誕生日プレゼントが必要だろう。

それが世界一の難問であることを、ユウはよく知っている。

第2話「獄中少女」

中学生女子の誕生日プレゼントが、どうして世界一の難問足りうるか。

学校からの帰路、ユウは炎天下に揺らぐ意識の中で自身に問いかける。思春期相応の悩みを、世界一の難問へ昇華させる、その単純明快な理由。自宅に近づくにつれて、答えは圧倒的な現実となって迫ってくる。

自宅の向かい側、非現実な現実が、そこにある。

伊吹家について語ろう。

そもそも青鳥町には、そこで暮らす者ならば誰もが知る有名スポットがいくつが存在する。その一つは、ユウも通う『七守学園』である。文字通り町の中心部に位置し、特筆すべき産業もないこの町を学園都市として盛り立てている。大学生はもとより、中等部や高等部においても、遠方から遙々この地にやって来て一人暮らしをする若者は数多い。巨大な学園は、まさに町の心臓とも云えた。

そんな七守学園と同等に、伊吹家もまた、青鳥町の住人ならば知らぬ者のない有名スポットだ。名の知られている理由は幾つかあるが、端的な例をひとつ挙げるとすれば、その広さだ。

個人宅であるが、伊吹家は、ひとつの学校に匹敵する程に広い。今、ユウは門扉の前に立っている。

右を見れば、塀は果てがなく、左を見ても、やはり果てがない。ユウの自宅から真正面に、伊吹家の正門はそびえている。見上げるだけで首が痛くなりそうな、大きな鉄門扉。どんないたずら小僧でも、よじ登るのをあきらめる高さだ。

門を抜ければ、平原が広がる。

平原。

初めて足を踏み入れる者は、多くが一度、背後を振り返る。くぐったばかりの門の先に、確かに青鳥町の住宅街が広がっているのを

見て、自身の正気確かめるのだ。

そして、あらためて、そこが大自然の平原などではなく、ただの庭であることを認識する。邸宅は何処だろうと目を凝らし、門から続く小路の果てに、ようやくそれらしい影を見つけることになる。

庭は四季折々に風情を持ち、邸宅までの道中も変化に富む。川が流れ、橋を渡り、林を抜け、一面の花畑を眺めた後に、ようやく屋敷へたどり着く。

伊吹家。

一個人の邸宅としては不必要な、広大さ、豪奢さを極めた屋敷を見て、ほとんどの者が同じ疑問を抱く。何を生業にしているのか、と。何を成せばここまでの財を築けるのか、と。

だが、真逆の思いを抱く者たちがいることも、ユウはよく知っている。端的に云ってしまえば、一般人ではない者たちだ。彼らはこんな風に考える。

世界を掌で転がす伊吹家がこんなものか、と。

その言葉、“世界を掌で転がす”という表現が、さすがに誇張されたものであることぐらい、ユウもわかっている。伊吹家が掌握しているのは、どれだけ多く見積もっても、世界の半分程度だろう。所詮は子供の見立てでしかないが、十四年間通い詰める中で見聞きした所と、今の社会の情勢を思えば、予想は大きく外れていないはずだ。

「ユウ様、お疲れ様でした」

屋敷の玄関の前で、一人の女性が待っていた。

「お疲れ様？」

「期末テスト、今日が最終日だったとお伺いしております。聞くまでもないことですが、出来はどうでしたか？」

そう云われるまで、本当に受けたばかりの試験のことを忘れていたユウである。ただ、あらためて問われたためか、唐突に、最後の科目で間違いを犯したことに気がついた。

「社会で一問、間違えました」

「あら、珍しいですね」

「世界史だったんですけれど、アメリカ問題についての記述を、教科書に載ってないことまで書いてしまいました。ここの家で、詳しく教えてもらい過ぎたせいですね」

ユウがため息をつけば、相手は少し笑った。

アメリカという国については、当然ながら、社会科目の中でも特に大きく取り扱われる部分だ。地理でも歴史でも、試験における頻出箇所と云える。しかし、その割に、教科書に載せられている情報は“薄い”と思うユウである。教科書にある内容は大枠ばかりで、実情を伴わない。それどころか、明らかな間違いまで存在する。

もっとも、学校の教育が真実を教えるばかりでない　という、ごく当然の知識は、ユウも持っている。特に歴史などは顕著だ。誰かにとって不都合な真実は、嘘で塗り替えられる。その“誰か”が伊吹家である可能性も、十分にあるのだろう。

伊吹家に出入りしているからこそ知れる真実が、世間一般に流布している事実と異なるからこそ、ユウは満点の機会を逃したということだ。反省すべきは、真実と、教科書に書かれた事実を混同したまま、整理していなかった事だ。つまり、勉強不足。

「いえ、そもそもユウ様に混乱を起こさせるような問題は、その問題自体が悪かったのです。試験を担当した社会科の先生には、罰として減給していただきましょうか」

さらにと怖いことを云われる。

ユウは苦笑して、話題を変えようとする。

「ところで、サヨコさん」

女性の名は、サヨコ。

三千字サヨコ。

漆器のように艶やかで、滝のように豊かな黒髪を、腰程まで長く伸ばしている。立ち居振る舞いに無駄な所作はなく、炎天下の中でも、涼しい顔だ。おそらくユウが門扉の外から来訪を告げ、敷地に足を踏み入れた瞬間から、邸宅の前で待っていたのだろう。

気を使ってくれなくてもいい　と、ユウはいつも云っている。しかし、彼女は微笑と共に首を横に振るばかりだ。彼女は一本の芯を胸の内に抱えている。自らの仕事に、揺るぎない誇りを持っている。

屋敷の敷地内にいる限り、彼女は常に漆黒の衣装だ。

伊吹家専属にして直属。

職業、メイド。

「わかっております」

サヨコが、玄関の扉を開く。

「前回の訪問日より、七日と二十二時間六分が経過しております。制限はクリア、問題もございません。どうぞお入りください」

深い一礼と共に、ユウは招き入れられる。

「お嬢様がお待ちです」

お嬢様、と。

それが誰をあらわすのか、考えるまでもない。

さて、当初の問題に還ろう。

ここに、世界一の難問がある。

世界一のお嬢様に贈るべきプレゼントとは、果たして何であるべきか。

答えがわからないならば、訊くしかない。

「何かほしいもの、あるか？」

しかし、そんな問いかけに意味がないことを、ユウはよくわかっていて。だから、すぐさま自嘲的なため息をついた。もともと答えを期待したわけではなく、ただ単純に、ユウは疲れていたただけなのだ。

「そうだね」

彼女の答えは、やはり素っ気ない。

「本はいらない……かな？」

そんな上の空の返事に、ユウは再度のため息をつく。

埒があかないことに、内心で唸った。真夏の炎天下、わざわざ足を運んで、何も得るものがないのも虚しい。何より、ヒントのひとつでも見つけなければ、ユウはそれこそ思考の迷宮から抜け出せない。

頭上を仰いだ。

彼女の声は、遙かな高みから降ってくる。

まるで自分が小人にでもなったかのように、ユウは錯覚する。この部屋に習慣的に通うようになって、もう随分経つというのに、感覚はまるで馴染んでくれなかった。

見えるものは、本。

視界のほぼ全て、本。

壁一面に、天井まで続く書架は、見上げていると頭がくらくらしてくる。この部屋の色彩は、そのほとんど、本の背表紙だ。重厚なハードカバーから、薄いペーパーバックまで、とりとめもなく、雑多に詰め込まれている。天井までの距離が、まるで地平線を見るかのようにだった。

そんな絶壁の最上段の本を取るため、立てかけられた長い長い梯子の先端に、彼女はいる。

この空間に最もふさわしい名前は、図書館だろう。

ここを牢獄と呼んで、誰が信じるだろうか。

「おい」

何度か呼びかけても、今度は返事もない。

時折、本が降ってくる。

梯子から降りることもなく、手に取ったその場で読み捨てられた本は、さながら死体のように周囲に散らばっている。ユウも別段、片づけたりはしない。ため息と共に振り返れば、既にこの部屋が、

台風の通り過ぎたように散らかっていることがよくわかる。

真っ赤な絨毯の上に、無数に転がる知識の亡骸。

今更、全てを片づけることなど不可能だろう。

結局、ユウは待つしかなかった。見上げることに疲れた首をさすりながら、部屋の中央に向かって歩き出す。四方を巨大な本棚に囲まれて、まるでその圧力に押されたかのように、ちょうど部屋の中心部、机とベッドが置かれている。

この牢獄にあるものは、それだけだった。

本と机とベッド。

今の彼女に与えられた世界は、それだけなのだ。

いや、違う。

もうひとつだけ、与えられるもの。

「俺がいるか」

自らのつぶやきに、ユウは盛大にため息をつく。

では、なぜ自分がここににいるか　と自問すれば、それには単純な答えが導かれる。つまり、相馬ユウは彼女の幼なじみだからだ。

答えは、それ以上でも、それ以下でもない。

物心ついた頃からの付き合いである。ベビーベッドから隣に並び、真向かいに建った家に住み、影のように寄り添いあって、互いに離れることのできない関係を築き上げてきた　そんな、ただの幼なじみだ。

ため息。

ベッドに腰掛けて、ユウはしばらく待った。本の雨はやむことなく、ぱらぱら降り続けている。それ以外、時が止まってしまったように、変化がない。何もしない苦痛に負けて、近くに落ちていた本を拾い上げてみたが、そもそもこの言語で書かれているかもわからず、ユウはあきらめてベッドに倒れ込んだ。

目は開けたまま。

高い天井を見上げる。

その先、どれだけ地の層を抜ければ外に出られるのか、考えてみ

た。この場に通じる唯一のエレベーターが、下降を開始してからその扉を開くまでの長い時間を思い出す。爪が剥がれ、肉が削げるほど土を掻いたとしても、人の手で地上まで掘り進むことは不可能だろう。

それはおそらく、彼女と云えども。

「完璧な牢獄」

寝返りと共に、ユウはつぶやく。

彼女がここに囚われて、もう一年近くが経つ。

目の前に、白い指。

指は、本を支えている。

太陽の光を浴びることもない為か、その指は随分と白い。爪は短く切られているだけで、化粧気はない。片手で本を支えながら、もう片方の手が、規則正しくページを繰る。その動きが、機械のようだ。ゼンマイ仕掛けの人形のように。白い指に、血が通っていることが、不思議に見えた。ユウは一瞬、それが誰の手なのか、考えた。虚しい。

どうやら、ほんの一時、眠っていたようだ。

「夢でも見ていた？」

本の向こう側から、声が降る。

誰の声だろう　と、ユウは疑問に思う。そんな気の迷いは、眠気の霧が晴れるのに併せて、さっと消えていく。

「いや、夢は見えてない」

「その割には、うなされていたよ」

「覚えてない」

嘘は云っていなかった。

夢を見ていた覚えもなければ、うなされていた記憶もない。ただ、それほど深く眠っていたわけではないと、体の感覚から想像がつく。そもそも、ユウはあまり夢を見ない体質だった。

見たとしても、忘れているのだろう。何かの本には、人は誰でも夢を見ているが、そのほとんどは目覚めと同時に忘れているのだと書かれていた。そしてまた、夢は、記憶の整理のために発生するとも。

心を片づけるため。

ならば。

心など、一年前に失われているのだから……。

「あんまり、夢は見ない」

「そうか。僕は、よく見るよ」

正反対の答えが返る。

「ああ」

ユウは呻きにも似た相づちを返し、彼女に、夢を見る程度の心が残っていることに感動する。

「ずっと前から、同じ夢ばかり見るとか云ってたよな」

「そうそう、悪夢ってやつさ」

弾むような声で云うものだから、深刻さは微塵もない。

「僕は断罪されている」

どこか歌うような口調で、滑らかに、独り言のような言葉が続く。「僕はギロチンにかけられる罪人で、どうしてか裁かれることだけを理解していて、なぜか理由もなく観念していて、不思議なことに悲しみも何もなく、ただ、そこにいる」

「どこに？」

「さて、どこだろう。たぶんこの世ではなくて、あの世でもない。中途半端などこかだよ。試しに表現するならば、何も描いていないカンパスだ。白いペンをぶちまけたコンクリートだ。すべて選択した後にデリートしたワードファイルだ」

「つまり、真っ白というわけだ」

「その通り。僕は、真っ白な世界に立っている。どこにも何も無い。僕だけがいる。およそ状況というものが何も与えられていないその世界で、僕は、これから自分が首を斬られるという確信だけを抱いて、そこにいる」

そして　と、彼女は続ける。

「何かがやって来る。何か、と表現したけれど、僕はそれが何か知っている。それは僕を裁くものだ。首を斬るものだ。殺すものだ。この殺しても死なないような僕を、殺せるものだ」

それはつまりーと、彼女は続ける。

「僕のことだ」

僕を殺せるものは、僕だけだ。

そう云って、彼女は本を脇に置いた。

「僕が、僕を殺す。それが、僕の夢だ」

伊吹カナ。

まず、誰もがその特徴として挙げるのが、真紅の髪だ。癖のない真っ直ぐな髪は、根本から毛先まで、燃えたぎるような赤色に染まっている。町中を歩けば誰もが一度は振り返る。一目見た者は、その鮮烈な赤色を忘れることはないだろう。

真紅の髪は、それだけでも十分に奇妙だったが、それを大人と呼ぶには幼すぎる十四歳の少女がしているものだから、違和感はさらに際だつた。

だが、その髪色が、彼女に似合っていないかと云えば、そうではない。

真紅の髪に負けず劣らず、彼女は際だった容姿を持っていた。美しいと云えば、そうである。可愛いと云えば、そうである。しかし、異様と云えば、異様でもあった。

瞳が大きい。まん丸な黒い瞳。洞穴のような、底なしの瞳である。目を合わせた者を捉えて離さず、気を抜けば、魂を根こそぎ吞まれてしまうような瞳である。

人形のような　と、形容したならば、それは美しさの例えであ

る。彼女にも、その比喻はぴたりと当てはまる。しかし、そこには、人形のように、生き物でないような思いを抱かせるという意味合いを含む。

常人離れしている。

人間なのかも、疑わしい。

だから、異様な真紅の髪も似合う。

目の前に、のぞき込むような格好で、彼女の顔がある。ゆらりと流れた真紅の髪が、ユウの頬をくすぐった。白い指が、ユウの額にかかった髪を撫でている。

「それで、僕に膝枕されている感想は？」

決して深い眠りではなかったと云うのに、気づかせず、起こさず、膝枕の体制を作った彼女の技量に感心するユウである。

頭は、彼女の膝の上。

目の前には、彼女の見下ろす顔。

この状況を甘受していると、ろくな目には合わないだろうと、長年の勘が告げていた。そのため、ユウは急いで起きあがり、ベッドの縁に腰掛けた。

彼女は、ベッドの上で正座したままだ。

「時は金なり」

と、彼女。

「残り時間もあとわずか。一週間に一回、一時間だけという限られた面会時間を、ほとんど昼寝で過ごした君が、僕に云うべき台詞は何かな？」

ユウは腕時計に目をやり、この部屋にいられる時間が、もう残り数分しかいないことを確認した。

彼女は囚われの身であり、ここは牢獄である。

ならば、自由という状態からは程遠く、人と会うことにも厳密なルールが存在している。彼女が他人との接触を許されるのは、一週間に一度だけ、それも一時間だけである。

「もしかして、怒ってる？」

「君がそう思うならば、そうだろうさ」

むしろ、上機嫌のように、にこにこ笑う彼女が怖い。

「じゃあ……」

云うべき台詞は、謝罪の言葉だろう。

しかし、そんな常識的なセオリーが通じる相手でもないことは、わかりきっている。一拍の間に、ユウは思考する。打算と妥協。力チリと歯車が噛み合うような音がして、ユウは子供に向けるような笑顔を作り、こう云った。

「お詫びも込めて　誕生日プレゼントは、何がいい？」

古めかしい木造りのドアを開けて、ユウは廊下に出た。蛇のように細長い廊下の奥に、エレベーターの入口が見える。慎重に一步を踏み出すと、機械的な認証音が鳴った。一步進むごとに、背後でシャッターが閉ざされていく。

最後に、エレベーターの直前で、ユウは立ち止まる。

振り返れば、すぐ目の前で、鋼鉄の扉がロックされるところだった。彼女の姿どころか、その部屋の扉すら、もう見ることはできない。

やれやれと肩を竦めて、ユウはエレベーターに乗り込んだ。

階数の表示もなければ、操作パネルすらないエレベーターは、中に入った瞬間に動き出す。ゆるやかな上昇感覚。一人きりの静寂に支配される数秒間は、あの牢獄と地上との距離を否応なく思い出させる。このエレベーターシャフトだけが、双方を結ぶ唯一のルートだ。その徹底された管理体制は、完全なる防備を実現させると共に、彼女の脱走を絶対に許さない。

「さて、困った」

およそ非現実なこの場所で、ユウは年齢相応な、中学生らしい悩みに思いをはせる。幼なじみの望むプレゼントをどうやって準備しようか、などと。

「お帰りなさいませ」

エレベーターが停止し、ドアが開くと、メイドであるサヨコに迎えられる。

流れるように艶やかな黒髪が、その黒のメイド服にはよく似合う。踵をそろえ、背筋を伸ばし、彫刻のように凜とした出で立ちながら、威圧感はない。目を引く美しさを持ちながら、どこか影のように風景の中に溶けている。ただし、親しい者には気兼ねなく向けられる笑顔は、まるで春のように温かく、彼女を印象づける。

エレベーターから一步外に出ると、そこは大邸宅だ。

いや、大邸宅という言葉などでは、その場をいいあらわすには不十分だろう。例えるならば、そこは城のように豪華で、迷宮のように複雑で、要塞のように堅牢な場所だ。およそ常人が想像もできない複雑怪奇な場所だった。

「サヨコさん、いちいち迎えはいいですよ」

サヨコは、そんな大邸宅を任される数少ないメイドの一人である。屋敷の主が不在の現在は、実質、その管理に関して全権を任されていると云ってもいい。メイドという肩書とは裏腹に、実は少なからずの権力を握っていることになる。

とはいえ、その物腰は徹底している。

「いいえ、これもお勤めです」

笑顔のままで、サヨコはまた頭を下げる。

「私の存在は、何よりもお嬢様のためにあります。そこに命を賭すことが、私のお勤めです。ならばこそ、ユウ様にお力添えをするのが、現在の最も重要なお仕事といっても過言ではないのです」

熱っぽい口調に、ユウはため息をつく。

「でも、俺は、ただの幼なじみです」

それ以上でも、それ以下でもない。

「存じております」

そして、それを知らないサヨコではない。

ユウがまだ随分と小さい頃から、サヨコはこの屋敷に勤めている。少なくとも、十年近くの付き合いになる。下手な学校の友人などよりは、遥かに気心も知れている仲だった。

「しかし、唯一、お嬢様が認めた方でもあります」

サヨコはそんな風に云う。

「事実、お嬢様の部屋に入れるのは、ユウ様だけなのですよ」

その言葉に、偽りはない。

屋敷の主、すなわち伊吹家の当主は、ほぼ一年間、娘を監禁したまま諸外国を飛び回る生活で、ここには帰っていない。屋敷の管理を任されているサヨコと他のメイドも、カナと接触することは許されていないのだ。

「ユウ様、この後どうされますか。よろしければ、ご自宅に帰られる前に、食事だけでも……」

「サヨコさん」

言葉を遮り、ユウはサヨコを見る。

「電話を貸してもらえませんか」

サヨコが息を呑む。

ユウはため息をついた。

嫌なことは、早めに済ませしまった方がいい。

カナの部屋を出てから、エレベーターを降りるまで、そのわずかな時間を悩んだだけだが、あいにく答えは一つしか見つけれなかった。正攻法の正面突破が、必ずしも正答というわけではないが、今回、ユウはそうするしか方法を見つけれなかった。

電話をかけたい相手を告げれば、サヨコは既に予想がついていたためか、ただ顔を伏せて「わかりました」とつぶやいた。理由も訊かない所は、彼女の職業人としてのプライドかもしれない。

サヨコが携帯電話を取り出して、ユウの知らない誰かに命令を下している。取り次ぎが済むまでは、多少の時間がかかるだろう。ユ

ウはため息と共に、虚空に視線をさまよわせる。

牢獄で、彼女は。

『じゃあ、ね』

いたずらを思いついた子供のように云った。

『誕生日プレゼントは、デート一日でお願いするよ』

ユウは、サヨコから手渡された電話に向かい、最後に一度、呼吸を整える。会話をするのは、一年ぶりのことになる。

「もしもし」

電話の向こうには、屋敷の主がいる。伊吹家の主がいる。世界の半分を掌握する正義の体現者がいる。ヨーロッパ連合と第三共同体を相手にして、世界に対する支配の根を腐らせない化物がいる。

彼女を牢獄に閉じ込める、張本人がいる。

彼女の母がいる。

「お願いが、あります」

要求は、シンプルなもの。

一日だけの自由。

ユウには、その見返りとして支払える対価などない。だから、切々と頼み込む以外に方法はなかった。実際、いくら理由を付けた所で、白々しい気分になるのは否めなかった。ユウの心につつすら浮かんでくるのは、「どうしてカナは閉じ込められなくてはいけないのか」という根本的な疑問だった。

言葉を尽くした後、ユウは黙り込む。

電話の向こうから返ってくるものは沈黙ばかりだ。

「お願いします」

つぶやいたユウの言葉に対し、ようやく聞こえてきたものは、侮蔑を含んだ苦笑이었다。

「いいよ」

あっさり、と。

「外に出したいならば、一日ぐらい、かまわないだろう。君のしたいようにすればいい。どこへなりと連れていけばいいし、遊ばせれ

ばいい。それで、なにが、どうなるものでも、ないだろうさ」

しかし、ねえ、と。

「君は、どう思うかな」

撫でるような甘い声に、胸が焼けた。

「大丈夫と、思うかな」

電話を切ろう、とユウは思った。

このまま黙って聞いていれば、必ず後悔する羽目になる。そんな確信めいた予感に、胸の内がざわめく。必要な言葉は聞いた。これ以上ない結果を得た。ならば、すみやかに退散するべきだ。わかっている。わかつていたが、聞いてしまう。

「今年は、誰も、死なないと、いいね」

電話が切れた。

ユウはしばらく動けないまま、立ち尽くしていた。相手にすれば、ただのお遊びだ。可愛い子犬や子猫に、いたずら心でちょっかいを出すようなものだ。わかつていた。悔しくも、わかつていたが、ユウは齒ぎしりする。

胃の中が持ち上がる感覚。頭の中に、熱した鉄の棒でも突き刺されたような感覚。冷や汗。動悸。思い出したものは、悲しみでもなく、怒りでもなく、ただの恐怖だった。

八月一日まで、残りわずか。

タイムリミットが訪れる。

第3話「真紅の獅子」

彼女は、真紅の獅子だった。

黄金のたてがみの代わりに真つ赤なロングヘアをたなびかせ、肉を切り裂く爪の代わりにしやなかに細い指を突きつけ、強靱な前足で草原を駆け抜ける代わり、人混み溢れる街中を風のように歩んだ。あらゆる獣を怯えさせる吠え声は持たないが、秋空のように澄んだ声色で歌った。獅子が持つのは冷徹さと獰猛さを兼ね備えた、ネコ科の中でも特にぎらぎらとした瞳。彼女が持つのは、へらへらとした無邪気さの中に、世界の芯まで見抜くような洞察力に満ちた瞳。獅子は狩りをするが、彼女は狩りをせず、獅子は群れるが、彼女は一人だった。獅子は殺す。彼女は殺さない。

「やあ」

幸運にも、晴天。

雲ひとつない、夏の青空。

真紅の獅子は、この日、その爪と牙を隠し、王たる気配も空気にも溶かし、ご自慢のたてがみすら、鴉のような真つ黒へ染め変えていた。服装も、特徴のないベージュのシャツに、白いスカート。どこにでもいるような女子中学生が、だらしなく笑いながら、ユウの片腕に体を絡めてくる。

「その髪は？」

「サヨコが染めてくれた。お忍びで出かけるには、僕の髪は目立ちすぎるからね。なかなか見事だろう。僕は、ちゃんと自分のことをわかってるんだよ。わかっているからこそ、魅力を消すことだって造作もないのさ」

八月一日。

伊吹カナの誕生日。

「おめでとう」

「こちらこそ、デートに誘ってくれてありがとう」

スカートの端をつまみ上げ、カナは貴婦人のようにお辞儀する。

所作を押さえた見事な振る舞いだ、お辞儀を終えるや否や、天に向かつて大口を開け、声も大きく笑った。

「お嬢様」

その振る舞いを、屋敷のメイドであり、カナのお目付け役でもあるサヨコが咎める。しかし、カナは気にした風でもない。むしろ横柄な態度で、サヨコを横目で見やると、ひらりと片手を振った。

「ここまでいい」

これ以上は、と。

「付き纏うな」

屋敷の玄関である。迎えに来たユウと見送りのサヨコ、そしてほぼ一年ぶりの外出となるカナ。その三人だけの空間に、不思議な緊張感が漂う。大きく開いた扉から一步を踏み出し、カナは青空へ目を細めていた。久しぶりの陽光に向けて、太陽を撫でるように手を掲げている。

ユウは、サヨコの目配せに気づく。屋敷の門扉まで見送ることなく、サヨコは玄関の内側から扉を閉めようとしていた。扉が閉まりきる寸前、わずかに見えた瞳が訴えていた。

どうか何事もないように、と。

「さあ」

カナは大きな瞳で、猫のように振り返る。

「どこへ行くのか？」

小学校の二年生の時だった。

彼女は八歳だった。

教室の中で泣いている男の子がいて、その周りに仲の良い友人が

集まり、彼を慰めていた。さらに数人の女子がすぐ傍で、何があったのか尋ねて、憤慨する声をあげていた。遠巻きにしている者達も、気のない振りをしながら、こっそりと興味の視線を向けている。

泣いている彼は、当時流行していたカードゲームに夢中だった。その遊びに参加している者の中でも、とりわけ沢山のカードを集めているようだった。

その大切なカードを、彼は意地悪な上級生に取られてしまったのだ。

よくある話だ　と、ユウは思っていた。想像通り、まるでどこかで見たような味気なさで、事態は進んでいた。

「先生に言いましょう」

傍で事情を聞いていた女子が、大きな声をあげる。

優しさでも同情でもなく、その手に振りかざしたものは、おそらく正義感だろう。しかし、至極まっとうに聞こえるその台詞に、男の子は潤んだ瞳を向けた。彼女が高々と振り上げる正義の刃に対して、むしろその鋭さを恐れるように、身を縮ませていた。

誰もが立ち向かえるわけではない。ここで毅然と振る舞えるのなら、そもそも因縁をつけられた時に抗っているだろう。彼が教室で泣いていた原因は、大切なものを取られた悲しみだけでなく、それなのに戦えない己の情けなさもあつたはずだ。

煮え切らない空気は、歯痒さと共に、徐々に静かに白けていく。

じつとりと不快な空気を嫌って、ユウは一步離れた。

そして、動くこともせず、考えることもせず、ただぼんやりと眺めることに努めた。いや、正確に云うのなら、ユウは待っていた。見ている風を装って、上っ面だけその場に合わせて、心の奥底では、ヒーローが颯爽と登場する瞬間を待っていたのだ。

他力本願の癖がついたのは、いつからだろう。

それはおそらく、彼女と出会った時からだ。

自分が智恵を巡らし、力を尽くしても、口笛を吹きながら安々とそれを飛び越えてしまう相手がいるとわかったならば、本気を出す

ことも馬鹿らしくなる。

教室の扉が開く。

級友達は皆、首を糸で引かれたような素早さで、振り返った。

ユウはため息をついて、一拍遅れで、彼女を見た。真紅の髪の少女が、そこにいた。教室中の視線が、重たい槍のようになって、その小さな体躯に突き刺さっていたが、彼女はまるでどこ吹く風で、陽気に口笛すら鳴らしていた。

ユウは、彼女が人前にあらわれる瞬間が好きだった。

その登場には、一瞬の静寂と緊張がつきまとう。小型の草食動物の群れの中に、風が吹き込むような自然さで、大きな獣がやって来る。しかし、獣は敵意も見せず、殺意も見せず、ただ静かに、そこにいるだけだ。小さな者達が、それを無視できるわけがない。理解もできず、ぎょつと吞まれたような表情のまま、誰もが彼女に注目する。

そんな時、彼女はいつでも笑う。

へらへらと無邪気に、屈託なく笑う。

静寂も緊張も、一瞬に過ぎない。皆は、すぐさま幻影を忘れ去る。そこにいるものは、ただの普通の女の子であると云い聞かせる。急速に弛緩していく空気の中で、彼女はほんの少し、笑顔の奥から、いたずら好きの子供の顔をのぞかせる。

「ため息ばかりついていると、心が腐るよ」

彼女はいつも通り、まっすぐにユウの方へやって来た。肩を勢よく叩かれて、ユウは思わずよろめく。非難めいた視線を向ければ、「ごめんごめん」と素直に謝られる。

泣いている級友がいることにも、教室に漂う空気にも、彼女が気づいていないはずがないが、それらをまるで無視して、いつもの調子だった。

「まだ休み時間も残っているし、ほら、気分転換」

強引に背中を押され、ユウは廊下へ押し出される。皆の何か云いたそうな視線も、彼女を足止めする理由にはならないようだ。

「昨日ね」

休み時間も残りわずかなため、廊下は人気がなく、彼女のよく通る声だけが響いた。

「面白いものを見つけたの」

「そんなことより……」

ユウが先程の教室の空気に言及すると、彼女は「まあまあ」と意味のないことを云った。

そうして、ぶらぶら歩きだす彼女を追いながら、関係のない話ばかり続いた。黒板消しを先生の頭に落とすイタズラをやってみたい、今晚の夕食はなんだろう、新しくやってきたメイドが色々と大変、そういえば母親と一年以上会っていない、今日の給食のカレーはおいしかった、下校の時に寄り道するのがなぜ楽しいのか　等々。

ユウは時々、彼女の言葉に賛成し、反対した。

「でも、給食のカレーには辛さが足りない」

「それでも、おいしいものは、おいしいさ」

結局、反論したところで、彼女の意見に押し切られる。

くだらない話を続けながら、校舎間の渡り廊下を通り、階段で三階まで昇り、高学年の教室がずらりと並ぶ場所までたどり着く。彼女は躊躇することなく、一番奥の教室のドアを開けた。

六年生の教室だった。

授業の始まる直前だったためか、先生が来たと勘違いし、一瞬、立ち歩いている者が慌ただしく席に戻ろうとする。しかし、ドアを開けたのが先生ではなく、二年生の女の子だということに気づくと、今度は逆に、怪訝な顔でぴたりと静止した。

視線が集まるのを嫌い、ユウは彼女の背に隠れた。

ポリウムをメモリ刻みで上げていくように、ざわめきが広がる。それは、下級生が教室にやって来るといふ不自然さに対してではなく、そこに立っていたのが彼女だったからだ。真っ赤な髪は、否応なく彼女を目立たせる。同じ学校にいたならば、彼女の存在に気づかないわけがない。

彼女は教室の中を一瞥すると、躊躇なく中へ踏み込んだ。ユウは躊躇の末、彼女に続いて一步を踏み出した。

彼女はある一団の前で立ち止まった。相手は、上級生の男子が四名。リーダー格と思しき少年が椅子にふんぞり返っている。

「ごめんね」

彼女の言葉は、一言。

暴力もなく、ふわりと風が吹くような、あっけなさ。

彼女は少年の上着のポケットから、級友の大事にしていたカードが詰まったケースを抜き出した。どうして級友がカードを盗られたことを知っていたのか、どうしてこの上級生がその犯人だと知っていたのか、どうしてポケットの中にあると知っていたのか。

いくつかの疑問が、頭の中を通り過ぎる。

もちろん、その答えは、わかるはずもなかった。

だから、ユウはいつも通り、魔法の言葉を唱える。

伊吹力ナだから。

万能にして無敵の魔法。そのたった一言の魔法が、ありとあらゆる不思議や異常を、当然の出来事に变化させる。どんな混乱や焦燥も、根こそぎ片付けてくれる。

「そつえば、今日ね」

呆氣に取られた様子の上級生に向かって、彼女は云つ。

「六年生は、午後から持ち物検査よ」

じゃあね　と、彼女は元氣よく手を振って教室を出ようとした。争いは起こらなかった。口論にすらならなかった。上級生だろうと、たかだか数年の生まれの差では、彼女の敵にすらなりえない。だから、彼らができる精一杯の抵抗は、最後の捨て台詞ぐらいだった。

「どうせ、ケライ人だろ」

彼女は、教室の扉に手をかけたまま、わずかに立ち止まった。ほんの数秒。

だが、ユウにとって、世界が息を呑んだように思えた数秒だった。

「そういうの、嫌な感じだよね」

彼らに振り返った彼女は、笑顔を浮かべていた。しかし、感情を押し殺している様子が、ユウにはよくわかった。何が彼女の心を掻き乱したのか、その理由もわからないまま、反射的にその手を取っていた。「行こう」と一声かけて、教室の外へ出る。

「ありがとう、ユウ君」

自分達の教室への帰路、彼女は珍しく頭を下げた。

「これ、あげる」

お礼とばかりに、取り返したカードを手渡される。

「いい天気だから、午後からは、屋上で昼寝しようと思っていたのさ」

その台詞と共に、チャイムが鳴った。

授業に遅刻することが確実となる。

ため息をつくユウの横で、彼女はあっけらかんと笑う。

さて、先生にどんな風に謝ろうか、このカードを返してやれるのは次の休み時間だ　などと、ユウが必死に考えを巡らせている間に、彼女は軽やかに屋上へ向かう。

ユウの手を引いたまま。

「ちよつと、どうして、僕まで……」

引きずられるように階段を上りながら、ユウは慌てて叫ぶ。

「僕は、真面目に授業出るよ」

「いいよ。たまには、休んでも。許そうじゃないか」

枕が欲しかったようだ。

午後の陽気に温められながら、ユウは憎らしいほどに爽やかな空を見つめる。膝に視線を落とせば、真っ青な空と対照的な、真紅の髪が乱れている。ため息をつきながら、乱れた髪を整えてやれば、安らかに寝息を立てる彼女の顔があらわれる。

彼女は真紅の獅子だった。

獅子はよく眠り、彼女もよく眠る。

獅子は強く、彼女は強い。

獅子は王だ。

彼女については、云うまでもなかった。

「ああ、そんなことも、あったかもね」

何気なく思い出した過去の話を語ってみれば、彼女は想像以上の素っ気なさで答える。

七守学園から一直線に伸びる大通り。左右に大小様々な店舗が立ち並び繁華街を、特に目的も定めず、ユウとカナは歩いていた。

カナが人目を引くのではないかというユウの心配は、どうやら杞憂に終わった。「今日の僕は、ごく普通の女の子だよ」と云って、カナは笑った。その言葉通り、アイスクリーム屋を見つければ、ユウの袖を引っ張ってそれをねだり、ぬいぐるみ屋を見つければ、「かわいい」と声を高くした。

ただ立っているだけで、皆の視線を強烈に引き付ける空気は、今日の彼女には皆無だった。代わりに纏うものは、年相応、ややテンションの高い元気な中学生女子の雰囲気である。

「不気味だ」

そんなカナに付き合うこと一時間余り、ユウは遂につぶやいてしまった。

「たしかに、齢五十を越えたおっさん店長ともぐらを合体させたこのファンシーシヨップのマスコットキャラは、その造形はもとより、その発想に至った経緯すらが、不気味だよね」

手に取っていたぬいぐるみを、興味の失せたように放り出し、彼女はほんの少し、カナらしい顔になる。

「僕みたいな美少女が、見た目にふさわしい愛らしさを振りまいているのに、君はどうやら、お気に召さないらしい」

「取り繕った“らしさ”なんて、気持ち悪いだけだ」

その言葉に、彼女はしばし何かを考えるように、難しい顔になった。

その微妙な空気が、少し、ユウは怖かった。

「自分では、なかなか上手に、一介の女子中学生をやっていたつもりだったが、君には通じなかったようだ。残念至極」

「ずっとお前と付き合ってきた俺からすれば、ぬいぐるみ相手に『いやーん、かわいい』なんて云ってるお前からは、薄ら寒さと恐怖しか感じない」

「ひどいなあ」

本当にシヨックでも受けたように、彼女は目を丸くする。

「そんな風に思われるとは予想外だ。僕からすれば、サービスのつもりだった。でも、思えば、方向性を重ねても、無駄に濃くなりくどくなるだけかもしれない。ケーキにジューズでは甘すぎる。夏場に毛布は暑すぎる。ツッコミが二人では漫才は成り立たない。正反對のものを重ねてこそ、効果が際立つ場合もあるわけだ」

閃いた、というように、彼女は指を突き付ける。

「すなわち、こんなにも愛くるしい美少女の僕に必要な内面は、それと正反對の厳しい性格ということだ」

嫌な予感しかないユウである。

彼女はくるとそっぽを向いた。うつむき加減に顔を赤らめ、後ろ手に両の指を絡め、わずかに見返り、声を尖らせる。

「か、勘違いしないでよね。べ、別に君のためじゃあ、ないんだから……」

思わず、彼女を背中から蹴っ飛ばしてしまったユウである。

しかし、さすがの伊吹カナだ。「おっとと……」と、数歩よるめいた後、けろりとした顔で振り返る。そして、照れたように頬染めて、満面の笑みを浮かべた。

「蹴りたくなるぐらい、可愛かった？」

「そんな愛情表現がある世界を、俺は知らない」

「まだまだ、君も、お子様ですね」

蹴られた部分を手で払いながら、カナは笑う。蹴られたことに対して、服の汚れを気にするだけだ。まるで怒る様子もない。その常人とは違った感覚こそ、カナにふさわしい。

そんな“らしさ”に、ユウはため息をつく。

「でも、困ったね」

カナは真面目な顔でつぶやく。

「僕がさっきみたいなキャラを貫き通すと、これはもう、世界が変わるよ。世の男子たちが、放っておかないよ。君を楽しませようと思ったら、無数の男子に言い寄られることになる。いやはや、僕って、なんて罪づくり。困ったね困ったね」

けらけらと笑うカナに、ユウは再度、ため息をついてやる。

自分の容姿と魅力に、照れも謙遜もなく、確信だけを持っている。傲慢なようでもあるが、それは少し違った。カナは、ただ自らの存在を、そうしたものと受け入れているだけだ。

彼女は自身を誇らない。

彼女は自身を茶化すだけだ。

それでも、どうしようもなく、彼女は人を惹きつける。

中学校に入学した時だった。

彼女は十二歳だった。

男の子と女の子の境目もなく、犬猫のように遊びまわった時期は遙かな昔に過ぎ去り、小学校も半ばを過ぎれば、好きだ嫌いだの話もやや真剣みを帯びる。

その点においても、カナは常に話題の中心だった。「好きな人は？」と質問されたならば、男女も学年も問わず、まず彼女の名前を

挙げることが学校内での常識だった。事実、彼女に告白する者は後を絶たず、彼女に振られることが一歩大人に近づくための通過儀礼という風潮すらあった。このため、彼女が小学校を卒業する間近の頃は、大変な状況になっていた。

ある男子生徒が彼女に告白しようと声をかけたところ、「昼休みならば、二人待ち。放課後ならば、四人待ち。三時限後の休み時間であれば、待ち時間なしでご利用いただけます」などと返されたという伝説がある。

ちなみに、この伝説にはやや誤りがある。男子生徒が云われた内容には何一つ間違いがないが、それを云ったのは彼女ではなく、ユウだった。

「こちらが申込用紙です。ご希望の日付と時間帯を記入して、今週中にご提出ください」

暇つぶしと、さすがにやや辟易としている彼女を慮って、その頃

ユウは告白の受付窓口を行っていた。

「予約料を取るようにすれば、いい小遣い稼ぎになる」

「想いを伝えるのにお金が必要なんて、それはちよつと世知辛いね」

ユウのアイデアに、カナは肩をすくめて返した。

その言い分が正しいように思えたので、ユウも予約料による小遣い稼ぎはあきらめた。しかし、想像していた以上に面倒で反感を買う仕事を、いつまでも無償で続けるのも馬鹿らしいと思っていた。

そのため、ユウは第二のアイデアを実行に移した。

「こちら、今までの告白パターンと彼女の返答をまとめた攻略本です。彼女の基本データから、趣味や思考に至るまでの写真入り解説付きで、今なら一冊300円でお買い求めいただけます」

飛ぶように売れたが、彼女に殴られてユウも空を飛んだ。

「疲れた」

小学校の卒業式の日、彼女の第一の感想はそれだった。

ユウとカナは七守学園の初等部に通っていたため、エスカレーター式に同学園の中等部に進学する。小学校も中学校も、数年後に行

くことになる高校も、全て同じ敷地内にある上、生徒の顔ぶれもほとんど変わらないとなれば、卒業することに大きな感慨は生まれにくい。

「卒業式は午前中に終わるのに、告白タイムで、夜まで拘束されるとは、さすがの僕も予想外だ。僕は、自分のことを可愛い女の子だと誤解していたよ。なんと僕は、超絶美少女だったんだ」

「疲れてるせいか、普段以上に阿呆なこと云ってるよ」

二人共に仲良く、ソファでぐったりと横に倒れていた。

「一人ずつ真面目に相手にしなくても、もっと適当に断っていけばいいのに……」

「云うは易し、行うは難し。拡声器でも使って、『君たち、みんなごめんなさい』とでも云えばいいのかな。それはちよつと、悲しすぎるね。僕が少しだけ時間を割いてやれば、彼らにも良い思い出になるんだから、僕にはそうする義務があるのさ」

彼女は天を指さす。

「こんな風に生まれてしまった僕の意味とは何だろうか。僕が生きている意味とは何だろうか。神様がそれを教えてくれれば楽だけど、どうやら自分で考えるしか方法はないらしい。ならば、僕は、幸せを追求してやるだけさ」

格好をつけて囁く彼女だったが、さすがに懲りたようで、今後は対応策を講じる予定だとも云った。

ユウはそれで安心してしまった。後から思えば、のん気なものだった。彼女が手を打つというのだから、くだらない茶番も終わりだと勘違いしてしまったのだ。

まったくもって、それは甘い考えであった。

本当の地獄は、それからだった。

中学校の入学式。

当然のごとく、彼女は新入生の代表として、壇上で式辞を述べた。堂々とした挨拶で、厳粛な式の空気をより一層引き締めて、私語の一切も封殺し、彼女は会場中の視線を独り占めにした。皆が自然

と吸い寄せられるその様は、さながら狂信者たち誕生の瞬間を見るようで、ユウは一人、やれやれとため息をついていた。

そんな折りに、名を呼ばれた。

挨拶も終わり、普通ならば壇上を辞する所、彼女はマイクに向けて「ユウ」とつぶやいた。そして、「来い」と一言。波紋のようにざわめきが広がり、小学校からの顔なじみ達が、にやにやと笑った。突飛な彼女の行動はいつものことだ。だが、凡人たるユウはその破天荒さに馴染めない。その時もまた、憂鬱な気分で壇上へ登った。ユウとカナは、向かい合った。

ざわめいていた会場が、徐々に静かになっていく。

息苦しいほどに人で満杯になった体育館の中、その全ての視線を一身に受ける。ユウがため息をつく一方で、カナは満面の笑顔を浮かべていた。

「なんの冗談……」

云いかけた言葉ごと、ユウは口を封じられた。
なにをされたのだろう、と思った。
キスをされていた。

「まだ、僕と君は付き合っていることになっているのかな？」

「入学式のエピソードは、お前が思っている以上に、大きな衝撃を与えたことを自覚するべきだ」

「いやいや、それならば、僕の狙い通りじゃないか」

喫茶店のテーブル。

ユウとカナは向かい合っていた。

繁華街のメインストリートからやや外れたその店は、お世辞にも繁盛しているとは云い難かった。しかし、落ち着いて休憩するなら

ば、人の目は少ない方がいい。

運ばれてきたドリンクで、無言のまま乾杯。「ケーキは？」と尋ねたユウに対し、カナは「中学生の財布の事情ぐらい、僕にはお見通しさ」と得意げな顔をした。

「誰が奢ると云った？」

「なんと？」

デートの作法について、長々と議論を戦わせることになった。議論の果てに、「そもそも彼女でもない相手に、なぜ奢らなければいけない」と叫んだユウである。

「僕は、君の彼女じゃないか」

「それは、建前だ」

互いに、他人からの愛情の貰いすぎを避けるためだ。そして、彼女彼女の間柄と言い切ってしまった方が、何かと二人だけで行動する際に、周囲へ言い訳を考えずに済んだからだ。

ユウは、あらためて告げる。

「俺は、お前と、付き合っていない」

「嫌にはつきり云うね」

「はつきりさせておいた方が良さそうだからな。俺は、お前に恋愛感情なんて一片たりとも持っていないし、それは、お前もそうだったはずだ。俺達がラブコメよろしく好きだ嫌いだなんてやっている姿は、想像すらできない」

完璧に云い切ってみたものの、彼女は納得できないのか、しきりに首を傾げていた。

「まあ、ラブコメは僕達らしくないだろうけれど……」

と、そんな前置きをしつつ、カナは云う。

「確かに、中学生らしい拙い恋愛をやる間柄ではないさ。僕と君の間柄は、そんなものではなかったからね。だけど、結局の所、僕が選ぶ相手は君しかいないように思うのだ。恋愛をやる姿は想像し難いけれど、結婚した後の姿は簡単に思い浮かぶ。僕のパートナーは君しかいないだろうし、僕が君を選ぶ以上、君も僕を選ぶしかない。

こんなにも明確にゴールが見えているのに、その過程を捻じ曲げようとするのは、馬鹿らしくも思える」

そこで、カナはくすりと笑った。

身を低くして、子供が大人の顔色を伺うような上目づかい。どこか探るような目つきで、こんな風に云う。

「それとも、僕が地下に引きこもっている間に、好きな女の子でもできたかな。それならば、そうと云ってくれればいいんだ。君は中学生らしく年相応の恋愛とやらを経験して、それを片付けた後、僕のもとへ帰ってくればいいだけなんだから」

カナは、まったく邪気の欠片もなく、心底そう思っていることがわかるような笑顔を浮かべていた。純真無垢とも錯覚してしまいそうな云い分だった。

「例えば……」

試しに　と、思い立ち、ユウは告げてみる。

「俺に好きな子ができて、心底惚れ込んで、来る日もあくる日もその子のことばかり考えていて、お前のことなんて眼中になくなって、たまに会ってもその惚れた子のことばかり話すようになったとしたら、お前は どうする？」

「応援する、全力で」

ぐつと拳を握りしめて、即答された。

「そして、ユウ君の恋愛が成就して、誕生日やらクリスマスやらのイベントを一通りこなして、その相手の子が不治の病で亡くなったり、親の仕事の都合で転校してしまった後で、悲しんでいる君を力いっぱい抱きしめてあげる」

「お前の立ち位置がわからない」
頭を抱えるユウである。

カナは、当たり前のように続けた。

「物語の終わりは、どこにあると思う。勇者のお話ならば魔王を倒すまで、推理小説ならば犯人を見つけるまで、青臭い恋愛話ならば二人が結びつくまで　そんな風に、思っかな。でも、魔王を倒し

た勇者の人生は老いて死ぬまで続くだろうし、トリックを見破られた犯人は刑務所の中で新しい日常が始まるし、大恋愛を経て結ばれた二人は一週間後に別れるかもしれない」

例え話だよ　と、カナは念押しした。

「物語は終わらないのさ。結末らしい結末を迎えても、物語に終わらないなんてものは訪れない。それが残酷なこの世のルールだ。だから、僕は、君がどんな物語に身を堕としたとしても、その結末で待っていてあげる。忘れるなよ。伊吹カナという女の子は、もはや、君のためだけに存在すると云っても過言ではないのだ」

その言葉に、ユウは何も答えなかった。

口にするだけの言葉が、ユウには何もなかった。

伊吹カナのことを好きかと問われれば、好きだというのが本心だ。伊吹カナのことを愛しているかと問われれば、愛しているというのが本心だ。伊吹カナのことが何よりも大切かと問われれば、たぶんそうなのだろう。

だが、ユウは、それらの答えを口に出すべきなのか、それがわからない。本心を剥き出しにすることが正しいのか、それがわからない。目の前の彼女のように、気安く言葉を発することが、どうしてもできない。

最低だ　と、自覚している。

「ケーキ」

「ん？」

ユウはため息をつく。

「やっぱり、奢ることにする」

第4話「茶番」

彼女が、真紅の獅子と呼ばれるようになった頃だ。

彼女は十歳だった。

伊吹カナには一人の妹がいた。妹の名前はレナと云った。伊吹レナ。名前の響きだけでなく、見た目にもよく似た姉妹だった。伊吹家の娘だけあって、妹もまた、幼い頃から様々な教育を受けていた。レナは優秀だった。

常人と比べれば。

残念ながら、常人と比べれば。

カナと比較した時、あらゆる面において、レナは及ばなかった。後一步というレベルではなく、レナは、いつも夜空に浮かぶ銀河でも見るように、姉のことを眺めていたようだ。

一生を賭しても、埋まらない溝。

命をかけても、縮まらない差。

だからといって、レナが負い目を感じていたというわけではない。卑屈になっていたわけでもない。割り切っていたというのが近く、むしろ誇りにすら思っていたようだ。

唯一無二の存在である彼女。

彼女の唯一の妹であることの誇り。

レナは陽気な女の子であったし、飄々とした姉以上に軽口を叩いた。深く悩むことを良しとせず、他人に馬鹿にされたり蔑まれたりしても、それが聞こえないかのように、いつも笑っていた。姉のことが大好きだと公言してはばからず、恋人のようにべたべたと張り付いていた。

ユウとカナは幼なじみである。

ユウとレナも幼なじみであるが、その関係性は、ライバルに近かった。ライバルとして奪い合う相手はもちろん、カナである。

ユウとカナは、まるで違う人間だ。

ユウとレナも、まるで違う人間だ。

それでも、ユウとレナに決定的に同じ部分があるとすれば、それはカナのことを他の何よりも信じていたということだ。この世界全ての人間と天秤にかけても、カナを選ぶという自信があった。

「カナちゃんは」

自分の姉のことを、レナはそんな風に呼ぶ。

「カナちゃんは、絶対に来るだろうね」

その時、ユウとレナは肩を寄せ合って、二人並んで地べたに座っていた。

薄暗い部屋。

カーテンのない窓からは荒地だけが見える。内装の剥がれた具合、家具のひとつもない様から、どこか辺鄙な所にある廃墟なのだろうと、ユウは予想をつけていた。

扉が開いた。

若い男が入ってくる。特に表情もなく、ユウとレナを見下ろしていた。電灯のひとつもない部屋だが、まだ陽も落ちきっておらず、影の差した顔立ちは簡単に見て取れた。ユウは、にらみつけるわけでもなく、懇願するわけでもなく、ただの興味で、男の顔を眺めていた。場違いな程、呆けていたかもしれない。ぼんやり、と。小学生二人を誘拐するような男とは、果たしてどんな顔をしているのか、と。

大学生ぐらい　に、見えた。

小学生と云えども、大人と子供が纏う空気の違いは、わかるものだ。この場合、社会人と学生と言い換えても良かった。その男がまだ社会に出る前の子供であり、学生であるユウに印象づけたのは、その髪型であり、服装であり、隠しきれずにのぞいた苦虫を噛み潰したような表情だった。

短く刈り込んだ金髪、ジーンズにサンダルを履いて、特徴のない安っぽい黒のシャツ。アクセサリの類は見あたらないが、キャップを被っている。そのツバを指で押し下げながら、男は笑顔を作った。

目元を隠して、口の端だけが笑っている。だが、青い瞳は印象的で、隠しようがなかった。

「怪我は大丈夫か」

問われて、ユウは迷った。

ユウは怪我をしている。

怪我をしているのだから、大丈夫とは云えない。服は擦り切れており、身体のおちこちから血が滲んでいる。消毒どころか、傷口を洗い流すための水道すらないのだから、内心では途方に暮れていたりもする。

しかし、どうしようもない程に、怪我が酷いわけでもない。

一晚程度ならば、我慢していることも可能だろう。無駄に泣きわめいて、誘拐犯を激昂させることになるぐらいならば、ユウは黙っている方を選ぶ。その程度は計算できる子供だった。

結局、ユウは沈黙を答えとした。

「嫌われたもんだ。まあ、当たり前だけどさ。でもね、その怪我は俺のせいじゃないからさ。そこところ、誤解しないでほしいわけだよ。変に恨まれたくないからね。俺は、自分でやらかしたことの恨みは買っけど、関係のない恨みまで買うほど、大人じゃない」

男は近づくでも離れるでもなく、部屋のちょうど中央に立っていた。ユウとレナの二人は、部屋の隅で身を縮めて座っていた。

「まあ、確かに、君らを連れ去るような真似をしなければ、坊やが怪我をすることもなかっただろう。そもそも俺という原因がなければ、ここに連れてくるまでの山道で、俺に飛びかかろうとして、誤って崖から転がり落ちるなんて馬鹿はしなかっただろうからさ」

道中、後姿を見せている犯人に対し、好機と見た。その時は手を縛られていたユウだが、全力で体当たりすれば、細い山道から相手突き落としてやれると考えた。しかし、相手は背中にも目もあるかのように、間一髪の所でそれを避けてみせた。結果、山道から落ちたのはユウである。

最善は尽くした。

結果はまぬけだったとしても。

「ドンマイ」

レナの言葉が、逆に虚しい。

「しかし……」

と、男。

「坊やお嬢ちゃん、薄気味悪いぐらいに、落ち着いているね。いや、薄気味悪いどころか、俺は今、心底、恐怖しているよ。君らの落ち着きが、俺がこれから相手にするものの異質さを教えてくれるわけだ。いや、傑作だな。まさか、俺がこんな修羅場を迎えるとはね」

相手にする？

無言で問いかけたユウの視線を無視して、男は、部屋の真ん中で腰をおろした。あぐらをかき、正面から二人に相對する格好だ。

「軽く自己紹介しておこうか。俺は、この近くの七守大学の学生だ。いわゆる、苦学生でね。両親は俺がガキの頃に死んじまって、まあ、よくある話だね。今の世ならば、そこらに転がっている話だよ。世間的には不幸な方かもしれないが、大学まで通えている以上、幸せな奴なんだと俺自身は思っている。だが、困ったことに、金がないとある事情で莫大な金が必要になったが、頼る者のない俺には、金を得る術がない」

「それで、誘拐？」

では、身代金目的なのか。

「それは、正解だが、お前らの想像は、たぶん少しだけ外れている」男は笑った。

だが、その笑みはすぐに消えた。
「教える」

言葉の意気が変わる。

愚痴めいた独り言が、高圧的な命令へ。

「伊吹力ナとは、なんだ」

真正面からストレートな言葉を突きつけられて、ユウは逆に、虚

を突かれた。言葉の意味を理解するまでに時間がかかり、理解した後も、なんと答えていいか、わからなかった。

「お前らがどれだけ事情を理解しているか知らない。お前らがどれだけ世界の仕組みを理解しているか知らない。お前らがどれだけ伊吹家を知っているか知らない。だが、俺は知っている。伊吹と云えば、どんな化け物や魑魅魍魎よりも怖いものだ。悪党共の方が、何倍もマシさ。悪党には融通が効くけれど、正義には道理しかない。伊吹を敵にすれば、おそらく俺みたいな半端者、骨も残らないだろう」

自虐的に笑む。

「そんな伊吹家が産み落とした……いや、産み落としてしまったとか云う最終兵器。まだまだ表舞台の役者というわけではないようだけれど、それでも評判だけは漏れ聞こえてくる。冗談にもならないような噂話の数々が、もし仮に、ただの真実だったならば、それこそ冗談じゃない。世界がぐるりと変わっちまうさ」

ユウは、男の話を完全には理解できない。

だが、男がただの苦学生でないことは、容易に理解できた。

男の生きている世界が、自分の知っている世界と異なるということも、わかった。伊吹カナが、自分の知らない場所でも、多大な影響を与えていることも、わかった。

嫌な音を立てて、世界がずれたようだった。

知らずにいたい世界の裏側を、見せつけられた気がした。

「坊やとお嬢ちゃんを誘拐して、身代金っていう方が、シンプルで良かったかもな。だが、クライアントの要求は、そうじゃなかった。どっちみち、伊吹家を敵に回した時点で、俺が生き残る方法はないのさ。だから、重要なのは、クライアントの要求通りにきっちり仕事をして、俺が死んだとしても、必要な所に、必要なだけ、金が支払われることなのさ」

「クライアント？」

尋ねたのは、レナだった。

「悪い人のことだよ」

男は笑う。

「君らぐらいだと、もう対象年齢から外れるのかな。ほら、あるだろう、戦隊ヒーローもの。世界征服をたくらむ悪の組織つてやつさあれ、実在するんだぜ」

それが冗談なのか、本気なのか、ユウにはさっぱりわからない。

男は軽薄な笑みを浮かべるだけで、それ以上は言及しない。ただ瞳は異常にぎらついた光を浮かべていて、その威圧感と共に、先と同じ言葉を繰り返した。

「伊吹カナとは、なんだ」

ユウとレナは、互いを見合った。

男の問いかけに、真摯に答える必要などなかった。相手は憎き誘拐犯である。舌を出して、そっぽを向いてやる方が、この場合は人質としてそれらしいだろう。もちろん、身の安全を得るために、ご機嫌を伺うのも間違いではない。

だが、そんな打算を打つ以前に、ユウはそもそも答えを持っていなかった。それはおそらく、レナも同じだった。考えないようにしていること。普段は、何気ない風を装って、目をそらしていること。

伊吹カナとは、なにか。

「わからない　って、顔だな」

わかるわけがない。

よほど困惑した表情を浮かべていたのだろう。男は肩を落として、刃物のような気配をおさめた。

「やっぱり、直接、やるしかないのか。伊吹家なんて、絶対に敵に回しちゃいけないものに手を出すのが、ヤバいと思ってた。でも、その見返りに得られるものがデカすぎるから、引き受けた。それで調べている内に、わかった。伊吹家も恐いが、あの女の子の恐さはそれ以上だ。伊吹家を直接どうこうするわけじゃない、ターゲットはあくまで十歳の女の子だと聞かされて、最初は希望を見出しもしたが、なんてことはない。最悪の貧乏くじだ」

男は口の端で笑う。

「俺はたぶん捨て石だ」

一拍の間を空けて、思い直したように。

「いや、試金石か」

しばらく沈黙が降りた。

ユウは男から目を離さなかった。男は目を閉ざしていた。瞑想でもしているかのように、微動だにしない。声をかけるつもりもなかったが、例えあったとしても、容易に触れられざる気配が漂っていた。

その気配から察した。

ああ、やっぱり。

この人は、魔法使いだ。

男は時折、指を動かす。

両の手は開かれており、十本の指はまっすぐに伸ばされていた。それが一本、また一本と、折られていく。やがて両手が共に握り拳の形になり、そこでようやく、男は目を開いた。

「全滅」

あきらめに似たつぶやきだった。

「あれが、十歳の女の子かよ」

男は立ち上がる。その身体が小刻みに震えていた。ぶつぶつと何かを呟いていた。「化物」と。「化物化物化物化物……」と。

男は、蒼白な顔で、部屋に唯一の扉の方を見ていた。

「よかったな」

男が云う。

精一杯の強がりと思しき声で。

「お迎えが来たぜ」

扉が吹き飛んだ。

鍵はかかっていたはずだ。ならば、扉を蹴り飛ばすなど、パフォーマンス以外の何者でもない。二回、三回と、ひしゃげた扉が床を転がり、派手な音をたてる。反対に、部屋の中は息を殺した

ように静まり返る。

果たして、扉のなくなった入り口から顔を見せたのは、伊吹力ナだった。

「やつほー」

と、気安く。

「お待たせー」

と、場違いに。

ただし、殺気も敵意も微塵も隠さず、真紅の髪も存分に振り乱した格好で、いつもは空虚な底なし沼のようにも見える大きな瞳すら、瞬間、獲物を見つけた獣のように、剣呑な光に満ちていた。

十歳の女の子。

齢も性別も、白けた嘘のようだった。可憐な女の子のポスターの裏側に、獅子が潜んでいる。薄い紙を一枚隔てた向こう側から、唸り声がしている。それを、見たまま可愛い女の子の子と思いこめる人間が、そんな幸せな思考を持った人間が、この世界にいるだろうか。伊吹力ナが怒っていた。

へらへらと笑うばかりの彼女が、心底、怒っていた。

真紅の獅子。

誘拐されてからの数時間よりも、ユウはその瞬間こそ、ぞつとしていた。隣にいるレナも、座ったままで、思わず居住まいを正していた。

「お、おお……」

感嘆とも、恐怖とも取れるような声をあげて、男が一步、後ろへ退く。踏みとどまったのは、男のプライドか、それとも十歳の女の子という見た目に騙されてか。

「お前が、伊吹力ナか？」

「やあ、僕の世界で一番大切な君達よ、遅くなつて悪かったね」

男の姿など眼中にないように、力ナはまっすぐ前へ出る。男の傍らを通り過ぎる時でも、視線すら向けない。気にもかけない。豊かな髪がなびき、男の身体を撫でる。男は動かない。動けない。

「君達は、僕がいないと、まったくダメだね。ユウ君の姿を見ると、そんな怪我をするまで頑張ったのは男らしいとも云える。だけど、無茶はよくない。僕は、ダメダメな君達が大好きだけど、いつか君達だって……」

「カナちゃん、大好き。好き好き大好き超愛してる」

お説教モードに入ったカナに対し、熱烈な抱擁でその言葉を遮ったのはレナである。誘拐された妹、助けに来た姉。そんな姉妹が感動の再会の果てに抱き合うと云えば聞こえはいいが、レナは欲望の蓋が外れたような有様で、カナと云えば、みつともなく絶叫していた。

「やめなさい。やめろ。やめて」

カナが悲鳴をあげる。

「ごめん。ごめんなさい。そうだね。うん、怖かったね。悪かったね。僕、遅くなっちゃったね。ごめん。悪かった。わかってる。わかってるから、レナ、やめて。やめてー。やーめー！。唇だけはせめて、唇だけは。そこだけは、勘弁して……」

伊吹カナにとって世界で一番大切なものは妹であるが、世界で一番苦手なものも妹である。

「テンション高いな」

ため息混じり、ユウも立ち上がる。

「随分くたびれているけれど、大丈夫かい、ユウ君？」

片腕でレナを引き剥がそうと四苦八苦しながら、それでも表情だけ、いつもの余裕を取り戻すカナ。余裕綽々と格好を付けているが、妹に身体半分を蛸のように抱きつかれているので、少し、滑稽だった。

「歩けないなら、お姫様抱っこしてあげるよ？」

「せめておんぶにしてほしいけれど、大丈夫、歩ける」

「私、歩けない。カナちゃん、だっこ」

にこにこ笑いながら、姉に甘えるレナである。

へらへら笑いながら、額に汗滲ませるカナである。

「実に麗しい姉妹愛」

と、ユウ。

「僕、時々、貞操の危機を感じるんだよね」

と、カナ。

緊張感の欠片もない。実際、ユウは既に、全て終わったと思っていた。誘拐されたことも、誘拐犯の存在も、全ては過去のものだ。伊吹カナがあらわれた時点で、それらは事件として解決してしまっている。

ここから起こることは、エピソードに過ぎない。

「伊吹カナ」

震えた声だった。

いや、その身体も、ぶるぶると震えていた。

男の顔は、蒼白を通り越して、死人のようだった。その姿を見て、ユウは単純にこう思った。なぜ逃げないのだろうか。皮肉でも何でもない。彼が敵に回した相手は、伊吹カナなのである。

「ああ、そうだったね」

思い出したかのように、カナは手を打つ。じゃれていた妹を引き剥がし、「ユウ君、ちょっと妹を頼むよ」と、その身体を押しつける。

そして、男の方へ。

一步。

「仕置きの時間だ」

妹に抱きつかれ、馬鹿げた会話を繰り返り広げ、笑顔を浮かべた後でも、カナの纏う空気は、何も変わっていないかった。預けられた妹、レナの肩をぎゅっと掴んだユウは、彼女もまた、小刻みに震えていることに気づく。不必要にはしゃいだことも、甘えたことも、レナは敢えてそうしたのだろう。

結局、カナの怒りはおさまらなかった。

「僕は怒っている」

普段へらへらと笑うばかりのカナが、怒りを見せることは稀だっ

た。そして、彼女が本気を見せることも稀だった。だから、その剣が抜き放たれる所を見るのは、ユウにとっても、その時が初めてだった。

カナは、片手を突き出した。

「カラドボルグ」

斜陽が差していた。

カナに与えられた自由は、一日限り。

定められた時間が過ぎる前に、彼女を家まで送り届けなければいけなかった。その時間も差し迫りつつあったが、最後にどうしても訪れるべき場所があった。

「思い出の場所に行こう」

そんな風に提案しながら、ユウは、乾いた笑いを浮かべていることを自覚した。

「剣を見つけた場所だ」

二人の家から七守学園に向かう通学路の途中に、鬱蒼と木々が生い茂る場所がある。道なき道を進み、徐々に険しくなる斜面を登っていく。自然は手つかずのまま、荒れ放題だ。生い茂った草花が、天然の檻となつて行く手を阻む。無邪気な子供でも、奥深くまで入り込むには勇気がいる。もちろん、どんなに小さな頃だったとしても、伊吹カナには関係がなかっただろう。

やがて開けた場所に出る。

洞窟があった。

洞窟が、二人を待っていた。

そこだけ木々も恐れをなしたかのように、身を退いている。草花もかきずき、虫のさえずりも聞こえない。ユウは足を止めて、その

光景に一時の懐かしさを覚える。

「一年振りだ」

ため息をつく。

斜陽。

夏の夕刻である。世界は赤かった。

その赤色に染まる景色に、一年前が重なった。見たくない　と、心が悲鳴をあげたが、坂道を転がる石のように、その映像は決して止まらない。赤色。赤色が続く。這いずるように進んでいた。視界が歪み、理由がわからず喘いでいると、涙を零していることに気づく。瞼をぬぐう手も、赤い。べったりと赤色に染まった衣服。這いずるように、這いずるように、ユウは　。

目を閉ざす。

そして、開き、現実を見る。

洞窟に足を踏み入れる前に、意を決して振り返った。

赤色に染まった世界。髪を黒く染めた伊吹カナが、何を見てもなく、ただ遠くを探すように、空へ目を向けていた。その視線を追えば、まだ夕刻であるのに、空にうつすらと月や星が見えた。

彼女の眼は、何を追っているのだろうか。

ユウにはわからない。

だから、何も云わなかった。云えなかった。両手を握りしめ、口の内側を噛んだ。呪いのように唱えてきた言葉を、頭の中で繰り返す。

約束だ。

洞窟の中へ。

闇が、身体を覆っていく。

彼女が中学生として、初めての夏休みを迎えた頃だった。姉妹が仲睦まじく揃うことは、二度と叶わないものになった。

洞窟の最奥。

いや、正確には、洞窟の果てが何処にあるのか、ユウは知らなかった。二人並んで通るのがやつとの道幅を進み、いつしかたどり着く広場を、ユウは最奥と考えていた。声も反響しない場所。光も音も途絶えてしまった場所。剣が突き刺さっていた場所から先へは、進んだことなどなかった。

「何も見えないね」

のんびりと、わかりきったことをつぶやくカナ。

ユウが、カナと最後にここを訪れたのは、きつちり一年前のことだ。子供の頃にここで剣を見つけた後も、思い出したように時折、この洞窟へ二人で潜った。この闇の中にいる間だけ、ユウは普段聞けないようなことでも、カナへ尋ねることができた。

互いの顔も見えないような闇の中。

言葉も溶けてしまいそうな闇の中。

闇の中で語り合い、心を寄せた。

振り返れば、この場所は、本当に二人だけのものだった。一枚の紙の裏表のように、決して切り離せない姉妹だったカナとレナだが、その妹をここに誘ったことはない。

レナはこの場所を知らなかった。

「二人こそそ何処に行っているのか　なんて、家に帰った後で、よく問い詰められたものだね」

「除け者にして悪かったと、今になってから思うよ」

会話をしながらも、相手がどの辺りに立っているのか、よくわか

らない。それだけ闇が濃い。最初にここを探検した時は、固く手を握りあっていたはずだ。そうしなくなったのは、果たして、成長したからだろうか。

手を結ばずとも、一人で歩けるからなのか。

それとも、手を結ぶことの方が、怖いからだろうか。

「ごめん」

不意に言葉が出た。

つぶやいた後、ユウは口元を押さえる。

ぞわりと背中に悪寒が走った。自分が口走ったことの意味を考えて、恐怖した。そして、一瞬遅れて、恐怖している自分自身へ、吐きたくなるような嫌悪感を覚えた。

ああ、最低だ。

謝る資格などないはずだ。謝ることが、許されていいはずがない。わかっているはずなのに、そんな言葉が漏れたのは、相手の顔すら見えない闇の中という、甘さゆえだろうか。

約束だ。

そんな風に、かつて言葉を吐いた。

「どうして謝るのかな？」

呪いのような誓いを胸に、見え透いた嘘で、彼女を縛ったからだ。

だが、ユウにはそれを弁解する資格はない。

だから、代わりに、こう答える。

「レナのこと」

言葉を選びながら。

「全部、俺のせいだ」

この場所では、闇が全てを包んでくれる。

見たくないものを、隠してくれる。

「レナは……」

「違うね」

きっぱり、と。

「違う。まるで、違う」

彼女は云う。

一年前から変わらず、同じ言葉。

「レナの死は、僕のものだ」

まるで見知らぬ他人の死を語るように、素っ気ない。路傍で潰れて死んでいる虫を見るように、素っ気ない。好きでも嫌いでもない無関心な人間を相手にするように、素っ気ない。

これは、誰の声だろうか。

ユウには、わからない。

「だけど、理由は、俺にあるはずだ」

それでも絞り出すように、言葉を吐いた。

しかし。

「ない」

断言される。

「ない。まるで、ない。まったく、ない。レナの死は、僕だけのものだ。ユウ君、僕は君が大好きだけど、これは僕だけのものだ。絶対に君にはあげない。これは、カナとレナの問題であって、君が入り込む余地なんてない。そこに君が入り込むなんて、僕が許さない」
違う。

ユウは叫んだ。

叫ぶが、届かない。

言葉にすることができない。

今更、何かを云うことも、何かをすることも、ユウには許されなかった。今を続ける。失った今を、それがあのかのように振る舞い続けることが、ユウに与えられた唯一の救いであり、最高の罰だ。伊吹レナがいない日常。

それでも、何も変わらない日常。

「どうして……」

言葉が途切れる。

顔をあげても、見えるものは闇ばかりだ。投げかけた言葉も、闇に吞まれて消えていく。気配もない。彼女はそこにいるのだろうか。

そこにいる者は、果たして、ユウの知っている伊吹カナなのだろうか。

ユウにはわからない。

わからない。

「わからない」

だから、尋ねる。

「どうして、なにが、必要で、不要で、僕が、俺が、お前と、あいつと、そう、レナと、カナと、あの時に、こうしていれば、ああしていれば、何か、何かが、少し、少しだけ、少しだけでも　どうして、どうして、どうして　殺した？」

一年間。

言葉にできなかったことを、口にする。

「どうして、殺した？」

答えはなかった。

そして　。

そして　。

闇の中、彼女は消え去った。

第5話「人形使い」

八月四日。

三日が過ぎた。

彼女の誕生日であり、デートの日であり、その失踪した日から、三日目である。特筆すべきことは何もない　と、ユウは考えている。

彼女は発見されていない。闇の中で消えてしまった後、ユウは洞窟内はもちろん、町内をしらみ潰しに探し回ったが、結局は全て徒労に終わった。日付も変わろうかという深夜、タイムオーバーを迎え、ユウは伊吹家に確保されてしまった。

そうなれば、状況は流れるままだ。

一年間、囚われの身だったカナが、一日の自由を得たその日に失踪する。果たして、自らの意志でそうしたのか、何かしらの不可抗力でそうなったのか　理由はわからない。しかし、状況が非常に良くないことは明白だった。

もしも、彼女が自らの意志で逃げ出したとすれば、それを許す程に寛大な伊吹家ではない。正確に云うならば、伊吹家の当主である彼女の母親は、娘の逃走を絶対に許さないだろう。そして、カナが何かの事件に巻き込まれて姿を消したならば、それこそ発見は一刻を争う。

結局の所、人が失踪するということは、それだけで事件なのだ。

不吉な影は、どうしても付きまとう。

現状、伊吹家に慌ただしい気配は見えない。だが、それはあくまで、ユウに見える範囲のことだった。水面下では、途方もない大搜索が行われているだろう。

伊吹家の娘　今や、彼女は唯一の血統である。現在の当主は、既にこれ以上の子が産める体ではなく、彼女を失うことは、伊吹家が絶えることと同義だ。

だから、ユウは現状に甘んじている。

一日が過ぎた。

二日が過ぎた。

三日が過ぎた。

「ああ、母さん」

三日目の今日、自宅へ電話をかけた。

「まだ、しばらく帰れそうにない。父さんによろしく」

特筆すべきことは何もない。

三日の間、ユウは何もしなかった。

ただの平凡な中学生男子が一人足掻いた所で、伊吹家の前では、巨象に対する蟻にも匹敵しない。それを、ユウはわかっている。伊吹家に全て任せることが、現状では最善と判断していた。

だが、彼女は見つからない。

三日経った今も、彼女は捕まらない。

「ユウ様」

正午の直前、手慰みに夏休みの宿題を片付けていた所へ、ユウはサヨコから声かけられた。三日も進展がないことに、メイドの彼女も気に病む所があったのだろう。珍しく、彼女の方から気晴らしを持ちかけられた。

「この一年で、ユウ様は、見違えるようになりましたね。油断をしていると、一本、取られてしまうかもしれません。私が本気を出す時も近いかもしれませんね」

場所は、屋敷の一室である。広大な敷地と無尽蔵の財力を持つ伊吹家は、下手なホテルやレジャー施設などよりも充実した設備を屋敷に備えているようで、板張りのその部屋は、主に武道場として使用されている。

贅沢な部屋が多い屋敷の中では、簡素と云っても良い部屋である。奥の床の間に、唯一、掛け軸が飾られている。その他に見受けられるものと云えば、壁にかけられた木刀ぐらいだ。

ユウはまさにその木刀の内の一本を手にしていた。防具は付けて

いない。そもそも、剣道をしようというわけではない。スポーツですらなかった。

ならば、何をするのかと問われれば 遊びと云うしかない。

この遊び相手は、いつも三千字サヨコだった。

ユウは物心ついた頃から伊吹家を遊び場にしてきた。カナやレナ以外にも、サヨコを始めとしたメイドに遊び相手になってもらうことも多かった。子供のチャンバラごっこに、当時はまだ高校生であった彼女を付き合わせていたのだから、それは少し、申し訳ない話とも思う。

「いいんですよ。私も、楽しんでおりますから」

その言葉は、おそらく偽りではないのだろう。

サヨコは自らも木刀を手に取って、重さを確かめるように、何度か素振りをする。いつもながら、見惚れるぐらいに美しい動きだった。普段から姿勢のいい人で、黙って立っているだけでも人目を惹くが、刀という獲物を得た時、彼女の姿は活き活きとして輝きを増すらしい。

名品の花瓶に、花が合わさるようなもの。

実際は、鬼に金棒であったとしても。

「では、勝負しましょうか」

「いつでも結構ですよ。ユウ様から、どうぞ」

所作も形式も、遊びゆえに存在しない。

サヨコは素足ではあるものの、服装自体は普段のメイド服のまま。両手をだらりと伸ばして、隙だらけと云っても過言ではない構えである。木刀の剣先は床に付くか付かないかという所で、ゆらゆらと揺れている。

一見すると、素人だ。

事実、サヨコが剣道や居合を嗜んでいるという話を、ユウは聞いたことがない。学生時代から伊吹家に仕える彼女は、そもそも中学と高校の間、クラブ活動に勤しむ時間などなかったはずだ。

だから、素人という言い方は間違っていない。

スポーツとして見た時、サヨコは間違いなく失格する。
「行きます」

宣言して、ユウは踏み出した。

両手で握った木刀を、上段に構える。サヨコは動かない。女性としては、ごく平均的な背の高さだ。中学生になつて身長伸びたユウは、いつしか彼女の背を追い越していた。子供の頃にあつた間合いの差は、今や皆無だった。

一足飛びに、距離を縮めた。

まずは何も考えない。駆け引きも何もなく、ただ全力で、ユウは打ち降ろす。それでも、サヨコは動かない。眼前に木刀が迫っても、涼やかな顔で眺めるだけだ。

美しい人である。

陶器のように、繊細な美しさを感じさせる。

そんな女性を相手に、ユウは頭蓋骨すら叩き割る勢いで、剣を振る。見物人がいれば、悲鳴があがったかもしれない。何も知らない者がいれば、罵声を浴びせられるかもしれない。だが、ユウは確固たる信頼を持っていた。

刹那。

サヨコの眉間に木刀が打ち降ろされる　その刹那。

両腕に雷鳴が落ちた　と、錯覚した。

反射的に、指先に力を込める。

木刀を弾き飛ばされるような無様は避けた。だが、衝撃の大きさに、体全体のバランスは崩される。横向きに一転、二転。片手を木刀から離し、どうにか床を突いて跳ね起きるも、腕に残る痺れと遅れてやってきた恐怖に、心臓のリズムが盛大に狂い始める。

凜、と。

サヨコは、木刀を薙ぎ払った格好のままだ。

下段の構えから、弧を描くように、ユウの木刀を払った　らしい。残念ながら、その動きの始点も終点も、ユウには雷鳴の走ったようにしか見えなかった。自身の身体に走った衝撃でしか、知覚で

きなかった。

ぞわりと背中を、冷たいものが走る。

だが、逆に、気分は高揚する。

「ユウ様」

サヨコは、構えを正す。

「少し、雑ですよ」

頭から冷水をかけられた気分で、ユウは今一度、息を整える。伊吹家。その屋敷を任されるサヨコ。彼女が、自らを語ることはない。だが、ユウは世界の裏側を垣間見てきた。サヨコが、伊吹家の番人と呼ばれていることを知っている。その通り名を知っている。

痺れた手を、握り、開く。

問題ない。

問題ないならば、行くしかない。

「もう一度」

再度、間合いを詰めた。

力押しから変えて、今度はサヨコの身体の中心を狙い、突きを放つ。対して、サヨコは正眼の構え。どう動くか　と、相手の出方を読もうとするユウだが、そんな思考自体が甘いことを思い知らされる。

サヨコは動かない。

ユウの突きは、サヨコの構える木刀の剣先に触れた途端、氷に滑るかのようになり、あらゆる方向にずらされる。サヨコのした事と云えば、ほんの少し、木刀を動かしたただけだ。力もない。速さもない。やりわりと窘められたようなものだ。柔の剣。サヨコが一步、前へ出る。とん、と。

密着した体勢から、片手で胸を押されたユウである。

決して突き飛ばされたわけではないが、ふわりと、面白いように身体が体重を忘れる。何をされたのか、理解できないまま、尻餅をついた。目の前には、音もなく突きつけられたサヨコの木刀。

さて、まずは、完敗である。

「まだ」

と、一声。

ユウは立ち上がる。

「いい心意気です」

サヨコは微笑む。

今度は打ち合いになった。基本的には、ユウが攻め手だ。サヨコは一步も動かず、その場にとどまり、木刀の動きだけで攻撃を打ち払う。ユウの踏み込む音、木刀の打ち合わさる硬質な音。一定のリズムで、ユウは絶え間なく攻めた。

サヨコが、くすりと笑った。

瞬間、眼前に、木刀が迫った。

首を捻り、避けるものの、バランスを崩される。乱れた所に、上段から追撃が来る。構えて受けるも、衝撃はほとんどない。サヨコが本気で打ち降ろしていれば、ユウの木刀など簡単に弾き飛ばされているだろう。だから、今の一撃は、手加減の一撃だ。

ため息　を、つく暇もない。

試されるような攻撃が、二度、三度と連続した。

身体の動きで避け、木刀で打ち払い、ユウは全てを凌ぎきる。四度。そこで、ユウは逆に踏み込んだ。木刀で相手の木刀を押さえ込むようにして、ほぼ密着する位置まで詰め寄る。

先程された事のお返しだった。

サヨコの身体を中心に狙い、ユウは片手を突きだした。タイミングや位置取りから見ても、完璧だったはずだ。誤算があるとするれば、サヨコの実力だ。

ユウの手は、空を切った。

そして、背後から、首筋に木刀を突きつけられる。

「私の勝ちですが、最後の一瞬は、お見事でした」

「いや、全然、褒められている気がしません」

ため息どころではなかった。

ユウは降参して両手を挙げ、半ば愚痴のように漏らす。

「目の前から消えるなんて……もう少し、人間らしい動きをしてください」

「この程度、まだまだ序の口ですよ」

冗談でも見栄でもないのだろう。

サヨコが何をしたかと云えば、単純だ。ただ攻撃を避けて、後ろへ回り込んだ。それを、ユウが数センチの距離、片手を突き出すよりも速く、やって見せたただけだ。

振り返って、遊びに付き合ってもらったこと　稽古をつけてもらったことに対し、ユウは深く頭を下げた。そうして顔を上げると、サヨコは少し恥ずかしそうに、困ったような笑顔を浮かべた。

「最後は、ほんの少しだけ、本気を出してしまいました」

「本当ですか？」

その言葉に、思わず声を弾ませてしまう。

この場合の本気　それはつまり、今の世で禁止技術と呼ばれるようになった力を、彼女に使用させたということだ。

「約束は果たしますけれど、不本意と云えば、不本意かもしれません。いえ、この場合は、私自身の未熟さについて、納得がいかないでしょう。これが妹のナナメであれば、堂々と受け止めたのかもしれないませんが……」

サヨコにしては、珍しく齒切れが悪い。普段、自分の行いについて言い訳をするような人ではなかった。ユウが首を傾げていると、今度こそ本当に珍しく、サヨコが意地悪な笑みを浮かべた。

「胸をさわられそうになったもので、思わず、本気で逃げてしまいました」

そんなつもりではなかった　と、ユウが主張すると、「そうで

すね」と笑われて、おまけに頭まで撫でられた。そんな風にされると、もう何も云えないユウである。年齢は一回り違う。ユウが小学生の頃、サヨコは高校生だった。一度染み付いた関係性は、容易には覆せないものだ。怒ってみても、機嫌を悪くしてみても、サヨコは微笑むだけだろう。

昼を過ぎていたので、食事をする事になった。

準備をするというサヨコと別れ、ユウは一度、与えられている自室に戻った。他人の家に部屋があるというのも変な話だが、そこは規格外の伊吹家である。幼少時から頻繁に世話になってきたユウには、ごく当然のように専用の部屋が与えられていた。

ゲストルーム自体が豊富に用意されているが、ユウの部屋は他と異なり、内装から備え付けの備品に至るまで、全て特別に手配されたものだ。末恐ろしくなるような歓迎ぶりだが、これは、屋敷を預るメイド達の悪癖が原因だった。

屋敷を預るメイド達　と云つても、実は三人だけである。

すなわち、三千字三姉妹。

長女のサヨコ。

次女のナナメ。

三女のタテカナ。

容姿も性格もちぐはぐの三姉妹は、その有り余る能力を駆使して、たった三人で屋敷に関わる全てを管理している。掃除や料理、洗濯と云った日々の家事から、庭木の手入れ、屋敷の修繕、来客の対応、当主の秘書　それらに加えて、かつては姉妹の教育係も務めていた。

彼女らは多才であるが、同時に多忙である。ユウが聞いた所では、長期の休みなど、一年に一回あれば良い方だと云う。

それだけ働いて、疲れないのか。

そんな類の質問をした事がある。

楽しく仕事をすればいいだけさ。

姉妹の次女は、そんな風に返した。

楽しく仕事をする　そのモットーは、長女や三女にも当てはまるものではないだろう。姉妹はそれぞれ異なる考え方を持っている。だが、「楽しく」というフレーズは、ユウに閃きを与えた。

メイド達の悪癖　あらゆる場面で競争を行うこと。

伊吹家に用意されたユウの部屋も、そんな悪癖による産物だ。

例えば、サヨコが部屋に花を飾れば、ナナメは絵を飾る。ナナメが家具を見繕えば、タテカナは壁紙を張り替える。タテカナがベランダを作り替えれば、サヨコはそこから見える庭を模様替えする。日々、それぞれが負けじと工夫を凝らすものだから、部屋の豪華さは成層圏を突き抜ける勢いで高まっていく。

勘弁してほしい　内心でこそ、そう思うユウだが、文句は云わなかった。結局の所、多忙な彼女達は、仕事の中でそんな些細な「楽しみ」を作り、息抜きをしているのだ。

だから、ユウは何も云わない。

多少のやるせなさには目をつむる。

彼女達に、既に返しようにもない程の恩を受けてきたからこそ、ユウはそう考える。

「しかし、毎度、これだけは困る」

メイド姉妹のおもちゃ箱と化した部屋の中、ユウを最も悩ませるものは、クローゼットに並ぶたくさんの衣服だった。

ずらりと並んだ高価なブランド服に眩暈を覚える。

しかし、今更、伊吹家のやる事に動揺するのも愚かだろう。

さて　と、ユウは思考を切り替えた。

運動をした直後であり、着替えるつもりだった。

海原のように広がる衣服は、その全て、三姉妹が準備したものだ。当然、彼女達は自分が見繕った服が選ばれるか　勝負をしている。毎朝、自分の着る服で他人が一喜一憂する姿は、心をちくちくと痛ませる。

今この時、ユウはサヨコが選んだ服を見極めるのに必死だった。なぜならば、現在、この屋敷には次女のナナメと三女のタテカナ

はいないからだ。

先日、新聞やテレビで報道されていたヨーロッパの列車テロ事件。世界的に報道される規模の事件ならば、伊吹家の中でも、とりわけ当主直属の三姉妹が動かないわけにはいかないのだろう。

諸外国との調整に飛び回る当主にはタテカナが同行し、事件の起こった現場にはナナメが飛んでいる。つまり、現在、留守役を任せられたサヨコが一人で、広大な屋敷を管理していることになる。

常よりも多くの仕事を抱えるサヨコのためにも、彼女が用意した服を選び、喜んでもらうべきだろう。

「気を使いすぎかな？」

ため息と共につぶやいた後、これと思う服に着替えて、ユウは食堂へ向かった。その際、何気なく見た時計は、ちょうど十三時を刻んでいた。

「いただきます」

広い食堂の長大なテーブル、一人ぼつんと座り、ユウは両手を合わせた。

「どうぞ、お召し上がりください」

食事を取っている間、サヨコは傍へ控えている。客人としてユウを扱う間は、彼女は決して同じテーブルに着こうとしない。ユウもそれを知っているの、今さら何も云わなかった。

昼食を終えた後、ようやく本題に入った。

「サヨコさん」

「はい」

「いい加減、そろそろ……」

「ええ、わかっております」

食堂の長テーブルは、十数人で会食が可能な大きさだ。かつて、その席が全て埋まる程、にぎやかに人が集まることもあった。だが、今この時、最低限いるべき存在である屋敷の娘達すら、いない。

当主も、その娘も、不在の屋敷。

サヨコは顔を伏せたまま、口にした。

「この三日間の成果を、お伝えしましょう」

「いつまでも、ユウ様をお引き留めしておくわけにもいきません。それに、ユウ様がお嬢様のことを気にしないわけがないのですからこの三日間、何も尋ねずにいてくださいます、ありがとうございます。お陰様で、私も自分の仕事に集中することができました」

ユウは率直に尋ねた。

「カナは見つかっただんですか？」

「正直、申し上げにくい所です」

しかし、言葉の内容と裏腹に、サヨコは断言するような調子で続ける。

「お嬢様の動向を完全に掴んでいるわけではありません。ただし、この町から出ていないことは確かです。お嬢様の姿は、この町に張り巡らされたネットワークの網に、常にはつきりと捉えられております。問題は、神出鬼没ということですね。目的も何もなく、まるで、ふらふらと迷っているようにも思えます。唐突に消えたかと思えば、唐突にあらわれる。透明の風船を追いかけるようなものです。見えない上に、その行き先は風の向くまま、予想できません」

カナらしい　と云えば、カナらしいのだろうか。

ユウには、わからない。

洞窟の中から姿を消してしまった瞬間から、彼女は、ユウにとって理解できない者になってしまった。何を考えているのか、何をしたいのか。逃げられるわけもないこの町で、ただ行き場もなく、さまようだけならば、牢獄にいるのと何も変わらない。

籠の中の鳥。

彼女は、自らの立場を理解しているからこそ、一年間、大人しく

地下に竈っていたのだと、ユウは想像していた。ならば、今の逃走劇は何なのか。一時の自由が、本当の自由でないことぐらい、聡明な彼女はわかつているはずだ。

ユウには、今、彼女が、わからない。

「来客のようですね」

会話を打ち切るように、サヨコがそう告げる。

取り出した携帯端末を確認して、「あら」という短い驚きの言葉の後、サヨコは珍しく顔をしかめた。「招かれざる客ですね」とつぶやいた後、ユウに向けて、端末に映し出された映像を示した。

門扉に設置された監視カメラの映像だった。

一人の若い男が映っている。

ユウもよく知っている男だった。

「一緒に行ってもいいですか？」

「仕方ありません。どう考えても、伊吹家に用があるのではなく、ユウ様にご用なのでしょうから。しかし、不審な動きを見せた時には、私、容赦はいたしません」

ひやりとする言葉を聞き流し、ユウはサヨコと連れ出って屋敷の外に出る。招かれざる客とサヨコは評したが、招かれざる以上、屋敷に入れるわけにはいかないのだろう。

ちよつとした散歩に等しい距離を歩いて、門扉にたどり着く。

鉄柵越しに、ユウとサヨコは、男に向かい合った。

「やあ、坊や。半年ぶりくらいかな。ひさしぶり」

くだけた調子で挨拶し、男は軽薄な笑みを浮かべる。

真夏の盛りということもあり、派手な柄の半袖のシャツに、膝丈までのショートパンツ。足は安っぽいゴムサンダル。金髪にサングラスという出で立ちも相まって、コンビニにたむろしている不良学生と大差ない雰囲気になっている。

ユウはため息をつく。

「灰道さん、もういい歳ですから、まともな定職にでも付いてスーツでも着てください。こう、だんだんと冗談じゃない年齢に近づい

て来てませんか？」

「いやいや、坊や。これでも仕事は真面目にやっているさ。まっとうではないかもしれないが、身の丈はわきまえているから安心だ」
安心だ　と云われても、ユウも本気で相手の心配をしているわけではない。

「灰道ツカサさんとお見受けしますが……」

サヨコが来客用の笑顔で、一步、ユウの前へ出た。ちょうど間に割って入るような形で、まるで男からユウを庇うかのような位置取りである。

実際、サヨコは穏和な姿勢であるが、これが妹のナナメあたりならば「この屋敷に姿を見せるなんて、殺してくださいと云っているようなものだね。お望み通り、刻んであげよう」とでも云いかねない。そして、タテカナならば、無言で刃物を投げるだろう。

「ええ、はい、人形使いの灰道ツカサです」

男は笑みを絶やさない。

「その節は、伊吹家には大変なご迷惑をおかけしました。御家の寛大なご処置に、本当に感謝しております。それで　それはともかくとして、相馬君と二人きりで話したいことがあります、彼を小一時間程お貸しいただければありがたいんですが……」

言葉は丁寧だが、どこか慇懃無礼な態度だ。

そこで、ユウは直感する。

思わず、ため息。

彼は、サヨコのことを本当にただのお手伝いさんと勘違いしているのだ。伊吹の屋敷は、外から眺めても規格外に大きい。召し抱える人間も多いだろう　などと、その内実を知らない者は考えがちだ。

屋敷で働く者が、三千字三姉妹だけとは、考えもしない。

その間抜けな思い込みに、ユウは天を仰いだ。さらば、灰道ツカサ　そんな哀愁が胸中に去来する。自他共に認める三流の役者という看板に、偽りなしだ。小物感を振りまくことに関して、彼の横

に並び立つ者はいない。

「灰道さん。紹介しましょう」

ユウは親切心から云った。

「この人が、三千字サヨコです」

灰道ツカサは、土下座した。

残像が見えた。

土下座。

夏の太陽で熱せられたアスファルトに、彼は額をこすり付けていた。可能であれば、そのまま地中に埋まりたいとでも云わんばかりの勢いだ。肩が小刻みに震えている。「お、あ、おお……」と、言葉にならない言葉を吐いている。ユウが今まで見てきた灰道ツカサの土下座の中でも、格別に情けない土下座だった。

これ程の土下座を見るのは、いつ以来だろうか。

ユウの頭に、真紅の獅子の姿が浮かんだ。

「お、俺……いえ、私、卑しくも人形使いの通り名で呼ばれております、三流以下のちっけなプレーヤーでございます。このようなところで、三散斬の三千字様にお会いできるとは思わず、大変になめた口を……いや、失礼な態度を取ってしましまして、もう、なんというか、その、どうか、お許しを……」

ここで次女のナナメならば、男の頭をヒールで踏みつけるだろうし、三女のタテカナならば、携帯でも取り出して動画を撮り始めるだろう。

そうした点では、ツカサにとって、相手が長女のサヨコだったのは幸いだった。

「私は伊吹家のメイドです。ただのメイドに過ぎません。私達をどのようにに侮蔑しようと、気にするようなことはありません。少なくとも、あなたの私に対する態度で、許す、許さないというような判断を下すことはありません」

サヨコは、ツカサに顔を上げるように云った。そして、驚くべきことに、そのまま鉄門を開いて、ツカサを屋敷の敷地へ招き入れた。

「ユウ様へお話があると仰いましたね。このタイミングで、あなたのような者があらわれる。それ事態が既に興味深いことです。どうぞ、存分にユウ様とお話ください。ただし、私も同席させていただきます」

云いながら、サヨコは門を閉ざした。

鉄壁の門を背にして、彼女は云う。

「それと、もう一度、はっきりと云っておきましょう。私のことは好きなだけ侮辱し、蔑み、罵ってください。私は一向に構いません。気にしません。ただし、ユウ様に関わること、お嬢様に関わること……これは、許しません」

だから。

「あなたは、もしかして、過去にお二人を誘拐したことを、終わったものだと思っていませんか。優しいユウ様とお嬢様に許されて、その償いを果たして、それで罪の清算は済んだと思っておりませんか。もしそうならば、私は、あなたを侮辱し、蔑み、罵りましょう。覚えておきなさい。私はこう云っているのです」

春のような、穏やかな笑みだった。

桜舞い散るような優美さで、サヨコは云った。

「怯えなさい。私は、あなたを、許さない」

借りてきた猫の方が、まだ堂々としているだろう。

応接間のソファーに腰掛けながら、ツカサは身を縮ませていた。お茶を出すサヨコの動作ひとつひとつにも、身体を震わせ、視線をきよろきよろと動かしながら、それでもどうにか気を取り直した様子で、彼は必要なことを語りはじめた。

「実は、先程、こちらのお嬢様にお会いしまして……」

第6話「そして少女誘う時に」(1)

八月四日。

正午を迎える少し前のこと。

野暮用を抱えて青鳥町にやって来ていたツカサは、ランチタイムに込み合う前に食事を済ませようと繁華街を歩いていた。いつも学生で賑わう大通りも、夏休みゆえに、制服姿はほとんど見あたらない。

そのためか、少女の姿はとても目立っていた。

彼女は中学の制服に身を包んでいた。

そして、アンバランスなその髪だ。

赴くままに伸ばしたような直線の髪、真紅の髪。空きテナントのシャッターにもたれかかり、腕を組んでいた。値踏みするように、ぽつかりと空虚な黒目が、道行く人々を捉えている。

ツカサがその姿に気づくのと、彼女が振り向くのは同時だった。

彼女の方が思わず姿勢を正したのに対し、彼女は学校の友達にでも声かけるような気安さで、手を振った。

「やあ、こんにちほ。ひさしぶりだね、お兄さん。一年以上、僕に会えなくて、寂しくなかったかな。そうであつたなら、ごめんと謝るしかないのだけれど、僕とお兄さんの仲だから笑って許してくれると信じて、そのついで、その仲の良さに頼って、ひとつ、お願いされてくれないかな？」

どんな風に云われようと、ツカサに彼女の頼みを断れるわけがなかった。例え、その場で裸になって犬のように繁華街を駆け回れと命令されたとしても、ツカサは黙って従つただろう。それぐらいの覚悟があつたため、少女の願いを聞いて、ツカサはやや拍子抜けした。旧知の少年にメッセージを届けるぐらいのこと、それこそ飼犬のように従順に引き受けた。

誤算だったのは、相馬ユウが自宅におらず、その向かい側の豪邸

に赴いていることだった。ユウの母親からそれを教えられ、ツカサは思案した。

実際の所、灰道ツカサと伊吹家の間で、過去にあった事件の折り合いはついている。贖罪のために払った犠牲は相当のものだったが、ツカサ自身にも、それだけのことをしてしまったという自責の念があった。善良な人間を気取るわけではなかったが、子供を誘拐するという行いは、灰道ツカサのポリシーには反するものだった。

だから、誘拐事件の後、伊吹家の命令によって死ぬことを前提としたような実験に何度付き合わされたとしても、それをツカサが恨むようなことはなかった。

伊吹家としても、十分な見返りを手にしたと判断したのだろう

灰道ツカサは、奇跡的に生き延びた。伊吹家に許されるという奇跡を達した男として、実はその道では名が売れてしまった程だ。

そのような経緯があったため、ツカサは思案したものの、結局は伊吹家の門の前へ立った。そこにはひとつの打算もあった。所詮はいきなり訪れた珍客である。大物が出てくるわけがないと踏んだ。目的は、ただ一般人の少年に会うだけなのだ。伊吹家の主要な関係者に目を付けられる前に、素早く用事を済ませてしまえばいいと、軽く考えていた。

結果、土下座する羽目になった。

「まあ、そういった経緯で、俺は本当にただの使い走りだ。町中でお嬢ちゃん……伊吹家のお嬢様に出会ったのも偶然だしな。だから俺にできることは、本題のメッセージを伝えることだけだ。彼女からのメッセージを、一字一句違えることなく、そのまま伝えるだけさ」

伊吹家の応接室にて、ツカサは早口に説明しながら、時折、サヨコの視線をちらちらと伺っている。対面に座るユウは、そんな様子にため息をつきながら、肝心の部分だけは表情を引き締めて聞いた。灰道ツカサは云う。

伊吹力ナ、曰く。

「今晚十二時に、七守学園のグラウンドで待つ」

第6話「そして少女誘う時に」(2)

「自明の理だと思いますが、灰道様、あなたの言葉に信憑性は皆無です。私は、伊吹家の者として、ユウ様を危険な目にあわせることはできません。あなたの云う通り、所定の時間に所定の場所へ赴いた結果、そこであなたが仕組んだ卑劣な罠がユウ様を待ち受けている可能性も否定できません。あなたには前科すらございます。しかし、残念ながら、お嬢様と町中で偶然に出会い、伝言を頼まれたというお話を否定する材料がないのも事実です。いえ、それどころか、町中の監視カメラのデータを確認しますと、お嬢様とあなたが出会うわれ、会話をされたという所までは事実のようです。ならば、むしろ、あなたの話は真実に近いかもしれません。お嬢様がそう仰ったのであれば、ユウ様は出かけられた方がいいでしょう。ならば、その際のリスクを最小限に抑えるためにも、灰道様をこのまま帰すわけにはいきません」

灰道ツカサは伊吹家に拘束された。

顔だけ絶叫して、声が出ないという複雑な芸を、彼は披露した。

夜、十一時半を迎えた所で、ユウはサヨコとツカサの二人を連れ立って、屋敷を出発した。屋敷の門を出た後、ユウはあらためて二人の姿を眺める。関係のない第三者から見られた場合、どのような集団に思われるのだろうかと思像した。

ただの中学生男子。

誰もが振り返るような二十代半ばの美人。

今にも死にそうな程に顔面蒼白の派手な金髪男。

ちなみに、サヨコはメイド服ではない。一般的な常識を持ち合わせる彼女は、外を出歩く際にはごく普通の私服に着替える。ただし、この時ばかりは、その格好を普通とは呼べなかった。

「あの、サヨコさん、その日本刀は……」

「護身用です」

刀を抱きしめながら、彼女は有無を云わせない笑顔を浮かべた。

伊吹家から七守学園までは、歩いてもそれほど時間はかからない。車を出そうとするサヨコを制し、ユウは徒歩を選んだ。ユウはツカサと横に並び、声をかける。サヨコは二人の後ろを、黙ったままついて来る。

「俺も随分と危険な橋を渡ってきたけれど、これで本当に懲りたね」
ツカサは、背後を気にしながら、小声でつぶやく。

「伊吹家には金輪際関わらないようにするさ。俺はもう、きな臭い世界からは手を引くことにするよ。この一件が済んだら、坊やの前にも二度と姿を見せないと誓おう」

「灰道さん、いつも同じことを云っているの自覚してください。俺達が一番始めに出会った誘拐事件の時も、カナに脅されて、涙目になりながら『もう二度と君達の前には姿を見せません』って誓った一週間後に、俺と近所のスーパーで会ったじゃないですか」

「あれ、マジで焦ったよ。おまけに君のお母さんに『ユウちゃんのお友達ですか。この子をよろしくお願いしますね。ところで、こんなに大きなお友達をどこで作ったのかしら？』なんて云われて、『いや、実は先日、お宅の息子さんを誘拐させていただきまして……』とは云えないもんな」

「いや、そもそも、俺と灰道さんは友達ですらないでしょう。出会いは最悪だし、その後も数ヶ月に一度、仕事絡みで会う程度の関係ですよ」

「……俺は、坊やのこと、友達と思ってる。共に何度も死線を越えた、戦友だと思ってるさ」

「ええ、そうした台詞を真顔で云うのは確かに面白い冗談ですが、時と場合を考えないと……ほら、背後から鍰鳴りの音が……」

ツカサが小さく悲鳴をあげた。

沈黙が数秒。

刀をおさめる音。

「あのさ、坊や」

先程よりもさらに小声になって、もはや蚊の鳴くような声で、ツカサが云う。

「君さ、悪名高き三散斬の三千字と、どういう関係なんだ。なんだか随分と過保護にされてるみたいだけれど、三散斬の力添えなんて本当はどんなに望んだ所で得られるもんじゃないんだぜ」

「そうなんですか。別に、サヨコさんとの関係なんて、昔から変わりませんよ。ただ単に、弟みたいに可愛がってもらってるだけです。実際、サヨコさんは面倒見がいい人ですし、勉強教えてもらったり、遊びに付き合ってもらったり、その程度ですよ」

「いやはや、無知って怖いな。君は自分がどれだけとぼけた事を云っているか、自覚がないらしい。例えるならば、ね。大国の首相を評して、遠出する時の運転手をやってもらっている程度の仲です、と云うようなもんだよ。恐ろしい」

「そんなもんですか」

ユウにとつて、サヨコは姉のようなものだ。彼女がただ者でないことぐらい理解しているが、今更、氣を使うような仲ではないと思っっている。

「坊やとは、なんだかんだ長い付き合いになるけれど、実は詳しいことは何も知らないことに気づかされたよ。たまに会っても、ほとんど仕事絡みのドライな会話しかしてこなかったからね」

「単に、興味がなかっただけでしょ」

「まあ、その通りだけどね。ただし、それは逆も然り。坊やも、俺のことはほとんど何も知らないはずだ」

「単に、興味がなかっただけです」

八月四日、午後十一時四十五分。

会話しながら、ゆっくり歩いてきたが、定められた時間よりも早く着いた。ユウは一度、深呼吸した。ここに来るまで、サヨコではなく、ツカサと会話していたのは、その方が余計なことを考えずに済むからだ。

ツカサとならば、ただの軽口で済む。

サヨコとならば、カナのことにまで話が及ぶ。

「サヨコさん」

グラウンドに踏み入る前に、ユウはひとつだけ頼みごとをする。

「少しだけ、先に話をさせてくれませんか。あいつにも、云いたい事を云わせてやるぐらいの時間はあってもいいと思うんです」

ユウはわかっている。どのような話をしたとしても、カナは伊吹家に連れ戻される。最初から長く逃げ回れるはずがないのだ。遅かれ早かれ、カナは捕まっていただろう。それは予感ですらなく、ただの事実だ。カナがどれだけ傑物であろうと、伊吹家の抱える戦力と張り巡らした情報網に対抗するには、一人では不可能だ。

だから、ユウはこの場にサヨコが来ることを拒まなかった。長く逃げ回れば、それだけカナの立場を危うくする。サヨコが今晚カナを捕獲してくれば、それが一番穏便に解決する方法となる。

もちろん、実力行使ではなく、ユウの説得ですべてが片づくならば、それが最良だ。

「結構です。ユウ様のお望みの通りに。……それと、灰道様」

サヨコが横目でツカサを見る。

「あなたも、ユウ様が許可を出すまでは、決して口を出したりすることのないように、お願いいたしますね」

釘を刺されるまでもなく、ツカサに口出する勇氣はなかっただろう。さらに、グラウンドに足を踏み入れた所で、彼女は微笑みながら付け足した。

「お嬢様がいらっしゃいます。あなたの言葉は嘘偽りではなかったということが証明されました。おめでとうございます。私も、ほっとしております。こんな町中で、人を斬らずに済みました」

青ざめているツカサの事は、この際、放っておくことに決めたユウである。実際、ユウにはもう、他のことに気を回している余裕などなかった。

見れば、月。

雲一つない、一枚岩のような夜。

灯りの消えた校舎が影となり、山の連なりのように見える。広々としたグラウンドに、熱帯夜の蒸し暑さが澱のように溜まっている。息苦しい。立ち止まるサヨコとツカサを残し、ユウは前へ進み出る。闇が血を流しているように、その赤色だけが浮き立っている。

真紅の獅子が、そこにいた。

第6話「そして少女誘う時に」(3)

違和感が、ざわりと背中を撫でた。

そういえば、伊吹カナは夜が嫌いであつた　と、ユウは思い出す。極端な所、彼女は睡眠を必要としなかった。まだ幼かった頃、大晦日に、ユウと伊吹姉妹の三人で、夜通し起きていようと約束し合つたことがある。ユウとレナの二人は早々に寝付いてしまったが、カナは起きていた。そして、けろりとしたまま、そのまま一週間眠らなかつた。

そうか、どうやら僕は人間ではないらしい。

こんな当たり前のことに気づくのに、時間がかつたよ。

周囲に奇怪な目で見られながら、カナはいつでもへらへらと笑つていた。冗談であつたのか、本気であつたのか、ユウにはわからない。わからなくとも、自分がカナを見る目が変わらなければそれでいいと思つてきた。

眠ることすら、カナにはポーズに過ぎなかつた。眠りたい時に、眠る。食べたい時に、食べる。彼女にとって、それらは本当に言葉の通りだつた。眠りたくなければ、眠らない。食べたくなければ、食べない。カナにとって、生きるための営みは、おままごのようなものだつた。

カナは夜が嫌いだつた。

カナは人が好きだつた。

皆が寝静まり、静寂に包まれる夜が嫌いだつた。世界が死んでしまったようだ　などと、まるで世界が死んだ風景を見たことがあるかのように、カナはつぶやいた。一人で夜を過ごす時こそ、自分が何者であるのか、考えてしまうのだ　などとも、儚げに今。

伊吹カナは、空を見ていた。

彼女の姿を、ユウは一年ぶりに見たように感じた。

違和感が、ざわり、と。

「やあ」

泣いているようにも見えたが、そんなことはなかった。夜空から地上へ、世界から人間へ、人類から個人へ　その視線を、彼女はユウへ、向けた。

この三日の間に、どこで見繕ってきたのか、カナは七守学園中部の制服に身を包んでいた。校章の入った白いシャツにプリーツスカート、胸元には黄色のスカーフ。

「ダウト」

「ん？」

「それ、一年生の制服だぞ。二年生になると、スカーフの色が赤色になるだろ」

「ああ、そういえば、そうだったね。僕は一年生の一学期までしか学校に来ていなかったから、忘れていたよ。それこそ、二年生になつてからは、一度も学校に来ていないからね」

些細なことだ。

会話の糸口を掴む、軽口に過ぎない。

しかし、なぜだろう。ユウは心がざわつくのを感じる。胸にこみ上げてくるものがある。目頭が熱くなり、慌てて、誤魔化すように早口でまくし立てた。

「簡単に云うなよ、引きこもり。お前がいなくなつて、俺がどれだけ苦労させられてるか、わかってるのか。反省でも謝罪でも、なんでもいいからさっさと済ませて、あの地下から出てこいよ。お前が帰ってくれば、万事が、解決だ。全てが丸くおさまる。みんなが幸せだ。だって、伊吹カナは、そういうやつだ。ヒーローじゃないか。そうだろう。お前さえいれば、どんなに最悪の状況からでも、ハッピーエンドにたどり着ける。そうすれば、あいつだって、レナだっ

て……」

三日前の続き。

洞窟の中での問いかけに、答えを求める。

「……どうして、殺した？」

伊吹レナが帰ってくることは、ありえない。

彼女はもう、いないのだ。

彼女が殺したから、もういない。

ユウはわかっている。ユウは、理解しなければいけない。どうして殺したのか。どうして殺さなければいけなかったのか。問いかける意味など、実はない。問いかける相手が、違うのだ。ユウが本当に問いかける相手は、自分自身だ。

なぜ、自分は、彼女に殺させた？

答えは、単純だ。

それは、醜さであり、愚かさであり、弱さである。目の前にいる少女に過ちを犯させ、今もなお、罰を被せ続けているのは、ユウ自身の心だ。

吐き気がする。

死んでしまえばいい。

こんなにも醜く、愚かな、弱虫が、生きていていいわけがない。生きていていいわけがないのに、ユウは、呪いのような言葉で、死にゆく彼女に誓ったのだ。

約束だ。

だから、死ねない。

「君は、いつだって、そうだね」
笑う。

カナは、迷子の子供をあやすように、優しく笑った。その笑みに、一年前の後悔が、まるで蜃気楼のように揺れる。言葉を無くしていると、彼女は手を差し出した。この世界で何よりも信じられるものが、目の前に、再び。

「僕は、信じているよ。この世界に生まれてからこれまで、ずっと

君を見てきた。君が戦える子だって知っている。勇気のある男の子だって知っている。どんなに辛いことがあっても、痛くても、泣いたとしても、立ち上がることを知っている」

だから。

「僕と一緒にいこう」

その続く一言に、ユウは知らずに一步を踏み出していた。すがりつくためではない。助けを求めるわけではない。それ以上の強い衝動で、彼女の手を掴もうとした。

ただ一言。

伊吹カナはこう云ったのだ。

「レナを、助けに行こう」

第6話「そして少女誘う時に」(4)

「お嬢様」

鋭い一声に、ユウは現実には引き戻される。サヨコの手が、これ以上進むことを許さないように、行く手を遮っていた。目の前を、彼女の背がふさぐ。その無言の背中が、何よりも雄弁に語っているように思えた。

なにかおかしい。

サヨコの云いたい事を、自然に感じ取る。

それは、ユウ自身も、薄々感じていたことである。

それでいて、気づかない振りをしていたことである。

「興が殺されるよ。無粋とも云える」

と、カナ。

「サヨコ、下がれ」

「いいえ、お嬢様。お嬢様の命令と云えども、聞けない言葉もあります。お忘れですか。私は、お嬢様の教育係でもあります。私は、お嬢様の言葉に命を賭して従うと同時に、その言葉が間違っている時は、それを全力で正す役目も負っています」

「僕が、何か間違っていると云うのかな？」

「お嬢様、お願いです」

サヨコは訴えるように云う。

「お嬢様が屋敷に帰らず、こうして町をさまよっているのは、ご自身だけの問題です。この数日間の償いは、後々、お嬢様が果たすべきことです。しかし、ここでユウ様まで巻き込めば、取り返しのつかない事になります。どうか、お願いです。このまま屋敷へお戻りください。これ以上は、奥様に隠し立てもできません。このことが奥様に知られれば、お嬢様は、さらに……」

「サヨコは僕のことまで心配してくれているんだね。ありがとう。嬉しいよ。でも、その好意を裏切るようで申し訳ないけれど、僕は

帰らないよ。そして、ユウ君も連れていく。サヨコ、君は、何も隠さずに、報告すればいい。そして、伊吹家の力を尽くして、僕を追いかけて、捕まえればいい」

決別した。

どちらも、感情的になっっている訳ではない。冷静だ。それぞれが自分の理屈を述べて、考えを示した。その上で、意見はまったく噛み合わず、真っ向から物別れした。

カナは顔色ひとつ変えない。

サヨコは深く傷ついたように、顔を伏せた。

「こうなるような気はしていました。お嬢様が、らしくもなく、一日だけという約束を違えて姿を消したと聞いた時から、力づくで連れ帰るようなことになるのではないかと、ずっと危惧しておりました。私は、お嬢様にご自分の意志で、お屋敷へ戻っていただきたいと思っていました」

「あの牢獄へ自ら戻って、今度は果たして何年になるかもわからない時間を、また一人で過ごせと云うのは、酷くないかい？」

ユウは、サヨコを始めとしたメイドの姉妹が、顔には出さず、言葉にしなくとも、その胸の内では深く傷ついていることを知っていた。幼い頃から家族以上に長い時間、共に過ごしてきた少女を、主の命令とは云え、孤独に閉じこめていることに、感じるものがないわけがないのだ。

だから、サヨコは何も言い返さなかった。

その様子に、カナ自身、悲しそうに目を細めた。

「悪いとは思っているよ。だから、僕はあえて云っておくことにする。言葉にするまでもないことだけど、僕は、サヨコに伝えておきたいと思う。ありがとう。サヨコ、君は誰よりも僕のことを心配してくれていたね。そんな君のことが、僕は大好きだ」

「もったいないお言葉です、お嬢様」

嬉しそうに微笑んで、悲しそうに目元を拭って、サヨコは刀に手をかけた。「私は、容赦しません。ご存じですね」と、宣言するよ

うに告げれば、カナも顔色を変えた。互いに、鬼のように笑い合っていた。

「君をねじ伏せて、僕は行くでしょう」

「いいえ、させません」

そんな風に、今まさに両者が動き出す瞬間だった。

予想外のものが、カナに襲いかかった。

人形。

「畜生。成せば成る」

灰道ツカサだった。

灰道ツカサは魔法使いである。

現在、国際魔法連合 IMU に承認されている魔法使いは、十九名。三度目の世界大戦に参戦した魔法使いは三十名を越えていたが、かの有名な 9・11 の悲劇の果てに、魔法使い全員が戦死したと云われている。つまり、たった一週間の大戦で、魔法使いの称号を持った人間は、その数を半数以下にまで減らしてしまった計算になる。

終戦後、十四年が経過している。

時代の流れ。

魔法使いは、緩やかに、滅びの道を歩んでいる。

二度目の世界大戦が、魔法使いの有用性を示し、三度目の世界大戦が、魔法使いの危険性を明らかにした。今や、ヨーロッパ連合では、それらは“禁止技術”として法の縛りを受けるまでになった。

軍事大国 すなわち、魔法大国の日本だけが、世界の流れに真っ向から対立している状態だ。IMU から称号を与えられた者の七割以上が日本人であるという現状、それが世界の情勢を端的にあら

わしている。

魔法使いを有する先進国の内、唯一、日本だけが第三次世界大戦に参戦していない。各国の魔法使いが失われた一方で、日本だけは失うものがなかった。その結果、世界のパワーバランスは大きく狂うことになった。

科学兵器は製造すればいい。

魔法使いは製造できない。

魔法使いは才能である。

そして、異端であった。

「人形使い」

サヨコが叫んだ。

人形　と、そう一律に形容される、ツカサの魔法で生み出されたもの達が、カナに襲いかかっていた。背後からの不意打ちを、しかし、彼女は苦もなく避けていた。

だが、人形の数が多い。光に集まる羽虫のように、右から左から、異形のもの達が、カナに詰め寄っていく。

【No.19】、灰道ツカサ。

人形の魔法使い、通称“人形使い”。

ここ数年間で、唯一、IMUに魔法使いの称号を授与された人間である。魔法使いとなって日も浅いため、人形使いという通り名が、果たしてどのような魔法を示すものか、まだ広くは知られていない。だが、ユウはその魔法を何度も目にしてきた。

「お兄さん、僕と遊ぶつもり？」

人形の攻撃を避けながら、カナは笑顔すら浮かべていた。

「三散斬よりは、優しい魔法が使えるからね」

優しい魔法と自称した割には、異様な光景だった。

ツカサの魔法は、端的に表現するならば、物体に意志を与えるものである。人でないモノを、人に化かす力だ。彼は常々、より精巧で緻密な、本物の人間にしか見えない人形があれば、自分の力は最高潮に高まると主張している。

その弁を信じるならば、今、彼が扱っている魔法は、本来の実力から程遠い所にあるだろう。あらかじめ用意した人形ではなく、その場で、ありあわせの物から生み出した人形。それは不出来も良い所で、とても精巧で緻密とは言い難い。

大きさは、人間の子供と変わらない。材質は、主にグラウンドの土だろう。手足と頭が付いていて、どうにか人間を模しているとわかるレベルだ。鈍重なその動きも含めて、さながらゾンビのようである。

ただし、その数は、十体以上。

「俺の美的センスには反するけれど、こんな材料も何もない所では、これが精一杯さ。ルーシーを連れて来ていれば、もつと素晴らしいものを見せてあげられたけれど、今日はこれで勘弁してくださいなお嬢ちゃん」

口の端で笑みを浮かべて、おどけた調子で、ツカサは云う。気取った風だが、云うだけのことはあるだろう。ユウは心ひそかに感心していた。何もない所から人形を造り出し、使役する芸当は、かつてのツカサにはできなかったことだ。

「お嬢ちゃんには、みつともない所ばかり見られてきたからね。こちらで、少しぐらい、俺の力も味わってくれればいいさ」

「うん、お兄さん、役者が上がったね」

カナは襲われている立場だと云うのに、嬉しそうに笑っていた。闇夜の中、異形のモノ達が群がり、その隙間を、踊るように真紅の髪が流れる。

人形は統率の取れた動きで、カナを休ませることなく、ほぼ四方から同時に襲いかかる。とある一匹が、カナを捕らえようと腕を伸ばし、勢いのまま校舎のコンクリート壁を抉り取った。

「灰道ツカサ、やめなさい」

サヨコが振り向き、ツカサへ叫んだ。

その声に、彼は驚いたように、身を竦ませていた。

「危険だから、止めなさいと云っています。お嬢様に怪我でもあつ

たら、どうすると……」

「いや、あの、お嬢ちゃんが怪我なんて……」

ツカサからすれば、善意のつもりだったのだろう。サヨコに戦わせるまでもないと、考えたのだろう。むしろ、戯れのようなものだったのだろう。

ユウはツカサの心境を想像し、ため息をついた。

そして、あらためて見やる。

出来ない人形。

所詮は、鈍重で、コンクリートを決る程度の力しかない。

その程度ならば、伊吹カナには何でもない。彼女にとって、その程度の脅威は、脅威ではない。その程度の敵は、敵ではない。遊びに過ぎず、危機にはなりえない　はずなのだ。

「そう、その通り」

威勢の良い声。

ユウは驚いて、真紅の髪の少女を見る。

「僕が怪我なんてするわけがない」

その瞬間、大気が震えた。

火薬の爆ぜたような音、波となって伝わる小さな衝撃。見やれば、人形が一体、その上半身を吹き飛ばされていた。壊れた人形はバランスを崩し、グラウンドに倒れる。すると、その身体を形作っていた魔法が解けたのか、風化するように、ただの砂の塊へ変じた。

傍らに、何食わぬ顔でカナがいる。

その細腕で、鬱陶しい蠅でも払うように、人形を叩いた　彼女がした事は、それだけだ。

「お兄さん、なかなか良かったよ」

そう云って、カナは拍手する。その間も、仲間の一体を失った人形達は怯えることなく、絶え間ない攻撃を続けていたが、彼女は子供と鬼ごっこでもするような他愛なさで、鼻歌まじりに避けていく。やがて、足を止めた。

飽いたように、拍手をやめた。

ゆっくり、顔を上げる。

「では、お礼をしようか」

カナは、にっこり微笑むと、片手を、前に突き出した。

「僕の本気を、見せてあげよう」

ざわり、と。

ユウは、今度こそ、本当に　。

彼女が、その名を呼んだ。

瞬間、光。

理解できないものが、目の前にあらわれた。思考も、感情も、全てが真っ白になるまで吹き飛ばされてしまった。夜闇に、雷鳴のような閃光。威圧感。蒸し暑さとは関係なく、汗が吹き出した。呼吸が無意識で速くなる。

彼女の剣。

「カラドボルグ」

第6話「そして少女誘う時に」(5)

一撃だった。

その右手に一本の剣があらわれたと思った瞬間、周囲に殺到していた人形達へ向けて、彼女は、軽く薙ぐように刃を走らせた。まるで子供がおもちゃで遊ぶように、ぐるりと剣を振るった。

ユウは堪えた。だが、衝撃が全身を走り抜け、たまらず膝から崩れ落ちてしまった。グラウンドの砂を掴み、歯を食いしばる。

すぐ傍らで、灰道ツカサが悲鳴を上げた。一瞬の叫びだ。喉を締めあげたような呻き声と共に、彼の倒れる音が聞こえたが、気を向けている余裕などなかった。

なんだ、これは？

起き上がろうとするも、倒れた背中の上からプレス機でもかけられたように、体が動かない。指は動く、肩は震えている。視線だけでも、向けようとした。首に力を込めて、前を向こうとする。

「カナ、お前、なんで……」

言葉も切れ切れだった。

どうにか向けた視線の先、ツカサの人形達は、既に塵ひとつ残さず消失していた。剣を振るった格好のまま、得意げな顔をした少女が一人、笑っている。

伊吹カナ。

真紅の獅子。

ユウは知らず知らず、泣いていた。

だから、その後に見えたものは、幻だったかもしれない。視界は涙で霞み、世界は全て、ぼやけた夢のようだった。現か幻か、はたまた夢か。ユウは自分の瞳も、自分の頭も、もはや信じられなかった。

彼女の背後に、サヨコがあらわれた。

あらわれた　と、表現するしかない。

長い黒髪の流れ、上着やスカートのはためき方から、大きく回り込むように、背後を取ったのだろう。目にも止まらない速さ。その常識外の速さを証明するように、地に着いたその足が、急ブレーキをかけた車輪のように、凄まじい砂塵を巻き上げていた。

獣が二匹。

その体勢は、低く。肉食の獣が、飛びかかる寸前のように。腰元に、結わえた刀が一本。片手が、鞘に。片手が、刀に。今にも顎を開き、爪を剥き出すように。抜刀の構え。殺意。鬼気迫る、意思。殺す。という、そんな意思が。刃のように、向かう。殺す、殺す、殺す。と、少女へ。闇夜も裂くような、瞳。その瞳は。サヨコの瞳は。異様な光を、狂気のような光を浮かべて、それは。

恐怖か。

後悔か。

虚無か。

それとも。

悲鳴のような絶叫が、響いた。

皆殺しの魔法使い。

【No.5】、三千字サヨコ。

「サヨコ」

それでも、カナは笑っていた。

「ごめんね」

幻覚だろう。

涙に滲む景色が、偽りを見せた。

だから、涙を払うように、ユウはまばたきした。それで、瞳が正常な光景を映してくれると信じた。だが、景色は何も変わらない。

サヨコは倒れていた。カナは立っていた。

そんな結末。

「さすがに、強い」

倒れたサヨコに向けて、カナは贅辞の言葉を送っていた。わずかな微笑を浮かべていることを除けば、いつもと変わらない。ごく平凡な一日がこれから始まる。そんな登校前の女子中学生のような顔をしていた。

「大丈夫だよ」

そんな風に、カナはつぶやいた。

そして、続ける。

サヨコは、ただ少し、気を失っているだけさ。

怪我もないよ。

怪我をしたのは、僕の方だね。

血が吹き出している。

カナの左腕がない。

あれ、どうして？

ユウは、そう思った。不思議に思った。ただ心の底から、不思議に思っていた。ある日、目覚めたら世界が滅んでいたとでも云うような、そんな馬鹿馬鹿しさを感じていた。

左腕がない。

そういえば。

一年前も、そうだった。

一年前に死んだ少女は、左腕を失っていた。正確には、頭髮の一部、右目、左腕、左脇腹、左足、右足の指の一部を失っていた。そんな風に、伊吹姉妹の片割れは殺されたのだ。

「ああ、ごめん」

カナは、笑っていた。

「見苦しい姿だ。すぐに治すよ」

彼女は、ポケットから小銭でも落としたような調子で、周囲にきよきよと視線を巡らせていた。やがて、牽かれた犬の死体のように転がっている、自身の左腕を見つけていた。

斬り落とされたその片腕を、カナは特に興味も無さそうに眺めた後で、リフティングでもするように、宙へ蹴り上げた。夜空を背景

に、血飛沫が噴水のように舞う。くるくると回る腕が、まるで満月のようである。

ユウは、耐えられず、一度、目を閉ざした。

一秒。

二秒。

三秒。

目を、開いた。

カナが、そこにいた。

何事もなかったかのように、怪我ひとつなく、立っていた。

幻覚である。全ては、夢幻に過ぎない。こんなにも馬鹿らしい事が、現実を起こりえる訳がない。十四歳の少女に、魔法使いが二人あつさりと倒されるような事はない。その一方に至っては、世界で五番目に強大な兵器と揶揄される存在だ。さらには、両断された腕が、一瞬の後に元に戻るなど、説明の付けようがない。

しかし。

ユウは、知っている。

この異常な風景を片づける台詞を知っている。

幼少字からずっと繰り返してきた魔法の言葉を、ユウは再び、繰り返す。

伊吹カナだから。

どんな異常も不思議も、当然に変わる。

「お待たせ」

まだ起き上がることもできないユウの目の前に、彼女はやって来る。どこからどう見ても、伊吹カナだった。真紅の髪、七守学園の制服、へらへらと笑う表情、空虚な瞳。正しく、一年前までの彼女だった。

「お前、お前は、どうして……？」

問いかけたユウに対して、彼女は笑うばかりだ。

何も云わない。

何も教えてくれない。

ユウ君。

彼女は云った。

君が、レナを助けて。

「カナ」

彼女の名を叫び、手を伸ばした。

しかし、届かなかった。

「ユウ君」

真紅の髪の少女は云う。

「君が、やるんだ」

その言葉と共に、闇が深くなった。

目の前が、暗くなる。暗幕を頭から被ったように、突如、視界を失った。目の前にいたはずの彼女の姿すら、まるで見えなくなった。混乱した。

だが、恐怖はなかった。

ユウは知っていた。

懐かしさを感じる程に、この闇を知っていた。

「僕にできることは、この程度だ。この程度しか、僕にはできない。ならば、この先は誰がやるのか　なんて、云うまでもないだろう」

ここから先は、君の物語だ。

「さあ、いつてらっしゃい」

そして。

ユウが完全に闇に吞まれる寸前。

最後の瞬間、伊吹カナはこう叫んだ。

「君が、世界の鍵だ」

第7話「幕間の時間」

日時不明。

少女は歩いていた。

街中だった。

彼女に目的はなく、彼女に目指すべき場所はなかった。とにかく、歩いていた。前に進むことで、何かが開けるだろうと思っていた。盲目的に、それを信じていた。

ここは何処だろう？

記憶が、なかった。

見慣れない街並みを眺めながら、少女はつらつらと考える。

旅行でもしている最中だったのだろうか。慣れない場所を歩いている間に、迷子にでもなってしまったのだろうか。誰かが一緒だったかもしれない。その誰かに心配をかけているならば、申し訳なく思う。

現在の状況に、なぜか不安はなかった。

しかし、誰かが自分のことを想っているならば、早く帰らなくてはいけないう。そして、自分には確かに、そんな人がいたような気がするのだ。

私は、誰だろう？

私？

僕？

少女は、ビルのショーウィンドウに映り込んだ自らの姿を眺める。肩程まで伸びた黒髪は、豊かな滝のようだ。鼻筋が通っていて、目鼻立ちがはつきりしている。瞳が、人形のように大きい。黒々した目玉が、色のついたガラス玉のように透き通っている。

よかった。

僕、かわいい。

のんきに微笑んだ後で、首を傾げた。

かわいいという気持ちは、自然と胸の内から溢れたものだった。ごく普通に言葉にしたものの、可愛らしさを判断する価値基準は、記憶として残っていたことになる。

自分の名前すらわからない一方で、自分の容姿の美醜はわかる。そんな役立たずの頭を、少女は片手で、こつんと打ってみた。空っぽのスイカのような音がした　気がした。そんな錯覚を覚えるということは、どうやら自分は頭が良くないらしい。

感情の流れ。

無意識の動作。

そんな些細なことが、少女にとってはヒントだ。数万ピースのパズル　それも真っ白で絵柄のないジグソーパズルを与えられて、ただ途方に暮れていた所、よくよく目を凝らしてみれば、ピースにはうっすらと染みのような絵柄があった　そんな気分。

結局、砂漠に落とした米粒を拾い集めていくような作業だ。

それでも、少女は歩いてみるしかないのだろう。

「記憶喪失の鳥は、それでも空を、忘れていなかった」

心に浮かぶまま、歌を口ずさむ。

メロディラインと歌詞はよどみなく流れる。よく聴いていたヒットソングか何かなのだろう。哀愁の中に、少しの希望を見いだすような歌詞だったが、今の所、少女にパンドラの箱の底は見えてこない。

絶望しているわけでもないと思うけれど。

名前すらわからない自分のことだ。今、自分がどんな精神状態なのかも、実はよくわからない。それでも素直に感じるまま表現するならば、樂觀はしていないけれども、悲観もしていない。

つまり、落ち着いている。

歌すら口にしてしまう程に、冷静。

「誰かいませんか？」

大きな街だ。

自分の住んでいた家や町並みすら思い出せない。だから、比較することなどできない。それでも、無意識の感覚は、目の前に広がる街を捉えて、大きいと訴えかけてくる。

立ち並ぶビル、無数の交差点。

至る所に、蟻の行列のように並んだ車。

「誰もいないわけがない　と、僕は無意識にそう思っけれど、目の前に広がる光景は非情にも、ありのままの現実を突きつける」

これだけの規模の街に、一人の姿も見当たらないということがあり得るだろうか。古いビルや汚れた建物、閉鎖されたテナントも見受けられるが、多くはほんの数分、数秒前まで人が生活していた様子を残している。

放置されている車をのぞき込んだりしてみるも、やはり人はいない。いや、少女は薄々感じていたが、この街には人はおるか、生き物の姿が見あたらない。犬や猫どころか、害虫の一匹すらもいなかった。

異常事態。

そんな風に、少女は考える。

「うん。やっぱり、これは、ありえない」

だが、いくらそうつぶやいてみた所で、現実是不変ならない。自分の目で見ているものを、信じない訳にはいかない。疑うべきは、自分ではないだろうか。記憶を失った不確かな頭、その感覚を、どれだけ信じられたものか。

間違っているのは、自分ではないか。

忘れているだけで、実は、巨大な街から人が綺麗さっぱりいなくなるような現象、日常茶飯事に起きていることなのかもしれない。これで騒ぎ立てれば、むしろ何を当たり前のことで　などと、“彼”に冷めた目で見られるかもしれない。

少女はため息をついた。

瞬間、何かを思い出すような、不思議な感覚を覚えた。

彼？

彼とは、誰のことだ？

記憶を失った頭は、氷の張った真冬の湖のようなものだ。今、その湖に、小さな亀裂が入ったように思えた。何か。何か。何か。何か。引つ掛かる。形にならない、生ぬるい水のような想いが、記憶の奥底から染み出してくる。

だが、少女が自分の心と静かに向かい合っている時間はなかった。足を止めて、前を向く。濃密な気配を感じていた。何かがいる、と直感する。少女の意識は、急速に目の前のものに吸い寄せられていった。

人間だ。

しかし、少女はすぐに考え直す。

人間なのだろうか。

「こんばんは」

世界には薄闇が立ちこめていた。

だから、そんな風に時候の挨拶をした。

「はじめまして」

相手は、そんな風に返してきた。

女性だった。

女性にしては、随分と背が高い。少女からすれば、大きく見上げる程だ。しかし、その体格は、よくわからない。全身を真っ黒の一枚布で覆っている。ローブとでも呼べばいいのだろうか。ゆったりとしたその布が、指先や足先までも隠している。頭にもフードのように被っており、薄闇の時間も相まって、はつきりとその顔立ちを見て取することは難しい。だが、整った人だとは伺い知れた。彫刻のようで、気品があつた。

「魔女みたいですね？」

「うん、魔女なんだ」

よくよく見れば、魔女と自称した女性は、歩いてすらいらない。ローブが足までも覆っているが、その布すら、地面には着いていない。

浮いている。

背が高いと感じたのは、錯覚だった。

浮いているのだから、背の高さは推測できない。

「ここは散歩するには向かない場所だ。君みたいな女の子が来るような場所でもない。どうして迷い込んでしまったのかな。私にもわからないことを持ち込むなんて、君は何者なんだろうね」

「それは、僕も教えてほしい」

少女は、魔女へ事情を語って聞かせた。

とはいえ、語るべき内容は多くない。滔々と自分語りをしようと思っても、今、少女には語るべき“自分”がない。自分が何者かわからないこと、ここが何処なのかわからないこと、なぜ記憶を失っているのか、なぜこんな場所にいるのか、何もわからないということとを、少女は端的に説明した。

同情を引くような話し方はするまい、と思った。

自分は飄々としている姿が似合う　そんな風に、根拠もなく思っていた。

「なるほど」

魔女はうなずいた。

その様が堂々としていたものだから、少女はわずかに期待を寄せた。この状況に対して、ひとつの答えを示してくれるのではないだろうか。

しかし、予想は裏切られた。

「なるほど。さっぱり、わからない」

思わず、「えー」と非難する声を上げてしまった少女である。魔女はローブの中の手をひらひらと振った。よくわからないジェスチャーだったが、気の抜けるような動きではあった。

「そんな風に云われても、私からすれば、鍵にかけてある家に、いきなり迷子が入って来たようなものなんだ。おまけに、その迷子は記憶も何もないと主張する。困ったね。放り出すには寝ざめが悪いし、積極的に助けてあげる義理もない」

「人間、損得勘定だけでなく、自分の心のために生きるべきですよ。情けは人のためならず。ここで僕に助力を与えることは、今後のあなたの人生を実り多きものとするでしょう」

「セールストークとしては面白いけれど、残念ながら、私、もうとつくの昔に人間はやめているからね。魔女としての生き様に、実りが必要かどうか、悩ましい所だ」

魔女はフードの中で首を傾げているようだった。

少女は手をぶらぶらと揺らしながら、彼女の次の言葉を待った。

魔女が何を云おうと、少女は何も気にしない。さようなら　と、彼女がそう告げて去って行ったとしても、それは、そういう運命で、巡り合わせだったということに過ぎない。

「まあ、いいか」

特に期待もしていなかった少女だが、魔女は気まぐれを起こしたようで、手招きしながら先を進みだした。小走りにその後を追いなから、今度は少女が首を傾げた。

「そもそも、こんな場所に記憶喪失でやってきた君が、ただの女の子であるはずがないだろうさ。もしかしたら、世界の運命を変えるような子かもしれない。うん、馬鹿らしい話だ」

魔女は途中で本屋に寄った。ぐるりと店内を一周して、三冊程の本を選び出すと、少女に持つように云った。「読める？」と尋ねられて、少女は「はい」と答えた。「君が教養のある子で助かったよ」と、魔女は少し嬉しそうだった。

「とりあえず、私の家まで行こうか。君にちょっとしたプレゼントをあげよう。その代わり、私のお願い事をひとつ聞いてもらいたい。記憶がないのだから、どうせすることもないだろう。自分と世界を知るためにも、とりあえず当面の目標ぐらいあっていいだろうさ」

少女は、魔女の言葉を受けて考える。

魔女に見返りを求められる。

それは、童話や物語の類を思い出してみても、あまり良いエンディングが迎えられる展開ではない。少々の警戒心を抱きつつも、少

女はあっけらかんと訊いてみる。

「僕の魂でも奪うつもり？」

「魂を定義づける研究が終わっていれば、それも良かったね」

少女は手に持っている本の分厚さを確かめる。背後から思いつき
り頭に打ち付けてやれば、昏倒させられるだろうか などと。

「冗談さ。命や魂をちようだいなんて云わないよ。そんなに、大し
たお願いではない。君には英雄ごっこを頼みたい」

魔女は云った。

「君には、お姫様を守ってもらいたい」

第8話「常闇の世界の姫」(1)

名前について、想うこと。

ルーティア・フェイメオール・ディルム。

ミドルネームのフェイメオールは、母の姓である。産後に体を壊し、物心つく前に死別してしまった母について、ルーティアはその温もりを知らず、その優しさを知らず、その愛を知らなかった。ただひとつ知っていることと云えば、その強さぐらいである。

強い人。

セシリアを知る人々は、謀るように口を揃えて、彼女をそんな風に評した。確かに、彼女は悪政を敷いた大国を滅ぼした英雄であり、三大国のひとつ、バースタイム建国の礎を築いた偉人でもある。成し遂げた功績を考えれば、その強さの程は伺い知れる。

しかし、ルーティアがそんな歴史的事実から母のことを理解しようとする、誰もが皆、困ったように苦笑するのだ。わかっていないという視線ならば、気にならない。わかるはずがないという、そんな視線だけは、どうしても好きになれなかった。

武勇も、確かにそうだ。

しかし、そうした意味とは別に、彼女は強い人だった。

はつきりとそう述べたのは、ルーティアの父である。

セシリアは、勝利の女神を体言するような存在だったとも云える。呆れるか、ルーティア。だが、彼女と共にあった者達は、誰も負けることを恐れなかった。死ぬことすら恐れなかった。もちろん、彼女とて万能の神ではない。窮地に立つことも、生死の境をさまよう大怪我を負うこともあっただろう。だが、それでも、彼女は恐れなかった。自分が負けるなど一片たりとも思わなかった。彼女は神すらも信じず、己だけを疑いなく信じた。彼女のそんな気質が、私には羨ましかった。

常に濁った、胡乱な目をしている父が、彼女を語るその一瞬だけ、

常にならない光を瞳にたたえるのを見た。父にそんな眼をさせる――そのたった一つの事実が、ルーティアに何よりも母の強さを印象づけた。

父、ウィルヘルト・デイルムは、三大国アーカスの国王である。母、セシリア・フェイメオールは、今は亡き大国ジンドの出身であり、生家は大陸全土に拠点を持つ大商家であった。

富裕の出自ではあるが、王族と商家の人間など、本来ならば身分違いも甚だしい。その婚姻について当時は大論争になったと聞き及ぶが、波乱の末、セシリアはアーカスの正王妃の座におさまった。

魔窟とも呼ばれる王宮で、後ろ盾のない母がどのように振る舞ったか、ルーティアは知らない。公的な書物に記載されることのない日常　母の生きた感触というものを、ルーティアは一生知ることなく終わるのだろう。

そんな思い出のひとつもない母を、ルーティアが常に意識してきたのは、自らの容姿のせいもあるだろう。城の大階段の踊り場には、今は亡き王妃の肖像画が飾られている。そこを通りかかる時は、いつでも足を止めてしまう。

まるで鏡を見ているようだった。

肖像画の中で、セシリア・フェイメオールは、剣を携えていた。服装こそ王妃にふさわしい豪奢なドレスだが、抜き身の剣を、これこそ我が一部と挑発的に構える姿は、戦場で常に先頭に立ち続けたという彼女の生き方を証明するようだった。

武勇の数々を思えば、彼女が女として生まれたのは悲劇と思うべきだろうか。それとも、大陸一と謳われた美しさを、やはり褒めたたえるべきなのだろうか。

淡いブロンドの髪。エメラルドのような深緑の瞳。手にした長剣と比較して、ごく平均的な身長と体格は、むしろ小柄にすら見える。微笑んだその顔だけ切り出せば、純真無垢な少女と偽れる。

ルーティアは、彼女の生き写しと云われる。

顔立ちも体格も、瞳や髪の色までも、父親から受け継いだものは

皆無と云つてもよかつた。セシリアが存命だったならば、双子と称しても信憑性を得られたかもしれない。

それほどによく似ていた。

だから、常に比較されてきた。

歴史を紐解いても、それ以上を見つけることが難しい程の傑物である彼女と比較され、まったく憂鬱にならないと云えば嘘になる。

ルーティアは自身の才覚も努力も認め、誇っていたが、それが母を越える程のものかと問われれば、首を傾げるしかない。

母を愛しているか、と問われても、よくわからない。

母を憎んでいるか、と問われても、よくわからない。

彼女は遠い人であつた。それでいて、決して切り離せない人だつた。セシリア・フェイメオールという人は母であり、英雄だつた。ルーティアは、実は、母であり英雄である彼女のことが、よくわからない。

それでも、ひとつだけわかつていることがある。

どうやら自分は一生、母の影と戦う運命にあるようだ。

それを悟つた時、はじめて、ルーティアはその名を口にする勇氣を持った。フェイメオールという母の姓を、自らに刻む決意を持った。

ルーティア・フェイメオール・ディルム。

フェイメオールは母の姓である。

名前について、想うこと。

その名が、自分である。自分の中に、母がある。彼女は確かに存在し、ルーティアはそこから逃れる術を持たない。今はまだ理解できないその存在を、いつか愛し、或いは、いつか憎む日が来るかもしれない。

その時の覚悟のために、ルーティアは名乗る。

「ルーティア・フェイメオール・ディルム、参りました」

曇天のような瞳が、ルーティアを見た。

灰色がかつた男　父であり、国王でもあるその男に対して、ル

ルーティアはそんな印象を持つ。灰白色の瞳に、輝きの薄い銀髪。王としてはまだ若く、四十にも届かない程だと云うのに、瘦けた頬や顔色の悪さが、健全さから遠ざける。枯れ木のような風貌であるが、しかし、大国を背負う為政者としての風格について、そこに並ぶ程の役者を、ルーティアは見たことがない。

世界のパワーバランスを担う三つの大国、そのひとつであるアーカスの国王と云えば、それはすなわち、この世界で最大の権力者の一人と云うことになる。王の執務室に足を踏み入れ、その常人とは異なる気配を前に、緊張感を覚えない者はいないだろう。

ただし、私を除いて　と、ルーティアは思う。

「国王陛下のご用命と聞き及び、第一王女ルーティア・フェイメオル・デイルム、急ぎ馳せ参じました」

「かまわん、人払いはしている」

国王は虫でも払うように、片手を振った。

ルーティアは視線だけで部屋の中を眺め回し、国王の云う通り、この場に自分達以外の何者もないことを確かめた。慎重に猫のように足を踏みだし、王の執務機のすぐ目の前まで近づく。

「どうした、何を警戒している？」

怪訝な顔をする王に対して、ルーティアは怒った表情を作ってみた。

「お父様、お忘れかしら？」

机に両手をつき、ルーティアは勢いよく父の顔をのぞき込む。国王は表情こそ変えなかったが、ゆっくりと、椅子を後ろへ退いた。

「ああ、もちろん、覚えているさ」

たつぷりと間を持たせながら、王は答える。

「この前は、悪かったと云うべきだろう。だが、私の本意でなかったことは理解しているはずだ。ドナルド侯の子息をお前と密会させようなどと、この私が考えるはずがないだろう。馬鹿げた茶番を企てた者達には、厳しく処罰を与えておいた。お前も、これ以上の不満を云うべきでないことは、わかっているはずだ」

「ええ、もちろん、わかっています」

ルーティアはにっこり微笑んだ後、さらに顔を近づけた。

大きな執務机に、ほとんど身を乗り出すような格好だ。

「しかし、頭で理解することと、感情の整理をつけることは別です。私は、お父様をまだ許しておりません。部下に処罰を与えることはお父様の仕事でしょうが、では、そんな国王自身に罰を与えるのは誰の役目でしょうか。実の娘にしかできない役目だと、思いませんか？」

「ルーティア。お前は、本当に、セシリアの娘だな」

国王が重い肩をさらに落とすのを見て、ルーティアも矛先をおさめた。実は、言葉と裏腹に、ルーティアはそれほど怒っているわけではない。誰にも叱られることのない父に、時にそんな言葉を投げかけるのが、自分の役目の一つと心得ているだけだ。

「それで、このお互いに忙しい時期に、わざわざ二人きりの時間を設けるなんて、よっぽどのことなんでしょうね、お父様。ギニアス伯爵夫人の誘いを断って来たんですから、その埋め合わせになる位の話でないと、私、しばらく口を聞いてあげませんからね」

「お前の調子が良いことはもうよくわかったから、そこに座りなさい。落ち着いて話をしよう。大切な話だ」

促されて、ルーティアは傍らの椅子に腰掛ける。こんな時でも、スカートを押さえ、背筋を伸ばし、自然と顎を引く。幼少時から叩き込まれた礼儀作法や美の様式が、ごく当然のように滲み出る。

もつとも、こんな時でも　と評したが、向かい合う相手は国王なのだから、これ以上に所作に気を使う相手はいないとも云える。「時間も惜しいので端的に云うが、お前には使者としてバースタイルに行ってもらおう」

ルーティアは驚いた。

珍しいことに、目を丸くしたその表情は、演技ではなかった。常ならば何か言葉を返すところ、思いつく台詞もなく、王の次の言葉を待つしかなかった。その反応を伺うようにしてから、王はゆっく

りと説明をはじめた。

「今更、お前に国同士の情勢を説明するまでもないだろう。目的は、国境沿いにある鉱脈の権利問題の解決だ。書状を運ぶ使者など、本来ならば誰でも事足りることだが、そこに敢えてお前を配する意味、わかるな？」

ルーティアは、今度は間髪入れずに答えた。

「サント地方の鉱脈管理は、バースタイム国内でも見解が統一されていない部分です。加えて、あの辺りはバースタイム政府からすれば辺境で、周辺小国家の貧民層からの流入者も多く、中央政府への反発感情も強い。大きな財源となる一方で、独立の危険性も高い地域です。つまり、アーカスからすれば、バースタイムに対して切り崩しやすい部分になるということです。書状の内容は、サント地方へのアーカスからの出資という所かしら……。当然、バースタイムは慇懃無礼に断るでしょうけれど、アーカスからすれば、これは手探りの一手目に過ぎない。そして、その使者として赴くのが建国の英雄セシリアの娘であるならば、その申し出を断った政府に対して、サント地方の住人はよりいっそうの反発を……」

「お前が聡明であることを、神に感謝するよ」

付け足すことは何もないと云うように、王は深く椅子にもたれかかった。そこに、ルーティアの返答を待つ様子はない。すなわち、ウィルヘルト・デイルムは、国王として今の命令を発したということだ。

国王直々の命令となれば、王女であるルーティアには、一言の反論も許されるものではない。

「お父様」

しかし、違和感を覚えて、ルーティアは口を開いた。

「お父様にしては、迂遠なやり方ではないですか？」

椅子に深くもたれかかったまま、王は、為政者としての濁った目で、ルーティアの方を見やった。迂闊な意見など、それだけで封じ込めてしまう眼力であるが、ルーティアは怯まなかった。

「もちろん、効果の程は認めます。こちらが失うものはなく、上手くいけば、大きな利益が得られる　お父様が好むやり方だから、これは良く理解できます。わからないのは、この程度のことには、私を担ぎ出すことです」

ルーティアはこれまで幾度も、国策の場に出ることを王へ希望してきた。幼少時より王城という蜘蛛の巣のような場所で、駆け引きを身体で覚えてきた。自惚れではなく、知識量でも一端の文官には劣らなかった。まだ十四歳の少女とは云え、セシリア・フェイメオールの娘という肩書もある。

自己を冷静に分析した時、あらゆる面で利用価値があることを、ルーティアは認めていた。商品としては一流である　それを国王へ訴え、国の最前線で力を試させて欲しいと希望してきた。

だが、これまで、国王はその願いを一蹴してきた。

お前の力は認めている。実際、お前はうまくやるだろう。

国王はいつも云った。

だが、お前は力ある者が抱え込む危険を、まだ知らない。政治の現場に出た時、お前が無能であれば問題ないのだ。王女の戯れとして、周囲が上手くあしらって終わりだ。だが、お前は有能だ。だから、お前は必ず敵を作る。そうした闘争の場に出るには、お前はまだ少し、甘い。

そうした王の言葉を、ルーティアは齒がゆく聞いていたものだ。

「お父様は、私を表舞台に立たせることを嫌っていました」

視線を向けるばかりで、無言のままである国王へ、ルーティアは矢継ぎ早に言葉を続けた。

「どうして急に、政治の道具として使う決心をしたのでしょうか。お父様のような方が、気まぐれで、何の理由もなく心変わりをすることはありません。私の力を認めていただけたならば幸いです、おそらくそうではないでしょう。そもそも、政治の仕事を与えること自体が、隠れ蓑のように思えます。私を喜ばせる餌を与えて、本質から目をそらさせるような……。そう、実際の目的は別にあるよ

うに思われます。これは、まるで……」

ルーティアは、視線をそらさない。

「私を、この国の外に追い出す口実を作りたいように思えます」

言い切つて、ルーティアは王の返答を待った。

しばらく沈黙した後で、王は深くため息をついた。

「訂正しよう。お前が聡明なことを、神に愚痴ろう」

王の気配が、若干、やわらぐ。

「本来であれば、お前には聞かせるつもりはなかった話だ。正直、お前の機嫌を損ねたくなかったからな。聞いても益のない話だが、それでも……ああ、いや、返事はいい。お前ならば、聞くと云うに決まっているのだから」

そうして、国王が明かした真実は、実にくだらないものだった。

「私に求婚？」

ルーティアは呆れて、しばらく空いた口が塞がらなかった。

アーカスの有力貴族の一人であるDonald侯の息子が、ルーティアに求愛しようとした事件は、つい先日のことである。

それ自体は事件と呼ぶ程でもない些細な出来事だったが、噂は尾鰭を付いて広まるものである。アーカスの第一王女に、有力貴族の一人が言い寄ったという話は、予想外の過激な顛末が加味されて、王族に取り入ろうとする諸侯に多大な衝撃を与えたということらしい。

今や、抱えきれない程の贈り物を持った国中の有力者とその子息達が、アーカスの王城を目指している。ルーティア王女の寵愛を、他の者に抜け駆けされて奪われては堪らないという訳だ。

「名のある有力者ばかりゆえ、むげに断るわけにもいかん。一人一人に時間をかけて対応し、何かと理由を付けて断つていかなければならないだろう。当然、お前はそれぞれの子息と会うことになるし、鳥肌の立つような愛の言葉を一日中聞き続けなければいけない。さて、どうする？」

「わかった。お父様、私、バースタイムに行くわ」

「わかってくれて嬉しい。正直、書状は建前だ」

王の台詞とは思えなかった。

ルーティアも、さすがに苦笑して尋ねる。

「お父様、いくらなんでも、私に甘過ぎないかしら。結局、これ、娘をどんな男にもくれてやりたくないから、仕事を言い訳にして、話も聞いてやらないということよね？」

「王というのは、国を想えば、私利私欲で動くことなど滅多にできるものではない。しかし、国を想わず、私利私欲で動いても、文句を云う者は誰もいない。ごく稀には、こんな事をしたとしても、神も文句は云うまいさ」

本当に、王にあるまじき言葉だ　と、ルーティアは思う。

「それに、お前自身が云ったことを思い出せ。バースタイムにお前が使者として赴くことは、確かに上手いやり方ではあるのだ」

つまり、国のことも想い、娘のことも想っている　と主張したらしい。ルーティアは納得して、うなずいた。この打算的な所が、実にいつもの父らしい。父らしく、王らしい。

「では、国王陛下」

ルーティアは立ち上がり、云った。

「出立の準備をいたします。一刻を争う大事な書状ですから、今日にもすぐに城を発ちたいと思います。決して、どこぞの馬の骨が駆けつける前に逃げようという訳ではございませんので、悪しからず」

「ああ、わかつている。気をつけて行ってきなさい。秘書官や護衛官など、必要な人選は済ましてある。お前の騎士については、自分で話をしなさい」

「ええ、わかっています」

挨拶も抜きに、ルーティアは早足に国王の執務室を出た。

第8話「常闇の世界の姫」(2)

ルーティアは今年で十四歳になった。

彼女が自らの騎士と定めたアルス・ランドルは、十七歳であり、ルーティアより三つ年上だ。身分からすれば、用事がある時は小間使いに伝令を頼み、アルスを自分の元に呼びつけるべきだろう。しかし、それが効率の悪いやり方であることは明らかであつたし、そもそも自分の性分をさらけ出せる数少ない相手に対しては、ルーティアは自由に振る舞うことに決めている。

そのため、王の執務室を出た後、小走りに兵舎へ急いだ。

ちようど、小夜の時間だつた。

世界が暗闇に染まり始める。

大陸の空には、昼の時間だけ“太陽”と呼ばれる光の珠が浮かぶ。その巨大な光珠を統括しているのは、国家の枠を越えて召集される十人の魔法使いである。大陸の日々の営みを支える彼らは、当然、並の魔法使いとは格の違う魔力と技量を持っていたが、それでも人間であることは違えられない。働き詰めという訳にもいかず、二時間の小夜、十時間の夜と呼ばれる時間の間だけ、彼らは太陽の活動を停止させて休息に入る。

小夜を迎えてすぐの時間は、一般の人々はまだ休憩に入らない。

アーカスにおいて小夜の始まりは合図に過ぎず、そこからちようど一時間が経った後、仕事休めと呼ばれる休憩時間に入る。

そもそも小夜が始まった直後は、やるべき仕事が沢山でてくるものだ。今もまさに、照明係の女中達が、慌ただしく城内の灯りを点けて回っていた。

そんな女中達とすれ違う時、ルーティアは何食わぬ顔で淑やかな足取りに戻り、彼女らが会釈して通り過ぎるのを待った。王女らしく振る舞うことを、内心では非常に億劫に感じているが、国家の看板たる役目ゆえ、不作法で泥を塗る訳にはいかないのだ。

しかし、息抜きも確かに必要である。

ルーティアは途中、ほんの出来心で、傍らのランプに手をかざした。ガラス管の中にある石英に、掌からこぼした魔力を飴のように絡みつかせる。いたずらなので、光の色はピンクとした。照明係が気付いたら、さぞ驚くだろう。

城外に踏み出すと、世界が本来の姿を取り戻していた。

常闇の世界、シースーア。

本物の太陽、月や星の輝きを、ルーティアは神話の物語の中でしか知らない。ルーティアに限らず、シースーアに生きる人間は皆、暗闇の雲を天に仰ぐ。暗闇の雲の下に生まれ、暗闇の雲の下に死んでいく。青い空や夕焼けというものを、想像することはできても、実感することは難しい。

神様の世界は、魔法に頼らなくとも、“太陽”が自然とそこにあつたと云う。大陸は、星という大きな器に浮かぶひとつでしかなく、世界は、未知なる宇宙も含めて無限に存在している。神の言葉にある星や宇宙という概念を、ルーティアは難しいとさえ感じる。シースーアに生きる者にとって、世界の大きさとは、そのまま大陸の大きさである。海の果ても、空の果ても、存在しない。暗闇の雲が全て隔ててしまっているからだ。

シースーアは、暗闇の雲に包まれた世界だ。

シースーアは、常闇の世界である。

「アルス」

王城を出て、ぐるりと外庭を回り込むように移動して、ルーティアは兵舎の方へ赴いた。王女の騎士として任命されたアルスは、既にただの一兵卒ではない。だが、自らの技量を未熟と云ってはばかり、小夜を終えるまでの時間は、他の一般兵に混じって修練を積むのが日課だった。

アルスはちょうど試合をしていた。

ルーティアの呼び声に対しても、彼は耳を傾けることなく、目の前の相手に集中していた。そのため、ルーティアは足を止めて、し

ばらく待とうと考えた。思えば、無粋な声のかけ方をしたと反省すらしていたのだが、王女の登場とあつては、アルス以外の者が黙っていないかった。

周囲に控えていた者達はもちろん、アルスと対峙していた男すら、剣を脇に置いて平伏した。ずらりと皆が頭を垂れる中で、アルスだけが一拍遅れて振り返り、ルーティアに向けて小さなため息をついた。

「ごめんなさい」と、ルーティアは目配せする。

その視線にうなずいた後、アルスも皆に倣って、その場に膝をついた。

「アルス・ランダル、我が騎士よ」

ルーティアは仰々しく告げた。

「国王陛下よりご命令を授かった件で、ここに参った。急ぎゆえに、使者を立てる時間すら惜しかった。そなたも忙しい身であろうが、我が騎士なれば、主の命を第一と心得えよ。このままついてまいれ」
それだけ告げると、返答も待たず、ルーティアは背を向けて歩き出した。

兵舎を離れ、王城の通用門が見える辺りまで来たところで、ルーティアは道を変えた。生まれた時から慣れ親しんだ城であるため、ルーティアは細部まで詳しい。人通りのまったくない場所についても熟知していた。

密談にはうつてつけの木陰まで赴いた所で、ようやく振り返る。

「バースタイムまで行くわよ」

「結論から述べられるのはよろしいですが、経過を説明していただかなくては、私には話が見えません」

黙ったまま、ぴたりと背後に付き従っていたアルスが、開口一番に文句を云った。

アルス・ランダル。

一見すると女性にも見える、容姿端麗な剣士だ。光の加減で、薄い青色にも見える銀髪を、女性と変わらぬ長さまで伸ばしている。

その背はルーティアよりも頭ひとつ分ほど高く、体つきは華奢である。ただし、鍛錬を怠らない身体は思った以上の力を隠している。横幅が倍はありそうな巨漢と対峙して、力比べで勝ってしまう程だ。アルスの淡い青の瞳が、冷やかにルーティアを見下ろしていた。もう片方の左目には、いつも通り、眼帯が巻かれている。

「小夜を終えるまでには、必要な荷造りを済ませて戻っていらつしやい」

国王から聞いたばかりの話を、ルーティアは手早くまとめてアルスへ説明した。そうした後、今のような命令を下した。

何とも云えない表情をしていたアルスは、実際、何も云わずに黙ってうなずいた。ただし、問いかけるような視線が明らかであったので、ルーティアは最後に確認する。

「もしかして、私に結婚しろとでも云うつもり？」

「慣習的に、王族の婚姻は早いものですから、単純に疑問に思っただけです。陛下と姫様の意見が一致して、こんなにも完璧に足並みそろえて婚姻から逃れようとするのが、多少不思議ではあります。それだけの名士が集まるならば、むしろ将来を決めるいい機会になるのでは？」

「お父様は、娘を他の男に盗られたくないだけよ。私は、自分を物のように扱われたくないだけ。それに、私、結婚なんてしない人生もいいかもしれないと、少しだけ考えているのよ」

大国の王女が抱く考えとしては、無茶なものだ。それが実現不可能な夢であることは、ルーティア自身が理解している。

アルスもそれ以上は云わなかった。いつか失う自由ならば、貴重な今の時間を浪費する訳にはいかない。その気持ち伝わったか、確認するのは無粋だろう。ルーティアはただ、にっこり微笑んで見せた。

アルスは一礼した後、何も云わず、その場を後にした。

アルスは地方領主の息子である。ルーティアの記憶が確かならば、六人兄弟の末子であり、唯一の腹違いの子である。彼は故郷を捨て

るような形で王都へやって来て、かねてからの希望通り、騎士団へ身を寄せることになった。

幸いな事に、彼には才能があった。天才と賞されるその剣の腕前で、若干十五歳にして騎士の称号を与えられた。そして、十七歳となった現在、王家直属　それも、第一王女の唯一の騎士という誉れを得たわけだが、本人はむしろ、その肩書きにわずらわしさすら感じているようだった。

「剣の腕を磨ければ、それで良かったのです」

それは、アルス本人がひそやかに漏らした本音である。ルーティア直属の騎士となったからには、剣技以外にも求められるものは多く、物憂げにため息をついている姿も目に付くようになった。

まだ故郷にいた子供の頃や、訓練生として騎士団に所属するようになった頃から、アルスのそうした子供っぽい所は変わらない。昔から達観しているように思われがちだが、実際は年齢相応の幼さを隠しているのだ。

「まったく、手のかかる騎士だわ」

ルーティアはそんな風につぶやいた後、もしかすると今頃、アルスも同じような台詞を吐いているかもしれないと思い至った。

第8話「常闇の世界の姫」(3)

ルーティアは今すぐにでも出立したい気分であつたが、長く王城を離れるとなれば、済ませておかなければならない仕事も沢山ある。高等文官の執務室へ赴けば、王女として名前が必要な書類には、手当たりしだいにペンを入れていく羽目になった。

傍らで、文官の一人が書類の内容を説明している。

「こちらが、ここ十年間のアーカス国内で発見および保護された天使の統計資料となります。残念ながら、天使が観測され始めた初期頃は、情報を集める体制ができていなかったため、全てが正確な数字という訳ではございません。ただし、徐々に増加の傾向があることは否定できないでしょう」

天使の墮界問題は、神無き世になつてから顕在化した問題のひとつである。天使が発見された場合、その最初の発見者が、神の世界へ還すまでの庇護者になるという決まりが定められている。だが、現実的には、未解決の問題が山積みとなっている状況だ。

資料に目を通しながら、こうした数字だけでは実状は何もわからない。と、ルーティアはやや不満に思う。いつか自分も天使に巡り会つてみたいものだと考えるが、それこそ興味本位の想いである。すぐに反省して、心の中から消し去つた。

結局、書類が全て片付いたのは、小夜も終わり、真昼も二時間以上が過ぎた頃だった。

「しまった」

思わず、一人つぶやいたルーティアである。

果たして、男性は立ち入ることを禁じられている離宮の入り口で、アルスが仏頂面で立ち尽くしていた。

「ごめんなさい。怒らないでくれると、嬉しいわ」

「私のような身分で、姫様を怒鳴りつけたとあれば、首を斬られても文句は云えません。ですから、例えば話になりますが、命令に従つ

た結果が数時間待たされることになったとしても、私は何も云いません。犬のように従って、飼い主があらわれれば、大喜びで尻尾を振るまでです」

頭でも撫でてやろうかしら　と、一瞬だけ考えたルーティアである。

逆鱗に触れそうだったため、寸前で思いとどまった。

その後、嫌がるアルスを無理矢理に引っ張りながら、ルーティアは離宮の中にある自室へ向かった。旅の荷づくりは、今頃、ルーティア直属の女中達が大急ぎで行っているだろう。だが、彼女らにも見せられない品物は存在する。秘密の隠し場所から母の形見である一本の剣を取りだすと、ルーティアはそれをアルスへ預けた。

「男の身で離宮へ足を踏み入れたことで一回、セシリア様の剣という国宝を持ち出すことで二回……姫様は、私の首を何回飛ばせば気が済むのですか？」

「私の命令に背いて三回は、嫌でしょう？」

そうして全ての準備が終わる頃には、真昼も終わり、夕刻となっていた。暗闇の雲を背景に浮かぶ“太陽”が、やや高度を落とす代わり、光の明度を下げている。バースタイムに向かう一団について、アルス以外は手配が済んでいるという話だったが、王の言葉に偽りはなかった。

旅程は既に組んであります　と、同行する中で一番年配の高等文官から聞かされて、ルーティアは黙ってうなずいた。

整列した一団を見やれば、ルーティアの知らない者も大勢いるようだった。総勢で三十名程だ。王女の外遊と考えれば、非常に小規模である。

「出発しましょう」

ほんのわずか、胸に湧いた疑問を、ルーティアは口にすることなく終えた。王女程の身分であれば、目下の者達の動向を、あれこれ気にすべきではない。

ルーティアは、自身にしか見えない仮面を、深く被りなおした。

王女の仮面。

生まれた時から身体の一部であり、ルーティアの生き方から、決して切り離せないものである。ルーティアが人前で仮面を外すことはない。無知蒙昧で、汚れなく、皆が望むような美しい王女様を演じる。それが、ルーティアに課せられた義務である。

だから、高等文官の説明も、わかりきった内容であるにも関わらず、黙って聞き続けた。

「石英結界による空間跳躍で、国境を超えることは三大国間の条約で禁止されております。そのため、一等級の石英結界を有する中では、最もバースタイムに近いレドナの街へ、まずは跳躍いたします。そこからは列車を使って移動いたしますが、専用便の手配となれば、どうしても明日の昼頃まで時間がかかってしまいます。また、これだけの人数の跳躍となりますと、順次行うことになりますので、本日はレドナの街へ宿泊することに……」

長い説明が終わり、内心でため息をついた後、ルーティアは石英結界の中へ足を踏み入れた。傍らには、アルスもいた。一度に跳躍できる人数にはまだ余裕があるが、そこは王族に対する礼節の問題である。王族に同行が許されるのは、直属の騎士ぐらいである。

アーカスの王城にある石英結界は、非常に大規模なものだった。街や村に設置される石英結界は、大人一人が入れる程度の箱状のものが多く、ルーティアは話に聞いている。棺桶とも揶揄されるこれらの結界と比較すれば、三十数名が足を踏み入れてもまだ余裕のある王城の結界は、確かに破格の規模である。

アーカス王城の石英結界は、地下に造られているため、窓のひとつも存在しない。正方形の部屋は、壁面の全てが石英で形作られている。扉すらも石英で作られているのは、魔力効率を極限まで引き上げるためだ。加えて、壁面には公式が組まれている。刻まれた複雑な文様は、ルーティアですら全てを理解することが難しい。王立大学で学ぶ高度な式であることがうかがい知れた。

ルーティアとアルスは、そんな石英結界の中心部に並んで立った。

同行する三十名程の一団は、部屋の入口で待機している。四方に陣取るのが、宮廷魔法官である。

空間跳躍の魔法は、一般的には使用が制限されている。然るべき機関で教育を受けた後、王立試験に合格して初めて使用許可が得られる。それでも難易度の高い魔法であることから、原則として石英結界内で使用するように法で定められている。

しかし、いくら高度な魔法とは云え、王城の誇る石英結界に加え、四人の宮廷魔法官となれば、これは失敗する方が難しくなる。ルーティアはその仰々しさに対して、皮肉な笑みを我慢しなければいけなかった。

「それでは、出発しましょう」

ルーティアが声をかければ、四方から詠唱が始まった。
一瞬の後、闇が広がった。

第8話「常闇の世界の姫」(4)

空間跳躍を終える時は、必ず落下するものだ。

詠唱者の技術が高い程、目標地点に対する精度が高まり、落下する距離は小さくなる。とはいえ、落下の距離を極端に短くすることは、不要な危険を背負うことになるため、あまり推奨されていない。跳躍先が普通の大地ならば、失敗したとしても、大きな問題にはならない。地面の中に足が埋まってしまったとしても、掘り返せば済む話だ。しかし、石英結界内への跳躍となれば、話は随分と違ってくる。巨大な石英の中に足が植わってしまえば、バースタイムへ向かうこと自体が難しくなるだろう。

子供の頃、ルーティアは跳躍の終わりが嫌いだった。いつ落ちるのかわからない、その頼りなさ。着地の際によるめいてしまう、幼い自分も好きではなかった。

ふわりと着地しながら、もう子供ではないのだ　などと、ルーティアは少しの哀愁を感じていた。

レドナの街の石英結界は、棺桶よりは遥かに大きいものの、アイカス王城のそれとは比べるまでもなかった。アルスが周囲を見渡し、出口を示した。

「他の者を待つ必要ありません。三十名以上の跳躍となれば、時間もかかります。私達は先に宿泊場所へ向かいましょう」

空間跳躍の試験のため、先にレドナへ到着していた文官数名が、既に車を手配していた。アルスと共に後部座席におさまれば、車体と台座との接合を解除する低い音が響き、独特の浮遊感に包まれた車体がふわりと浮き上がる。

宙を滑るように街中を進む最中、ルーティアはつぶやいてみる。

「車は、もう百年近くも形が変わらないでいるけれど、もっと改良が可能な気がしますわ。少なくとも、建物の二階程度まで浮かび上がれるようになれば、渋滞も減るでしょうし、乗り降りも楽になる

でしょうから……」

アルスに語りかけたつもりだったが、答えたのは助手席に座る文官だった。

「しかし、そのためには今以上の石英が必要になります。また、浮力を出すために、運転手にそれなりの技量が求められることになりましょう。貧富や格差のことを思えば、今がちょうど良い案配なのですよ」

諭されるように云われたが、その程度の知識ならば最初から持ち合わせている。ルーティアは、車中の暇つぶしにアルスと会話しようと思っただけである。

「姫様」

不意にアルスが云った。

「夜になります。“太陽”が沈みますよ」

車の窓から、空の一点を指さすアルス。

その指し示す方向を見るため、ルーティアは身を乗り出した。アルスの手に身体を支えられながら、窓の外、暗闇の雲を背景に“太陽”が光を失っていく様子を眺めた。巨大な光球は、やがて漆黒の塊となって、暗闇の雲の中にまぎれて見えなくなった。

そうして“太陽”が姿を消し、夜の時間が訪れると共に、レドナの街が一変する。

「これが、レドナの本来の姿ですね」

昼と夜で姿の異なる街　その評判は、ルーティアも確かに聞き及んでいた。しかし、芋虫が蝶に変わるように、思った以上の鮮やかで、レドナはその姿を変化させていた。

街中が、魔力の光で照らされている。黄色、赤色、橙や紫　毒々しいとも思えるランプの色が、時に点滅を繰り返しながら、人の目を引き付けようとしていた。バースタイムとの国境近くという土地柄、大商都市として栄えるレドナだからこそ、このような派手な文化が根付いたのだらう。

一時の機会も逃さず、客を捕まえようという商いの情熱が、街を

彩る輝きに漏れ出ているようだった。

王城の荘厳な色彩とは、まるで異なるものだ。

ルーティアは興味深く街の姿を眺めた後、アルスにそつと感想を漏らした。

「面白いとは思っけれど、それほど好きになれそうにないわ。私も、反省しないといけない。城の灯りを、いたずらでピンク色に点してみたけれど、あれは悪趣味だったと思うわ」

「ああ、やはり」

アルスも街の光に目を向けていた。

「あれは姫様の仕業でしたか。女中達の間で犯人探しが始まりそうでしたので、私が戯れにやっておいたことにしました。以後、お気をつけください」

そう云われて、ルーティアはまじまじと自らの騎士を眺めた。正確には、その心の動きを探るため、瞳の奥をのぞき込むように顔を近づけた。

「冗談を云うことはおろか、他人の話にあわせて笑顔を浮かべることも少ない、この仏頂面で有名な騎士が、いたずらでピンク色の灯りを点したとなれば、果たして話好きの女中達の間でどのような噂が流れるだろうか。

礼を云うべきか、謝るべきか、ルーティアが迷っている間に、宿泊場所へ到着した。車の扉を開けて、アルスが先に外へ出る。段差があるため、手を差し伸べてくる彼に対して、ルーティアはこんな風に告げた。

「ごめんなさい。ありがとう」

豪華なホテルだったが、必要以上のきらびやかさが、やはり好みではないと思った。ずらりと整列して迎える従業員のなかから、にこやかな笑顔で前に進み出てくるのは、おそらく支配人だろう。

ルーティアの手を取ろうと近づいてくる彼に対し、気づかれない程の微細な動きで、アルスが体を挟み、行く手を遮っていた。王族に対して媚びを売る人間の相手は、文官の仕事である。ルーティア

はその場を任せ、アルスと共にさつさとホテルの中へ進んだ。

「これだけ人の目が多いと、自由に振る舞えなくて、疲れるわね。食事だけ済ませたら、今日は早めに部屋で休ませてもらうことにするわ」

先程の支配人ではなくとも、機会があれば王族に取り入ろうとする者は多い。人目のある場所に長居するよりも、部屋に籠もってしまつた方が周囲も楽になる。

「そうしていただけると、私としても助かります」

「あなたの性格はわかつていているけれど、もう少し、建前を使いなさい」

世辞を云つたり、人を上手くあしらつたりすることが苦手なアルスである。社交の場にルーティアが長く留まれば留まる程、いつもアルスは目に見えて憔悴していく。

「どちらが面倒を見ているのか、わからなくなるわよ」

「姫様、お言葉ですが、面倒を見ているのは、圧倒的に私の方です」
「あら、先日の舞踏会で、パール嬢に言い寄られていた所を助けてあげたのは、誰だつたかしら？」

その後、食事だけ簡単に済ませた後、支配人がレドナで一番素晴らしい部屋だと主張する最上階へ赴いた。フロア全体を使用した豪華な部屋だが、それ以外、特に素晴らしい点は見当たらないと感じたルーティアである。

「では、何かあればお呼びください」

室内へ不審なものがなければ確認だけして、アルスは部屋を辞した。一人きりになり、ルーティアはようやく肩の荷が降りた気分になった。

第8話「常闇の世界の姫」(5)

八月四日、夜を迎えて数時間が経った。

そろそろ日付も変わる頃だろうと思い、何気なく、ルーティアは暦を確認したのだった。一日が終わる。王女の仮面を外した後は、いつもゆるやかに時が流れる。

思った以上に時間が過ぎていたことを反省して、ルーティアは読んでいた書物を脇に置いた。いい加減にシャワーでも浴びるべきだと考える。

まだ十四歳である。

夜更かしで知識をため込むよりも、よく寝て、よく育つ方が大切かもしれない。それでなくとも、明日は長旅になるのだから、休んでおくことは大事だ。

椅子から立ち上がった。

ルーティアが違和感を覚えたのは、その時である。

薄手の衣で、肌の表面を撫でられたような感覚。続いて、風を感じた。窓は閉ざしてある。空気が流れ込むような要素は、何ひとつない。

いや、実際、考えるまでもなかった。

感じたものは、魔力の波である。

だから、ほぼ反射的に、ルーティアは自身の魔力を周囲一帯に張り巡らせていた。微弱な波がどこから発生したものか。それを突き止めるための行動である。成果はすぐにあがった。

いや、成果と云うべきものでもない。

微弱な波動は、すぐさま、強烈な圧迫感となった。

探るまでもなく、目の前で、違和感が現実となっていく。

「なに、これ……？」

言葉が自然と漏れ出た。

張り巡らせた魔力の網が、ルーティアの知る魔法体系のいずれと

も異なる波動を感じ取っていた。その力の一边に触れたただだと云うのに、魔力を媒体として流れ込んできた膨大な“式”の渦に、ルーティアは危うく吞まれてしまう所だった。

急いで、自らの魔力を切断した。

ルーティアは見守るしかなかった。

「空間跳躍……いえ、似ているけれど……」

天井の辺り、空中に、闇が滲みだした。ランプが消えた訳ではない。光は届いているが、そこだけ何も見えない。闇。紙に、一滴、また一滴と、雫を垂らすように、闇が少しずつ広がっていく。

闇闇の雲？

やがて、闇が、大口を開いた。

そして。

一人の少年が、落ちてきた。

第9話「物語を始めよう」(1)

それは情けなく、恥ずべき思い出だった。

誰にも知られることのない、自身の胸の内だけに起こった出来事である。その事で、ユウが誰かにかかわれる事もなければ、馬鹿にされるような事もないだろう。その出来事については、自身がどのように考えるか、それだけのことである。

その時、ユウは混乱の極みにあった。

真夜中の十二時、青鳥町、七守学園のグラウンド、彼方には倒れて動かない三千字サヨコ、塵ひとつ残さず消失した人形達、その余波を受けて気を失っている灰道ツカサ、空に月、目の前に真紅の獅子。

そして、どうなった？

闇。

見えたものは、夜よりも暗い、闇である。自分の指先すら見えず、一筋の光すら存在しない闇である。そんな闇に吞まれた。闇は、さながら巨大な獣が大口を開いたかのようで、そのままユウの全身を呑み込んだ。身体は浮かび上がり、ぐるりと反転して、遂には空と地面の向きさえわからなくなった。何も見えず、何も感じられない。唐突に放り込まれた虚無の中で、ユウが思わず悲鳴を上げそうになった瞬間、はじまりと同じように突然、世界に光と色が戻った。

落下した。

一メートルにも満たない高さだっただろうが、予想外の出来事に、ユウは身体をしたたかに打ちつけた。痛みに呻きながら、どうなったと、心の中で叫んだ。冷や汗を流し、心臓も破れんばかりに早鐘を打ち鳴らしていると云うのに、世界は静寂に満ちていた。

ユウは、床に倒れ伏していた。グラウンドではなく、板張りの床だった。わずかに顔を上げれば、そこは屋外ですらなかった。広い部屋である。ホテルの一室のように見えた。奥の間に大きなベッド

が見える。淡い照明が輝いているが、どこか違和感を覚えた。何かが違う。

ここは何処だ？

その疑問に思い至った瞬間こそ、背筋が凍るようだった。

そして、混乱も極みに達した。

「エクスルウ アルフィラ 」
声。

反射的に、ユウは飛び起きた。

身体が痛みを訴えて、盛大に顔をしかめる。その一方で、突然の動きに驚いてか、声の主が小さな悲鳴をあげた。女性の声だ。いや、少女の声だった。

ユウは、声の主を見た。
そして 。

後々冷静になつて鑑みると、それは本当に、自分らしくもない反応だった。頭を占めていた迷いや混乱、不安や恐怖が、その一瞬で真っ白になってしまった。危険に対して神経を張り詰めなければいけない状況で、ぼかんと呆けるなど、彼女の『代理』として失格だろう。目の前に穴があれば、埋まって一生をそこで暮らしたい程に、情けなく、恥ずかしい。

一人の少女が、そこにいた。

それだけである。

一人の少女が、そこにいた それだけのことに、心を奪われた。少女の美しさに、見惚れたただけだ。ほんの一時、息を呑むような一瞬の出来事に過ぎない。だが、それは何の言い訳にもならなかった。自分の意識が、状況に対する混乱よりも、少女の美しさに惹かれたという結論は、変えようがないのだ。

ただし。

それでも、ひとつだけ言い訳するならば 。
少女の美しさは、本物であった。神がいたずらで造ったような姿が、そこにあった。心を奪われた一時が過ぎると、ユウは逆に馬鹿

らしさすら覚えた。想像力の限界を超える現実というものは、こんなにも容易く、目の前にあらわれるものなのだ。

金色の髪。

深緑の瞳。

その肌と同じぐらいに白いワンピース姿だった。胸元にエメラルドのブローチ。左手には金色の腕輪。一目見て生粋の日本人でないことは明らかだったが、純粋な白人とも違うように思えた。

「アイカリイロウ エト リイシュ」

少女が話しかけてくる。

どうやら敵意はないようで、ユウもやや警戒を緩めた。しかし、相手の言葉がわからず、途方に暮れることになった。英語ではないドイツ語やフランス語とも違う。北欧や旧ソ連の言語だろうか。

意思の疎通ができないのは厄介だ。

「ごめん。何を云っているか、わからない」

ユウが答えると、今度は相手が首を傾げた。

身ぶりもまじえて、言葉がわからない旨を伝えた。

「イヤ」

嫌 と云われたのかと思ったが、少女の様子を見るに「YES」というニュアンスのようだった。どうしたものか と、ユウがため息をつこうとした所、少女が詰め寄って来る。美しさは、それだけで白刃のような鋭さを持つのだと知った。近づくことすら恐れ多いように思えて、ユウは知らず知らずの内、後ろへ退いていた。

だが、すぐに追いつかれた。

少女が手を伸ばす。

握手するように、ユウは手を取られた。

（はじめまして。私の名前は、ルーティア）

ユウは硬直した。

少女は口を動かしておらず、声もまた、耳に届いたものではなかった。

こだまのように残響する声に、ユウは思わず額をおさえる。痛み

があるわけではない。初めての感覚に、違和感を覚えたただけだ。すぐ目の前に、少女の顔がある。疑い深い視線を向けていただろうと思う。だが、彼女は眼をそらすことなく、じっと見つめ返してくる。「ルーティア？」

しばらく沈黙して、心を落ち着かせた後、ようやく声が出た。

少女はこれ以上の喜びはないと云うように、顔をほころばせた。「なにが、どうなって……」

（ごめんなさい。あなたの言葉、私にはわからないの。私の言葉が、あなたに伝わらないのと同じように。だから、あなたがよければ、言語を司る意思だけでも、私に見せてくれないかしら。大丈夫、こうして私の言葉が届くのと同じ状態にするだけだから。感情や記憶までは、見えないわ。問題なければ、一度だけうなずいてみせて）
悩まなかったと云えば、嘘になる。

だが、結局の所、ユウはうなずくしかなかった。

（あなたの名前を聞かせて）

「名前は、相馬……」

（いえ、言葉ではなく、この握った手を通して、意思を渡すように……）

無茶な注文である。

このような魔法みたいなこと、理解の及ばない世界だと思った。

魔法？

魔法使い？

閃くものがあつた。

（あら、よかった。聞こえたわ）

少女の言葉は唐突で、ユウは呆気にとられた。

（そうよ。これは、魔法の一種よ）

その言葉を受けて、心の中で思った事が、彼女に伝わったのだと知った。

（え、なに、どうやって？）

（凄いわね。ほぼ無意識でやってみせるなんて、あなた特別なのか

もしない。天使は魔法を使えないと聞いていたのだけれど、もしかして、その情報こそ間違いだっただのかしら)

(……天使?)

(ええ、天使は、あなた達を指す言葉よ。つまり、神の世界から常闇の世界へ落ちてきた人間のことね)

(常闇の世界?)

(そう、常闇の世界、シースーア。ここが私達の世界よ。神の世界から落ちてきたあなたには、右も左もわからないでしょう。魔法も使えないとなれば、苦勞することになるわ。でも、大丈夫、安心して。あなたが元の世界に戻るまでは、ルーティア・フェイメオール・デイルムの名にかけて、あなたに不自由はさせないわ)

理解のできない単語が、次々と出てくる。

先程以上の混乱にユウが襲われる中、対照的に、彼女は嬉しそうだった。

(ところで、あなたの名前は?)

(……相馬ユウ)

(ソーマね。わかったわ)

ルーティアと名乗る少女に、尋ねるべき事柄は山のようにあった。しかし、何から訊くべきなのか、まずは頭を整理させる時間も必要だった。水が欲しいと思った。落ち着いて座れる椅子も欲しかった。その時、部屋の入り口から、大きな声が響いた。

振り向けば、一人の女性 いや、よく見れば長髪の男性が、そこに立っていた。非常に端正な顔立ちをしているため、ユウも思わず見間違えてしまった。だが、一度男と見て取れば、印象はがらりと変わり、凜々しさ、たくましさが際立つ。

長身痩躯、片目に眼帯をしている。

だが、それ以上に注目すべきは、彼が鋭い声で何事が叫び、腰元の剣を抜き放ったことだろう。

(ルーティア)

心の中で叫ぶという、人生初の試み。

ユウは彼女を庇うように一步前へ出た。混乱した状況下で、やや臆病になっていた所もあるのだろう。冷静でさえあったならば、剣を抜いた青年は、ルーティアの知己か何かである可能性が高いと、すぐに思い至ったはずだ。

（大丈夫よ）

落ち着いた静かな声で、ルーティアが云った。

（ありがとう。彼の名前は、アルス・ランドル。私の騎士よ）

ルーティアは、くすりと笑った。

（あなたが落ちてきて、大きな物音がしたから、様子を見に来たのでしょうね。そうしたら、王女と見知らぬ男が薄暗い部屋で手を取り合っているという、前代未聞の場面に出くわしてしまった。そんな所ね。アルスにあんな顔をさせるだけでも、あなたがこの世界に落ちてきた意味はあったと思うわ）

（王女？）

（……あら？）

ルーティアは小首を傾げる。

ユウの顔を奇妙な動物でも眺めるようにのぞき込んだ後、やはり楽しそうに笑った。

（ごめんなさい。あまりにも当たり前のことだったから、云い忘れていたわ。考えてもみれば、私のことをルーティアなんて呼び捨てにした男は、お父様を除けば、あなたが初めてかもしれない。でも、なんだかそれも楽しいから、あなたは是非そのままいてちょうだい。こんな風に気安く話せる相手が、私にはとても少ないの。あなたがよければ、短い期間かもしれないけれど、私と友達になつてくれれば嬉しいわ）

そうして、彼女はあらためて自己紹介した。

（私の名は、ルーティア・フェイメオール・ディルム。三大国のひとつ、アーカスの第一王女よ）

第9話「物語を始めよう」(2)

一悶着。

そんな一語では片づけられない程の大騒ぎが続いたが、当の本人であるはずのユウは、まるで蚊帳の外だった。

あの後、彼女の騎士であるという青年、アルスは剣をおさめたものの、ルーティアに対して叱責するように何かを滔々と述べていた。それに対して、ルーティアは苛烈に云い返していた。どのような言葉の応酬をしていたのか、ユウにはわからない。ルーティアが手を繋いでくれない限り、ユウは何かを云う権利も、何かを聞く権利も持たないのだ。

(細々とした調整や連絡は、アルスや他の者達に任せただから、あなたは何も気にしないでいいわ。アルスはあなたをどこかに預けるべきだと云うけれど、そんなの面白く……いえ、無責任な話よ。天使を最初に見つけた者は、その保護者となることは条約で定められているわ。王族だからと云って、例外にすべきではないと、私は考えるわ)

小一時間の議論を経て、ルーティアはようやくユウの手を取り、そんな風に述べた。

(実は、私達はこれからバースタイムという国に行く予定なの。公務ではあるけれど、旅行のようなものと思ってもらえばいいわ。天使のあなたは、このシースーアのことを何も知らないでしょう。ならば、ちょうどいいのではないかしら。私達と共に、色々な所を見て回って、この世界がどんな所か知るというのも)

そもそも状況がわからず、未だ混乱の中にあるユウは、具体的な意見を述べることなどできなかった。言葉はまるで綿菓子のように、聞いたそばから、溶けて消えていく。咀嚼する暇もない。

思考を放棄してしまえば楽になるだろうが、それはもちろん、許されない。

伊吹カナならば、この程度のことは遊びの範疇だ。

だから、彼女の『代理』たるユウは、考え続けなければいけない。

冷静になろう。

ユウは自身に云い聞かせた。

ルーティアは、自らを王女と述べた。

加えて、その傍らにたたずみ、険しい視線を向けてくるアルスは、彼女の騎士であると云う。腰元に提げられた西洋剣が偽物でないことは、素人のユウにもわかった。そうした中世のヨーロッパを思わせる慣習を残している国と云えば、もちろん、鎖国中のイギリスである。

青鳥町からイギリスへ、刹那の時間で辿りつく方法があるだろうか。

伊吹カナ、或いは伊吹家の力があれば　そのような奇跡を起こせる可能性も、決して零ではないだろう。

しかし、ここがイギリスである可能性は限りなく低いと云えた。

第一に、ルーティアやアルスが使用している言語は英語ではない。

第二に、ここがイギリスならば、日本との時差の関係で、今が夜であるのはおかしい。第三に、ユウは襲われていない　首筋に触れてみても、血を吸われたような痕はなかった。

考え方を、変えよう。

言葉の通じない中で、彼女と会話ができているこの現象は、魔法と呼ぶしかない。ならば、IMUに承認された魔法使いの中に、彼女と特徴が一致するような者がいただろうか。ユウは覚えている限りで、十九名の魔法使いを思い出してみるが、残念ながら該当するような者は皆無だ。

唯一、【No.6】断頭台の魔法使い、エレナが、旧ソ連出身であり、白人種の金髪であるという点で近いが、彼女は妙齢の女性であると聞き及んでいる。また、敵味方の区別なく首を撥ねたがる狂人という噂であるから、とてもルーティアの特徴とは一致しない。

そこでふと思いつく。

（ルーティア。外、見てもいいか？）

何でもない願いだったが、ルーティアは一瞬、迷うような素振りを見せた。訝しんだユウだが、それを問う前に彼女はうなずいた。

（ええ、もちろん構わないわ。どうぞ）

一旦、手を離れた。それから窓辺に寄って、カーテンを開く。眼下に、光に彩られた街並みが広がるのを見て、随分と高い建物にいたことを知った。

相当な都会である。苔のように、光が闇夜に広がっている。郊外に離れるほど、光は薄く途絶えていく。その様子から、都市部と郊外では格差が大きいことがうかがえた。

空を見た。

最初、何が違和感を与えるのか、気づかなかった。星のない闇夜だった。水に溶かさないままの絵の具を、べったりと塗り付けたような黒い夜だった。

違和感は、徐々に大きくなった。

月はなかった。星のひとつ、見えなかった。もやのような雲すらも、まるで見当たらなかった。見えるものは、ただ一色の黒である。虚無である。ユウは甚だおかしいな表現であることを自覚しながらも、こう思った。

空がない。

（ソーマ）

不意に声をかけられる。つまり、いつの間にか傍へやって来ていたルーティアに、手を握られていた。

（天使がこの世界に堕ちてきた時、皆、最初は誰も異世界なんて信じないと云うわ。馬鹿げた話だと笑ったり、理解を越えて泣き出したりする。実際、このシースーアでも、神様が世界の構造を明らかにするまで、もうひとつ世界があるなんて信じる人はいなかったわ。だから、あなたもすぐには信じられないと思う）

それでも　と、ルーティアは続ける。

（天使は皆、この世界が暗闇の雲に包まれているのを見て、徐々に理解すると云うわ。このシースーアが、自分達の生まれ暮らしてきた世界と異なる場所なのだと、嫌でも実感していく。私達は、青空や星の輝きというものを知らないけれど、それはきっと、この景色とはまるで別のものなのでしょうね）

世界がふたつあることを実感させるほどに　そんな言葉を、ルーティアは迷い無く言い切った。

（夜の間は、まだよくわからないかもしれない。でも、明日の朝になれば、ここがあなたのいた世界とは違う場所であることを、嫌でも実感できると思うわ）

いたわるように、優しい口調だった。

実際、彼女は心配しているのだろ。会話をするために握られた手に、彼女のもう片方の手が、包み込むように被せられた。

同じ年頃の少女に向けられる気遣いが、少し気恥ずかしい。

だが、そのお陰で、わずかな冷静さも取り戻せた。

そうだ。

ユウは思い出す。

動揺する程のことでもない。

そして、自身に言い聞かせる。

伊吹力ナの隣で歩んできた過去を思えば、この程度の異変で、我を失っている場合ではない。

彼女がこの境遇に陥ったならば、どうするだろうか。笑うだろう。それは容易に想像がついた。彼女は、最高のおもちゃを見つけてしまったように、意気揚々とこの世界の探検に乗り出すはずだ。

ユウは『代理』として、彼女の振る舞いを真似する。
顔をあげた。

前を向いた。

彼女のように笑うかわりに、小さなため息をついた。

自分らしさを、忘れるな。

（俺は元の世界に帰れるのか？）

ルーティアに向けて、何よりも重要な事を尋ねた。

（ええ、もちろん）

行く末にどれだけの困難が待ち受けているか、身構えていたユウは、あっさりとしたルーティアの言葉に、やや拍子抜けした。

（あなたのように神の世界から堕ちてくる人は、これまでも沢山いたわ。その扱いについて、きっちり整備が進んでいるとは言い難いけれど、一定の規則は出来上がりつつある。必要な手続きさえ済ませれば、問題なく帰れるわよ）

問題があるとすれば　ルーティアは少しだけ言葉を濁し、続けた。

（シースーアと神様の世界を隔てる“扉”を開くには、幾つか条件があるわ。それを満たすためには、少なくとも一ヶ月近くは待たなければいけない）

具体的な日付を聞かされて、反射的に考えた事は、新学期の開始に間に合わない、という事だった。実際には、それよりも憂慮すべき事は沢山あった。

そもそも一ヶ月も行方不明になっていれば、向こうでは大騒ぎになっているだろう。警察沙汰になっていれば、さすがに厄介だ。

そんな風に考えて沈黙していると、ちなみに　と、ルーティアが付け足した。

（シースーアと神様の世界で、時間の感覚は同じみたいよ。これまでの天使との接触事例から、判明しているわ。一日は二十四時間、一ヶ月は三十日か三十一日。一年は十二ヶ月あるわ）

微笑を含んだ視線が、正否を問いかけてくる。

ユウは無言のまま、うなずいた。

（さらに云えば、今日は八月四日……いえ、ちょうど日付をまたいで、八月五日になった所ね）

右手はルーティアと繋いでいる。左手には腕時計を巻いていた。日付も表示されるそれを見やれば、まさにその通りの日時が刻まれていた。

（あなたが不思議に思うであろうことは、ある程度予想できるから、それはその都度、説明してあげる）

彼女はそこで一度、話を締めくくった。

（夜も遅いことだから、今日はひとまず休みましょう）

詳しい話は、また明日　そんな風に云われてしまえば、保護される立場のユウに反論する余地はなかった。

尋ねたい事は山のようにあったが、それらを口にしていくと、まるで迷子の子供が泣きわめくような、収まりのつかない状態にもなりそうだった。

頭を冷やす時間は、必要だ。

ユウはため息と共にうなずき、手を離した。

手を離す　言葉が交わせないことに、それだけで不安を覚える。ルーティアは迷子の子供に向けるような、優しい微笑みを浮かべていた。ユウも最後に、意識して笑顔を向けた。

そして、一晚。

あてがわれた部屋で、ほとんど眠る気も起きないまま、時間だけが経った。朝になるまで時間はたつぷりとあったが、情報も少なく、頭の整理は一向に進まなかった。

それでも、覚悟を決めるには足りた。

ルーティアの話を全て鵜呑みにすることは、考えることを放棄するも同然だった。あらゆる物事の真偽は、これから自分の目で確かめていくしかない。

異世界。

その一語を、考える。

ルーティアは当然のように口に使っていたが、本来、一般的な言葉ではない。非常に曖昧とした表現だ。ここは異世界だ　などという説明では、結局、ここが何処であり、何であるのか、まるでわからないのだから。

結局、自分で考えるしかない。

自分で、やるしかない。

後ろ盾もなく、右も左もわからない。意味もなく走り出し、叫びまわりたい気分でもあったが、不思議な程に冷静な部分もあるのは、長く付き合ってきた幼なじみのお陰だろう。

魔法の言葉を唱えた。

伊吹カナだから。

どんな不思議も異常も、当然に変わる。

七守学園のグラウンドで、闇に吞まれた瞬間こそが、ターニングポイントだった。あの闇は、まさにカナと相対した瞬間に発生した。彼女がこの状況の原因だと考えれば、何もかも納得してしまいそうになる。

あいつは、あの後どうなった？

答えが出るはずもなく、そのまま朝を迎えた。

第9話「物語を始めよう」(3)

レナを、助けに行こう。

浅い眠りから覚めると、掌から水がこぼれるように、夢の残滓もあっさり消え去った。一滴だけ残った夢の記憶は、昨夜、伊吹カナの発した一言だった。

ユウは身を起こしたまま、しばらく呆然としていた。

急転直下の出来事に混乱し、忘れていた言葉だ。

「いや……」

思わず、うめいた。

忘れていた訳ではないのだろう。考えないようにしていたというのが正しい。七守学園のグラウンドで起こった出来事やカナが告げた言葉の意味を冷静に考えられる程、余裕があった訳ではない。

一年間、思えば同じだった。

目の前にあらわれる物事にだけ、ひたすら注意を向けてきた。カナの『代理』を勤めようと思えば、トラブルに暇はなかった。だから、常に我を忘れる程に全力で、目の前の出来事にだけ意識を向けていれば良かった。

そうして、少しずつ、カナに近づけると信じて。

言い訳。

異世界に迷い込む。

それは、想定もしていなかった事態で、混乱を来すには充分だ。まさに目の前に差し迫ったトラブルであり、全力で取り組むに足る状況だ。

他の物事を考える余裕もなく、他のトラブルに気を取られる隙も見せず、その事だけを考えていればいい　はずだった。

レナを、助けに行こう。

一年間。

逃げ続けてきた言葉が、頭の中、繰り返される。

繰り返し続けてきた言い訳が、溶けた氷のように、もはや意味を失っていることに、不意に気づいた。ユウは頭を抱えて、しばらく目を閉ざす。

一秒。

二秒。

三秒。

わずかな時間が、無限に延びる。

無限の時間で、ユウは考えた。

一年間、ずっと、恐かった。逃げ続けている間に、道は少しずつ狭くなった。最初からゴールなど見えていなかったが、もはや一寸先も見えない闇の中にいることに、いつしか気づいていた。

謝らなければいけなかった。

しかし、謝ることができなかった。

カナに怒られることが恐かった。カナに呆れられることが恐かった。カナに失望されることが恐かった。カナに見捨てられることが恐かった。

カナを失うことが恐かった。

しかし。

一年が経った今になって、当たり前のことに気づかされた。

七守学園のグラウンド、一年ぶりに見せた制服姿で、懐かしい笑顔と飄々とした態度で、有無を云わせない圧倒的な実力で、不可能など感じさせず、最強や無敵という言葉こそ似つかわしく、この世の全てを掌で遊ばせる伊吹カナは、やはり、優しかった。

カナは怒ることもなかった。カナは呆れることもなかった。カナは希望を寄せてくれた。カナはいつでも見ていてくれた。

カナは。

「ああ、畜生」

ユウは閉ざしていた瞼を開き、世界を見た。

そこはやはり異世界で、かつてない大きな異変に巻き込まれている事実を、否応無く叩きつけられる。空のない世界、王女や騎士、魔法 考えるべきこと、やるべきことは山のようにあるだろう。

しかし、今の一時だけは、それも忘れる。

繰り返される、同じ言葉。

レナを、助けに行こう。

「畜生」

零れた言葉を拾ってくれる者は、もちろん、いない。

第10話「手を握る」(1)

朝、部屋に備えられた時計が七時を刻むと、窓の外から光が差し込み始めた。ベッドから身を起こし、あらためて外の世界を見やっただけで、大きくため息をつく結果となった。

異世界。まず、ここが自分のまるで知らない場所であることは、確認できた。ヨーロッパ連合や第三共同体の各国にも、このような場所は存在しないだろう。そもそも、地球上で、このような光景が実現するのだろうか。

朝の日差し。

太陽が輝いている。

だが、青空は存在せず、夜よりも濃い闇が、世界の天井を覆っていた。そこだけ見れば、まだ夜が明けていないのかと錯覚する。しかし、眼下の街並みへ目を向けて、視界から空を外せば、途端に普通の景色となる。街を行き交う人々は、真つ暗な空を気にかける様子もなく、当然のように日常を過ごしている。

若干の目眩を覚えて、ユウはベランダから身を退いた。

しかし、頭を休める暇はなかった。

いざ活動を始めれば、ここはあらゆる意味で“違う”場所だった。話し言葉が理解できなかった時点で予想はついていたが、やはり文字も見慣れないものだった。空調が効きすぎて肌寒い程だったが、操作盤の文字が読めず、調整はできなかった。

苦労したのは、洗面所である。顔を洗おうと蛇口へ向かい、水を出すためのコックが無いことに気がついた。色々試みたが、結局、水は出せなかった。

嫌な予感を覚え、洗面所の横にあるバスルームのドアを開けた。ホテルにありがちな狭いシャワールームに足を踏み入れ、色々調べたものの、やはり水を出す方法がわからない。慌てて、トイレへ向かった。

そして、困惑した。

見慣れた形の水洗トイレである。一流のホテルなのだろう。清掃も行き届いた様子で、清潔だ。唯一にして最大の問題があるとすれば、やはり水を流すためのコックが見当たらない所だ。

地味なピンチだった。異世界という途方もない異常事態の中で、随分と矮小な悩みに取り組む羽目になった。とはいえ、例えば海外へ旅行に出かければ、文化の違いに面食らうことも多い。それが異世界となれば、根本から生活の成り立ちが違う可能性もあるだろう。一人で悩んでも解決しない。

やはり誰かに尋ねるのが早い。

反射的に、室内を見渡して電話を探していた。だが、見つからなかった。そもそも、冷静になってみれば、言葉が通じないのだから電話があつたとしても役に立たない。

会話をするならば、魔法に頼らなければいけない。

あらゆる意味で、ルーティアの助力が必要だ。

彼女は、王女である。

この異世界シースーアにおいて、国家の勢力図がどんなものであるか、ユウはまだ知る由もない。また、王女という肩書き自体が、どれほどの権力を持つのか、それもわからない。

ただし、騎士という時代がかった存在を傍に仕えさせる様子や堂々とした振る舞いを見る限り、ただの一般人とは隔絶した力を持っている事は確かはずだ。

そんな彼女に気安く接して良いのか、悩まないと云えば嘘になる。だが、それ以上に、今は打算があつた。

この異世界でひとまずの衣食住を満たすことは、どうしても必要になる。生きることには右往左往しているようでは、この先、何かしらの“目的”ができた時が思いやられる。

利用できるものは、最大限に利用すべきだった。

もちろん、受けた恩義は、返せるものならば返したい。現状どのように返せるのか、おそらく恩義の借金は増える一方だろうが

それでも、最後の良心は胸に秘めておくユウである。

ルーティアを探そう。

そんな風に考えをまとめ、ユウは部屋を出ようとした。彼女の部屋は最上階であるから、階段を上って行けば自然と行き着く。途中に警備の者がいるかもしれない。そうした場合、言葉も通じないため、どのように通してもらえばいいだろうか　と、先んじて頭を悩ませていたが、それは徒勞に終わった。

部屋の扉を開けると、そこに、ルーティアがいた。

「ファ」

彼女の短い声は、どうやら驚きをあらわすもののようなのだ。

ユウ自身、予想外であったため、一瞬、言葉をなくしていた。

よくよく見れば、彼女は一人ではなかった。その傍らには、昨夜も顔を合わせた彼女の騎士、アルスが無表情のまま立っていた。その瞳には何の感情の色も見えなかったが、その片手は、わずかに剣の柄に触れていた。

もう一人、少女がいた。

ルーティアとアルスの後ろで、身を引くようにして控えている。

年頃は、ルーティアと同じぐらい　つまり、ユウ自身とも変わらないようだ。緊張した面もちで、少女は服の裾を握りしめている。その服装を見て、すぐさま察しがついた。白を基調とした制服は、おそらく女中のものだろう。

「ルーティア？」

問うように呼びかければ、彼女は応えるようにうなずき、そして手を伸ばしてきた。その美しさにまだ若干の戸惑いを覚えつつ、ユウも手を伸ばし、その手を取った。

（おはよう。よく眠れたかしら？）

まずは軽やかに挨拶される。

（ああ、お陰様で）

（それは良かったわ。昨夜より、顔色も良さそうね）

部屋に入ってもいいかしら　そう尋ねてくるルーティアに対し、

ユウは素直に応じた。ルーティアが先陣を切り、その後に、アルスと女中の少女も続いた。

皆が部屋に入ってしまった所で、ユウは先にルーティアへ声をかけた。彼女の来訪がどのような理由によるものか、その本題に入られる前に、先に細事を片付けておこうと考えたのである。

（悪いけれど……）

やや情けない内容でもあったので、歯切れ悪く、水の出し方すらわからない旨を告げた。呆れられるとも思ったが、むしろルーティアの方が申し訳なさそうな表情になった。

（ええ。説明が足りていなかったわ。私の方で考慮しておくべきだったのに、悪いことをしてしまったわね。実は、そうした生活に関わる事について、あなたが困らないように来たのだけれど……）

云いながら、ルーティアはそのまま手を引いて、洗面台へ向かった。先程見た時と変わらず、蛇口はあるが、コックもスイッチの類も見当たらない。果たして、どうするのか見守っていれば、ルーティアは蛇口そのものの手をかざした。

（ここに、感知用の石英があるの。わかるかしら？）

蛇口の一点に、米粒程の大きさの石がはめ込まれている。

ただの装飾と思い、ユウは気にも留めていなかった。

（この石英に、魔力を反応させれば……ほら、ね）

水が出た。

ユウはしばらく沈黙して、試みるように、蛇口の石英部分に触れてみた。予想通り、それは何の反応も示さず、水を止めることはできなかった。

（やっぱり、あなたには無理よね）

ルーティアは予想していたと云うように、うなずいた。

（天使は魔法を使えない……それは、つまり、自身の内に流れる魔力すら、感じ取れないという事になるわ。魔力を扱うこともできないならば、当然、感知石英を反応させることもできない）

つまり、日常生活に大変な不便が生じる　ルーティアは、そう

説明した。

（それは、困るな）

ユウも率直な感想を漏らした。

魔法や魔力について、まったくの無知という訳ではない。幸いなことに、それらに精通した人間を幾人も知っていた。だが、だからと云って、彼らに教えを請うような事はしてこなかった。

魔法使いになるという事は、平穏な日常を捨て去る事と同義だった。力を得る事は、相応の危険を背負う事であり、危険と隣り合わせの日常を歩むからには、捨てなければいけないもの、諦めなければいけないものが、無数に生まれてくる。

実際、師と仰ぐ人物は、こう云ったものだ。

まだ早い。お前では、無理だ。

長い人生なんだから、急いで道を決めることもない。

魔法使いの道は、修羅の道。子供が歩める程に、甘くない。

魔法使いという肩書きが大きな意味を持つ現実と比べて、異世界はどうやら根本的な部分が違うようだ。魔法や魔力が、随分と生活に近い。

（一人で水も出せないとなると、不便どころか、ただ普通にすることも支障が出るな）

（ええ。魔力が必要になる場面は、それこそ日々のあちらこちらに、無数にあるもの。場当たり的な対応では、解決は望めないわ。そこで、根本的な解決方法を持ってきたという訳よ）

部屋の方へ戻った。

アルスは変わらず、仏頂面のままだ。まだ警戒されているのだろう。ユウはそれも仕方のない事と考える。信頼は一朝一夕に得られるものではない。

「セシル」

ルーティアが呼びかけた。

アルスの背後から、表情を強張らせたまま、ぎくしゃくとした動きで少女が進み出る。ユウとルーティアが居並ぶ所までやって来る

と、やはりぎこちない動きでお辞儀した。

（この娘は、セシル・マクリール。まだ新米の女中よ。城へ奉公にあがって間もないから、仕事に不得手な所はあると思うわ。でも、術は達者で会話も問題ないし、何よりあなたと年も近そうだから、気安いでしよう）

どういうことだ　と、無意識に、訝しむ視線を送っていた。

ルーティアは端的に、こう述べた。

（セシルを、あなたにあげる）

思わず言葉を失ったユウへ、ルーティアは胸を張って云った。

（ソーマ、感謝しなさい。専属の付き人を持つなんて、相当に裕福でなければ難しいことよ。わからない事は訊いてみればいいし、そもそも身の回りの世話は全て、彼女へ任せるといいわ。基本的に、あなたの傍を離れないように命じてあるから、困ることはないはずよ）

あらためて、セシルという少女を見やった。

青ざめていた。

震えていた。

だが、視線が合うと、その瞳に剣呑な光が、ぎらりと宿ったように見えた。敵意である。殺気にも似ていた。思わず目を見開いたユウであるが、次の瞬間、セシルは何事もなかったように顔を伏せていた。

第10話「手を握る」(2)

王女は、やはり多忙であるらしい。

申し訳ないけれど　そんな風に前置きして、ルーティアは部屋を辞した。午前中は取りかかるべき仕事があり、時間に余裕がないという事だった。今後の行程はセシルが知っているということ、それに従って欲しいと云う。

(午後、この街を出発する予定よ)

ルーティアは、どこか楽しそうに述べた。

(それまでは、自由にしてもらって構わないわ。でも、できれば、ホテルの中に留まっていてちょうだい。街中へ出かけられると、セシルも慣れないだろうから、大変になると思うの)

ルーティアとアルスの二人が行ってしまい、ユウは嵐が過ぎ去った後のような静けさに、唐突に取り残された。

無言のまま、女中の少女が一人。

年の頃は、説明に合った通り、ユウと同じくらいだ。

格好は制服で統一されている。白と黒を基調としたデザインは、伊吹家のメイド姉妹を連想させた。王女や騎士という言葉聞いて、どうにも中世ヨーロッパのような印象を抱いてしまうが、ルーティアやアルス、そしてセシルの服装は、古めかしさを感じさせるものではなかった。このまま青鳥町の繁華街にやって来ても、休日のお学生として、特に違和感なく溶け込むだろう。

「フイーアラスィ　トツテ　ルア　」

セシルが、意を決したように、何事か語りかけてくる。

ユウは首を横に振った。

「ごめん。わからない」

セシルは最初から顔色の悪い様子だったが、それがさらに、青ざめた。警戒する野生動物のように、一定の距離を置いて、近づいて来ない。徐々にユウも、彼女の様子に不信任を覚えるようになった。

最初こそ、王女であるルーティア　すなわち、権力者が傍にすることに緊張しているのかと思っていた。だが、彼女の示す反応は、緊張というよりも、恐怖や怯えに近い。

沈黙が、随分と長く続いた。

軽口や冗談を云おうにも、言葉が通じない。

空気の重さに耐えきれず、痺れが切れそうになった頃、セシルがようやく動きを見せた。口元を強く結び、これから戦場にでも躍り出るような形相で、彼女は一步、前へ踏み出した。

そうして、ユウの手を握った。

（セシルといいます）

叫ぶような大きな声が、頭の中に響いた。

（王女様から、身の回りの世話をするように申しつけられました。よろしく願います）

そこまで言い切ると、セシルはまるで汚い虫でも振り払うように手を離れた。会話ができたことよりも、彼女のそんな振る舞いにこそ、興味を引かれたユウである。

見れば、セシルの顔は、これ以上なく血の気が引いていた。やはり怯えられているのだろうか。だが、彼女に出会ってからこれまで怖がらせるような振る舞いをした覚えはない。

ユウは遠慮して、一步身を引いた。

その距離から、あらためて彼女の姿を眺めた。

年の頃は同じぐらいだろうが、背丈はユウの方が高かった。七守学園の級友達と比較すれば、小柄な部類に入るだろう。金色の髪を後ろで一本の三つ編みに束ねている。褐色の瞳は、どこか猫を思わせるような釣り目で、青ざめた表情に対して、きつく結ばれた口元が、ひそかな意思の強さを感じさせた。

相手は既に名乗っている。

自分も自己紹介をすべきだろうと思い、ユウは握手しようと手を伸ばした。

だが、彼女の手を掴もうとした瞬間、セシルはそれこそ猫のよう

に悲鳴をあげて、俊敏に飛び退いた。そして、メイド服と思しきその清楚な格好とは裏腹に、身を低くし、両手の五指を広げ、これ以上近づけば引つ掻くぞ　とでも云うように、威嚇してきた。

ユウは静止して、しばらく沈黙する。

そして、思わずつぶやいた。

「え、なに、この面白い子？」

言葉が通じないからこそ、本心である。

そのまましばらくにらみ合った　実際の所、にらんでいるのはセシルの方だけで、ユウは呆然と眺めていたに過ぎない。自分は何をしているのだろうか　と、ユウが虚しさを覚え始めた所で、彼女の顔色が徐々に変わり始めた。

頭に上っていた血がいつぺんに引いたかのように、再び、青ざめた。恐怖とは違う。その顔色からうかがえるものは、後悔だった。

何を思ったか　或いは、何も考えていないのか、ぐしゃぐしゃと頭をかきむしっていた。思えば、ユウが知るメイドと云えば、三千字三姉妹だけである。三姉妹はそれぞれ個性的だったが、メイドという意味ではプロフェッショナルだったのだ。

今更、ユウはそんなことに気がつく。

「言葉が通じないことを前提で敢えて云っておくけれど、王女の使いとして、その仕事っぷりは、首になっても文句は云えないだろうな」

ユウは指さして云ってみる。

言葉が通じる訳もないセシルは、頭に手をやったまま、ぽかんとしていた。遊びに夢中になっていた子猫が、急に目の前を横切ったトンボに気を引かれ、ぴたりと動かなくなったような反応だ。

ユウは、驚かさないように、ゆっくりと忍び足で前へ出た。その動きを見て、セシルが警戒するように、身を堅くする。

「よしよし、落ち着け」

野良猫に餌でも差し出すように、ユウは片手を伸ばした。セシルはその手をじっと見つめ、たっぷり数秒間は迷いを見せた後、恐る

恐ると云った様子で手を伸ばしてきた。

今だ　と、ユウは素早く、その手を掴み取る。

（ぎゃあ）

悲鳴が、頭に流れ込んできた。

青ざめているセシルには気の毒だが、これで少なくとも話ができると安心したユウである。逃げられないように、

握る手に力を込めた。ほっと一息。だが、野生の獣は、追い詰められてから、決死の反撃に出るものである。

目の前に、足があった。

それが何か理解する前に、反射的に身を捻っていた。危なげにひるがえるスカートと共に、セシルの蹴り足が、ユウの前髪をかすめて空を切る。

驚きに言葉も失ったユウだが、なぜか、セシルも目を丸くしていた。

避けられた？

そんな心の声が、聞こえるようだった。

当然ながら、手を捕まえている余裕はなかった。蹴り足を避ける際に、追撃を予期して、間合いは大きく離れていた。無言のまま、沈黙が続いた。

「なんだ、いったい……」

言葉が通じない不便を、実感する。

セシルと云えば、空を切ったその足を、何度も床に打ちつけていた。まるで感覚を確かめるようだった。爪先でリズムを計るように、とんとんと。そして、「ル　ソダ」と、短く何かをつぶやいた。

おもしろい。

直感で、ユウは言葉の意味を推測した。

セシルの表情が変わっていた。蒼白だった顔が、血色を取り戻している。おもちゃを見つけた子供のように、瞳を輝かせていた。

「よし、わかった」

ユウはため息をつく。

「何が何なのかわからないけれど、お前は、俺の知り合い連中と比較しても、なかなか上位の変わり者に入る」

通じない言葉で、ユウはそんな風に云ってやる。

同時に、セシルが素早く床を蹴った。

一足飛びに、間合いを詰められる。セシルは両手を左右に大きく広げ、先程と同じく、引つ掻くように指を広げていた。左右に視線を巡らし、さて、どちらが伸びて来るかと、慎重に構えていたユウは、相手が目の前から消えたことに驚かされる。すぐさま、下と気付く。

飛び込んで、しゃがみ込む　大胆な動きだが、看破されると脆い。足を払おうとする相手の動きに併せて、膝を蹴りだそうとしたユウであるが、その寸前で、思いとどまる。

相手は、伊吹カナではない。

全力で膝蹴りを浴びせていい訳がなかった。

迷いがそのまま結果となる。ユウは足を払われ、押し倒された。そのままセシルは馬乗りの形となり、ユウの両手を抑えつける。

（俺の勝ちだ）

満面の笑みのセシルが、高らかに心の声で勝ち誇った。

ユウは、黙ってその顔を見上げていた。

沈黙も十分と感じた所で問いかけた。

（……俺？）

セシルは、明らかに、狼狽した表情になった。またも蒼白な顔に逆戻りである。必死に言い訳を考えているのが見て取れる顔で、その唸り声が、手を通してユウの頭にも伝播してきた。

何を云うのか、逆に楽しみになったユウである。

（えー、つまり、だ）

セシルは云った。

（俺……じゃなくて、私は、男が苦手なんだよ……えっと、つまり、男性恐怖症なんです）

今更、丁寧な物言いをしても、一度剥げたメツキはどうしようもなく、さらに付け加えれば、言い訳をする以前に、馬乗りの体勢をやめるべきであつただろう。押さえつけられた格好で云われても、何の説得力もなかった。

第10話「手を握る」(3)

最終的なセシルの決断は、以下の台詞に集約されている。

(あー、もういいか、面倒くさい)

セシルは床の上で、乱暴にあぐらをかいていた。長めのスカートを鬱陶しそうに払う姿は、淑やかさとは無縁だった。とはいえ、既に取り繕えない所まで来ていたから、猫かぶりを止める事は、むしろ潔いとも云えた。

(それで、結局、おまえは何なんだ?)

(何なんだって訊かれてもな……)

セシルは歯切れ悪く、顔をしかめた。

結局、ユウも彼女の対面に座る形で、身の上話にも似た世間話に興じることになった。手を繋ぐことには、相変わらず抵抗があるようだったが、どこか腹をくくった様子でもあり、その表情はさながら、苦手な野菜を無理矢理飲み下す子供のようでもあった。

握手の瞬間。

(うえ)

まずいものを飲み込むような声だった。

男が苦手　男性恐怖症という話は、その場しのぎの嘘という訳ではなく、真実、彼女が抱える病であるらしかった。

(そこまで徹底的に嫌がるなんて、原因でも?)

(あるにはあるけど、個人的な事だから、あんまり話したくない) そんな風に、要所では返答を拒みつつも、セシルは自らの事を語って聞かせた。

曰く、男性に触れられることが苦手である。自分から触れる分には、覚悟を決める時間があるので、どうにか耐えられるということだ。

先程は、いきなりユウの方から手を伸ばされた為、思わず逃げしまった。そしてまた、いきなり手を掴まれた為、足が出てしまっ

ただ などと、彼女は云った。

（この世界の女子は、反射的に足が出るのか？）

驚いて尋ねてみれば、セシルはひきつった笑いを浮かべた。

（いや、実は、育ちが悪くて……）

セシルは自らの出自を、上流階級とは縁遠い、片田舎の貧困層であると述べた。

礼儀作法を身につけるような機会もなく、野山を駆け巡る時間の方が長かった。男も女も分け隔てないような場所で育ったため、言葉遣いも荒い。数奇な巡り合わせで、王女の小間使いなどという仕事に就いているが、慣れない振る舞いに日々、悪戦苦闘の最中という事だ。

（よくわからないが、それで、王女の身の回りの仕事が務まるのか？）

（いや、どう考えても、無理だ。無理して無理して、ようやく人並みだ。どうしてこんな役目を負っているのか、俺の方が神様に聞きたいぐらいだ）

セシルはあっさり云う。

その言葉遣いに言及すれば。

（普段は、地金の部分が見えないように、がんばっているんだけど。まあ、もともとのおしゃべり方は、こんなもんだよ）

セシルは、あっけらかんと云い放つ。

（考えてもみれば、俺がこんな風にしゃべっても、お前以外には聞こえないわけだよ。お前が黙ってくれば、先輩方に怒られることもないわけだ。うん、これは気楽でいい。どうせばれてしまった以上、よろしく頼むよ）

少女らしい振る舞いは、最初の挨拶の一瞬だけで、幻と消えたことになる。

ユウの知る男友達、その誰よりも快活な笑みを浮かべて、セシルは自らに関する説明を終えた。頭に血がのぼり、思わず襲いかかってしまった件については、照れたように頭を掻くばかりだ。

（まあ、いいや）

結局、ユウはそんな風に告げた。

（うやうやしく扱われるよりも、友達感覚で接してくれた方が、気安いかもしれない。俺だって別に、偉い人間というわけでもない。たまたま王女様に保護してもらった一般人だ。年齢も同じという事だし、気楽に、仲良くやろう）

（いいね。お前が話のわかる奴で助かったよ。こんな失敗、ばれてしまったら首だ。王女様の客人に蹴りかかって、襲いかかるなんて思い返すと相当にまずいな。うん、この恩はいつか返すよ。あらためて、俺の名前はセシル・マクリール。セシルと呼び捨てにしてくれてかまわない。お前の名前は？）

（相馬。相馬ユウだ）

（そうか。よろしく、ソーマ）

晴天のように晴れやかな笑顔だが、男と手を握っているせいか、青空のように顔色は悪いという複雑な表情を試みせた。

性根は明るく、単純なのだろう。

最後に付け足して、セシルはこう云った。

（主従の関係なんて気持ち悪い。俺達は友達だ）

異世界の友人である。

異世界でも、知り合いは変わり者ばかりになるのだろうか　な
どと、ユウは胸の内で、こっそりため息をついた。

第10話「手を握る」(4)

ユウは街並みを眺めていた。

レドナ　と呼ばれる都市である。

大通りに立ち並ぶ建物は、どれもが四階以上はある大きなものばかりだ。至るところに広告が見えるが、ユウにはそこに書かれた文字を読むことができない。ただし、紙に描かれた絵が、まるでテレビ画面のように動く様は興味を引き付けられた。注目すべきは、電線が一本も見当たらないことだろう。この街は、電力によって成り立っているわけではないらしい。

目の前には、四車線になる大きな道路が見える。

やや渋滞気味の道を、車が行きかっている。見た目、確かにそれは車である。ただし、ひとつ大きな違いがあった。どの車にもタイヤがないのだ。車はどれも、宙を滑るようにして進んでいる。

科学や文明が発達している　というわけでもない。

むしろ、科学や文明の発達した道筋が、まるで異なった場所という方が正しいように思えた。

ユウは傍らを振り返る。

セシルは、あくびをしていた。

「おい」

呼びかけると、彼女は目を白黒させた。

「アカ　リパ　マ」

「わからないから、ほら、手を……」

場所は、ホテルの玄関である。

時間は、昼になる間際という所だ。

セシルと打ち解けた後、彼女の助力を得て、朝の身繕いを済ませた。シャワーを浴びる際には、ちょっとした騒ぎもあった。馬鹿らしいハプニングだった。その記憶は、心の奥深くに捨て去ることにしたユウである。

ともあれ、ほとんどは順調に、思った以上に平穏な時間が流れていた。言葉もわからない。部屋の器具も使えない。そんな散々な状況ではあるが、遙かに文化の異なる異国へ旅行にでも来たと思えば、やや心も救われる。

友達　そんな間柄になったセシルは、本当に遠慮を捨てたよう
で、一応はべつたりと付き従っているものの、仕事はさぼりがちだ。
「ほら、早く」

彼女に差し伸べた手を、さらに近づけた。

彼女は害虫でも目の前に迫ってきたような顔で、一步、後ろへ退いた。嫌々と首を横に振っていたが、ユウは容赦せず、無言のまま、彼女を見つめた。

「アバン、デルモア」
何事か、罵られる。

そうする内に、セシルは意を決したようで、肩を震わせながら手を握ってきた。

（やればできる）

（お前、ひどい奴だ。本当に、嫌なんだぞ。笑うなよ。鳥肌が……。
うわ、鳥肌がやばい。気持ち悪い）

最初の接触こそが困難なようで、いったん手を握ってしまえば、セシルは徐々に落ち着きを取り戻す。一息ついた所で、ユウは本題を切り出した。

（あれは？）

指し示したものは、道を行き交う物体だ。

（車だよ。そんなことも、天使はわからないのか？）

ずばり予期した通りの答えが返ってきたが、聞きたいのは、むしろここからだ。

（あれは、どうした原理で飛んでいる？）

（原理って云われても……）

数秒の沈黙に、俺は馬鹿だからな　　という言い訳が、垣間見えた。

（まあ、魔法だよ。魔法）

セシルは投げやりに云った後で、唸りながら続けた。

（石英はわかるか？）

（石英？）

ガラスの原料だったか　と、ユウは首を捻る。

（石英は、魔法を使う際に一番便利な道具なんだ。この角度だと見えないけれど、車の底にも、石英が張り付けられていて、それで、そこに赤術だか、固形魔力のあれやこれやが……）

言葉の後の方は、うんにやらかんにやら　と、ほとんど意味を為していなかった。

（まあ、とりあえず、飛ぶんだよ）

結局、何もわからない。

ユウがため息をつくとき、馬鹿にされたと感じたのか、セシルが目をつり上げる。彼女の荒つぽさは、既に身に染みて理解しているユウである。これ以上、同じ話題を続ければ、手が出てくる危険性すらあった。

（もうそろそろ、いい時間だろう。昼になったら、ここを出発するんだったよな。いったん、部屋に戻ろうか）

気を逸らす意味で、そう告げれば、セシルはあっさりと怒りを忘れたようである。（うん、それがいいな）と、うなずく彼女を連れて、ユウはホテルの中へ戻ろうとした。

（おい、ちょっと待て）

ホテルの玄関を抜けようと、きびすを返した瞬間である。セシルの慌てた声に、ユウは振り返る。

（手、離さないのか？）

問われて、ユウは当たり前の顔をして応じる。

（俺はわからない事だらけだ。あれやこれや尋ねたいから、会話はいつでもできる状態がいい。手を繋ぐのに、いちいちお前が決心するのを待ってたら、時間がかかる。このまま繋ぎっぱなしだ）

セシルは蒼白な顔になった。

（嫌だ嫌だ嫌だ。気色悪い。手、離せ）

（こっちこそ嫌だよ。面倒だ）

振りほどこうと必死になるセシルを、ユウは捕まえて逃がさなかった。高級ホテルの入り口で、さながらダンスを踊るような滑稽な動きを披露する羽目になったが、幸い、先に息切れしたのはセシルの方だった。

（俺の粘り勝ちだ）

（畜生。覚えてろ）

肩で息をしながら、互いの健闘を罵りあった。

呼吸が落ち着き、冷静になってみれば、随分と間抜けに思えた。異世界であるから、知り合いに目撃される心配がないのが唯一の救いだ。とはいえ、注目を集めてしまったようで、道行く人々から、くすくすと笑われていた。

（芸人と思われたかもな）

セシルが愚痴をこぼす。

ユウもやるせなくため息をついた所で、車の行き交う車線を隔てた向こうの通りからも、こちらを伺う視線があることに気づいた。

意識を引かれたのは、その風貌が異様だったからだ。

正確には、その服装だ。

全身を、すっぽりと真っ黒なマントで覆っている。目深にフードを被っているものだから、顔つきも影になって覆われている。そのため、年頃はおろか、性別すらも見て取れない。

その傍を歩き過ぎる人々も、異様な雰囲気を感じ取っているのか、避けるようにしている。黒マントの人物は、人の波を割るようにして立ちすくんだまま、じっとこちらを伺っているのだ。

（セシル）

不吉なものを感じて、手を繋ぐ彼女にも促してみたが、やや遅かった。瞬間、黒マントの人物は後ろを向き、人混みの中へまぎれていった。セシルが振り返る時には、既にその姿を見つけることは難しくなっていた。

（ソーマ、どうした？）

セシルの案じるような声にも、答えられなかった。

黒マントの人物　否、彼女は、人混みの中に消え去る途中で、フードを取り払った。ユウからすれば、後ろ姿しか見えない格好だったが、それで十分だった。

見間違えるはずもなかった。

真紅の獅子。

それは、赤い髪をした少女だった。

第11話「魔道列車の旅」(1)

八月五日、朝の七時。

シースーア最高峰の魔法使い十名が管理するものは、“太陽”だけではない。世界が光に満たされる瞬間、シースーアに住まう者達は、それで時間を知る。刹那の狂いもなく浮き沈みする“太陽”は、朝の七時、小夜の十二時、真昼の十四時、夜の二十一時を、世界の人々に知らせる役目を持つ。すなわち、“太陽”を管理する魔法使いは、世界の時間も管理していると云えた。

テラスから、ルーティアは空を見ていた。

朝の訪れを待っていたルーティアは、“太陽”が輝き始めたのを見て、すぐさま部屋の中へ戻った。机の上に置かれたガラス瓶を手に取り、隣の部屋の扉を開く。最高級のホテルであれば、室内に石英結界ぐらいは備えてあるものだ。大がかりな結界とは言い難いが、ルーティアが使用しようとする魔法の階位を思えば十分だった。

抱えていたビンの蓋を開き、ルーティアは茶褐色の粉末を手に取り、つまみ出したものは、トネリコの枝を粉末状にしたものである。魔力媒体には石英が一番望ましいとされているが、一度きりの使い捨て魔法ならば、こうした代替品を用いるのが常だ。

トネリコの粉末で、まずは床に円を描いた。ルーティアは記述式に一瞬だけ頭を悩ませる。朝から長々と口論するのも馬鹿らしいと考え、口述式で一部を代替することに決めて、円の中に簡易的な公式を組み立てていく。

そもそも王の識別式を、みだりに痕跡として残すのも良くないだろう。

魔法の対象は、父であり、国王であるウィルヘルト・デイルムその人だ。遠隔地にいる相手を対象として捉えるためには、各人がそれぞれに備える固有の魔力を、正確に識別する必要がある。その情報の塊とも云うべきものが、識別式である。

術式の陣に魔力を走らせ、同時に口頭で式を紡ぐ。最後に、国王の識別式を唱えた。

そうして、魔法は完成する。

「おはようございます、国王陛下」

先手必勝とばかり、ルーティアは慇懃無礼に挨拶した。目の前には、国王ウィルヘルトの姿が映し出されていた。蜃気楼のように揺らぎ、不鮮明な影も多いが、全身像を投影できるだけでも、大人顔負けの技量である。

挨拶をされた国王は、ちょうど執務机に座ったばかりだったのだろう。ペンに手を伸ばした格好だった。顔色ひとつ変えないまま、国王はルーティアの方をじっと見つめていた。重いその口が開かれたのは、たつぷり十秒は経ってからだった。

「王に対して、許可も取らずに魔法を使用するなど、お前ぐらいのものだろうな」

「ええ。そんな娘に識別式を教えてしまったお父様の負けです」

ルーティアが微笑んで見せても、ウィルヘルトの顔色は一切変わらない。

「既に、一報は聞いた」

小言を漏らすよりも、本題に入ってしまった方が早いと踏んだのだろう。国王はそんな風に切り出した。ルーティアはわずかに身を引き締める。

「天使を拾ったそうだな」

「ええ、その通りです」

国王の声に、感情の色は見えない。平坦な話し方は、彼の特徴でもあった。果たして、今、その頭の中でどのような計算がされているのか、娘であるルーティアにも計り知れない部分がある。

「歳も近そうな少年ということだが、お前の見立てでは、問題はなののか？」

天使。

神の世界の墮人。

その出現は、神がこの世界から消え去る直前に、予言した事でもあった。ここ十年以上に渡って、天使は保護の対象であり、同時に研究の対象でもあった。彼らには幾つかの特徴があった。魔法がほぼ使えない、言葉が通じない、本物の太陽や星を知っている。しかし、天使という名称を与えられているものの、本質的な所では、どうやら彼らはシースーアに住まう人間と大差ないようだった。

すなわち、天使の中にも、善人と悪人がいるのだ。

「彼は、問題ありません」

ルーティアは迷いなく、そう述べた。

「これまでの天使の例に比較しても、非常に冷静で、落ち着いています。錯乱したような気配はまったく見られません。あくまでも私見ですが、私のことも信用してくれています。その人柄も、勇敢で思慮深いと見受けられます。人間性という点において、問題があるどころか、これがシースーアの人間であつたならば、早速城に召抱えるべきだと進言する所です」

褒めすぎだろうか　と、ルーティアは自分の言葉を省みる。

だが、言い過ぎなぐらいが、ちょうどいいだろう。天使と云えども、素姓のわからない人間であることは間違いない。そんな者を、これから公務で国外へ向かう一行に加えようとするならば、まず一点の曇りもあつてはならないのだ。

「もしかすれば、青の天使……大賢人の再来となるかもしれません」
駄目押しとばかりに告げた一言に、国王が一瞬、眉をひそめるのが見えた。

青の天使とは、観測史上で、最初に記録された天使の事である。そして、天使の中でも、とりわけ強くシースーアに影響を与えた人物でもある。大賢人とは、その功績を讃えて付された称号である。英雄の一人にも数えられる人物だが、功罪の折り混ざった経歴には、決して賞賛ばかりが与えられているわけではない。

そこに思い至り、ルーティアは迂闊だったことを悔やんだ。
十年以上も前の話になるが、青の天使はアーカスの国宝のひとつ

を持ち去っている。神の造りし七剣の内の一本。本来は人の手に余る存在だが、その七兄弟の中でも友好的だった彼女を、アーカスは天使に奪われてしまったことになる。

当然、国をあげて大追跡が行われた。

大賢人が神の世界へ還った以上、もはや意味を失った話だが、当時にかけられた懸賞金は未だ有効という話も聞く。それだけ、青の天使とアーカスには確執があるのだ。

ルーティアは、心して王の言葉を待つ羽目になった。

「わかった」

議論はここからであり、国王が述べるだろう正論に対して、反論する武器の少ないルーティアは、その気構えだけで押し切るつもりだった。

だが、予想に反して、国王はあっさりうなずいた。

「好きにすればいい。天使の面倒は、お前に付けてある女中にでも任せればいいだろう。お前でなくとも、意志の疎通が取れる程に術が達者な者もいるはずだ」

虚を突かれたルーティアだが、表面上は、平静を装った。

「ええ、その点は既に、仰られる通りに手配しています。小間使いの中から一人を見繕って、この外遊中は天使に専属で付くように命じるつもりです」

魔法にも、用途によって様々な種類がある。

魔力を介して、直接的に意志の疎通をはかろうとするならば、そうした系統に精通している者でなければ難しい。

例えば、アルスは騎士であるため、魔法の鍛錬にも日々勤しんでおり、技量も相当なものである。だが、彼が得意とするものは、主に自身の身体に係る魔法である。

もちろん、アルスでも短い時間の会話ならば問題ないだろうが、常に何時でも対応しようとするならば、やはり元から適した人材を見繕う必要があった。

「問題はないということだな。要件はそれだけか？」

多忙な国王であるから、時間がないのは理解できる。それにしても、性急に過ぎないだろうか。ルーティアが疑問を覚えなかったと云えば、嘘になる。ただし、自分にとって一番望ましい結果が得られたと云うのに、必要のない勘ぐりをして、答えが覆るのも馬鹿らしかった。

「お父様、ありがとうございます」

晴れやかな笑顔を最後に見せて、ルーティアは魔力を遮断した。魔法が途切れる瞬間、父親の顔が一瞬曇ったのは、はたして気のせいだろうか。

第11話「魔道列車の旅」(2)

シースーアには大陸がひとつしか存在しない。

暗闇の雲は、大陸を覆うように、球形に世界を包み込んでいる。

そのため、大陸から離れるように船を進めたとしても、すぐさま暗闇の雲に行く手を阻まれることになる。かつては新天地を求め、暗闇の雲を抜けようと試みた者も大勢いたと云うが、誰一人として帰らなかったため、いつしかそのような無謀を犯す者もいなくなつた。

シースーアは、現在、三大国と呼ばれる三つの国家が主権を握っている。

北部にソレイア、南西部にバースタイム、東部にアーカス。それら大国の隙間を埋めるように、小国家が乱立している。十数年前、当時の大国であつたジンドが内乱により滅び、新たにバースタイムという新国家が誕生した際には、その混乱の影響もあつて、大陸中に争乱の気配が忍び寄つた。一種即発の状態であつたが、様々な要因により事なきを得て、それ以降は三大国のパワーバランスが拮抗するようになった。

現在は安定期を迎えており、少なくとも、表面上の国家間の関係は良好である。

三大国それぞれの領土にまたがって建造された魔道列車は、稼働を始めてからの数年、特に大きなトラブルに見舞われることもなく、大国の主要都市を日々順調に結んでいる。

レドナの街にも、その魔道列車の発着駅がある。

小夜を迎える頃、ルーティアはアルスと共に車に乗り込み、ホテルを発つた。列車の駅へ向かうためである。レドナの街で済ませるべき仕事の数々が、順調に消化できたのは幸いだった。

なお、国王との話を終えた後には、真っ先に女中のセシルを呼び出し、命令を与えていた。セシルという少女を見るのは、ルーティ

アにとつても初めての事だつた。

年若い事もあるだろうが、その振る舞いに、まだ頼りない印象も受けた。それでも術に長けた者が他にいない以上、天使の世話は彼女にしか務まらない。まさかルーティアが四六時中、一緒にいるわけにはいかない。気楽な旅とは云え、公務であることは間違いなく、道中も様々な仕事が舞い込んでくるからだ。

アルスは表立った態度こそいつも通りに見えるが、その内心では、なかなか冷めない怒りが、まだ火種のまま燻っているようだった。王女の安全を第一と考える騎士ならば、見ず知らずの部外者をその傍に置くなど、到底受け入れられるものではないだろう。

ルーティア自身、王女の振る舞いとして、馬鹿げていることはわかっている。

天使の保護は、第一発見者が行うことは通例であるが、王族にまで絶対の法として適用されるものではない。もちろん、発見者の責任として、然るべき庇護が与えられるように手配はすべきだろうが、それすらも部下の文官に任せればいい話だ。

本来、王女が係るような案件ではないのだ。

「ねえ、アルス」

車中、他の者には聞こえないように、ルーティアはそつと耳打ちした。

「セシリア・フェイメオールならば、こんな時、どのように振る舞ったと思う？」

質問しながらも、ルーティアの中で答えは出ている。

触れ合つたことのない母だからこそ、ルーティアは彼女に纏わる記録は、あまさず読んできた。セシリアは、自身の身分などに頓着しない。やるべきだと思つたことを、やる人だ。

ルーティアは思う。

自分自身に、偽りを抱きたくない。

王女の仮面を被り続ける生き様だからこそ、余計に、そんな風に考える。

「姫様は……」

アルスは、やや疲れたように云った。

「あの少年を好いたのですか？」

「ええ、だって、まるで迷子の仔犬のようで、放っておけないと思っただわ」

彼がどのように世界から堕ちてきたのか、それはわからない。

ただ、出会ったその時、振り返った彼の瞳に溜まった涙が、寄る辺のない孤独を感じさせた。それと同時に、ルーティアの存在を見て取った瞬間、孤独も不安も、影のように潜ませていた。ひたすら平静を装う姿に、何かを偽る生き方を　そうしなければ生きられない、どうしようもない不器用さを感じた。

「助けてあげたいと、思っただわ」

「それを、お人好しと呼ぶのです」

魔道列車の駅に到着する。

先行していた一団が、既に旅の手配は済ませていた。魔道列車はあらゆる階級の者が使用する、ごく一般的な交通機関であるが、王族が使用するとなれば専用の車両が用意されるのが常だ。

迎えに来ている者達に対して、アルスが短く言葉をかわして、それを確認していた。

「出発時間は、予定通り、一時間後です」

レドナの駅は、さながら小さな城のような外観をしていた。

建物内は、まず一面がホールになっていた。舞踏会すら開催できそうな広々とした石造りの広場に、多数の人々が行きかっている。奥の方から、魔力の発生に伴う独特の重低音が響いてくる。途中に柵が設けてあり、係の者達が列車の客を整列させて、乗車券を確認していた。

「騒然としていますね」

ルーティアは感想を漏らす。

最初から人の数は多く、雑多な気配に満ちていたが、今は別の意味で騒がしくなり始めている。ルーティアは、多数の視線にさらさ

れていることに、やや億劫な気分になる。いつもの事である。いつもの事であるが、だからと云って、気にならないわけではない。

無遠慮に自分を指さす手、興味本位の視線、自分の名が混じった話し声。顔も名も知らぬ者達は、人の形をした影のようなものである。無数の影に囲まれていると、逃げ場のないような圧迫感が付きまとう。

「姫様、あちらに……」

構内に足を踏み入れてすぐに、アルスが一方を指さした。

とある一角に、魔道列車の路線を示した地図が掲げられている。

大陸の大部分を占める三大国を横断する列車であるため、その路線図は当然、大陸全土を描写した大きなものとなる。

その地図の前に、手を繋ぐ少年と少女がいた。

アルスが呼びかけると、少女の方　すなわち、セシルが慌てたように振り返った。手を繋ぐユウは、まだ地図を見上げたまままだ。シースーアの言葉がわからない彼は、呼びかけられた事にも気がつかないのだ。

二人は一足先に、他の家臣団と一緒にあって、この発着駅に向かう手はずになっていた。予定通り、無事に到着したものの、時間を余らせていたのだろう。

ルーティアはアルスを促し、二人の傍へ近づいた。

近づく間に、セシルが語りかけたようで、ユウも振り向いていた。手を離れたセシルの方は、恐れ多いように、一步後ろへ退いていた。彼の方は、こちらの姿を見止めて、かすかに微笑を浮かべていた。片手を挙げて、ひらりと挨拶するように振ったが、途中で思い直したように、その手を引っ込めていた。

どうしたのかと思えば、彼はルーティアの目の前で、うやうやしく膝をついた。よく見れば、伏せた彼の口元が、かすかに笑っている。冗談のつもりなのだろうか。

ならば　。

「姫様、人の目もあります。お戯れは、ほどほどにお願いいたします」

す」

ゆるりと注意を促すアルスに対し、ルーティアは王女の仮面を被ったまま、無垢な笑顔を向けてやる。そして、膝をつくユウに向き直り、さながら騎士の叙勲を与える時のように、手を差し伸べた。

ユウが、面白そうに、その手を取る。

（真面目なように見えて、案外、冗談が好きなのね）

（余裕がない時ほど、道化になってみると、人生の先輩が教えてくれただけだよ）

（あら、余裕がないの？）

（理由もわからず、唐突に異世界に放り込まれて、余裕がある方がおかしいだろ）

周囲のざわめきが、一際、大きくなったようだ。

王女が、どこの誰とも知れない人間と手を取り合えば、当然そうなる。どこか小気味よい気分でもあり、ルーティアは微笑んだ。

「姫様」

今度こそ本気の口調で、アルスにたしなめられる。

（落ち着ける場所に着いたら、もう少し、ゆっくりと話をしましう）

そう告げて、ルーティアは手を離れた。

不思議なことに、目の前の少年は、周りの雑音を気にする様子がない。立ち上がった後、注目を集める群衆に対しては、ちらりと一瞥しただけだ。

彼は再び、地図の方へ視線を向けていた。

シースーアの全景は、神の世界から堕ちてきたばかりの者には、確かに気になる所かもしれない。だが、その視線には、ただの興味本位ではないような光も含まれていた。自分を騙そうとする詐欺師を相手に、まるで険しくにらみ返すような眼差しである。少々、これまでの彼とは異なる気配だった。

どうにも不思議な少年だ。

ルーティアはそう思う。

ルーティアが知る同年代の者と云えば、まずは貴族の子女が圧倒的に多い。次いで、王城に奉公に上がっている年若い女中達である。もちろん、ルーティアが自身をさらけ出して接するようなことはなく、あくまで王女の仮面を被った付き合いになるのだが、同年代の者達に対して抱く想いは、常にシンプル　幼い、という一言に尽きる。

比較してみれば、よくわかる。

彼の顔立ちや体格は、確かに、まだまだ未成熟なそれである。だが、黒髪の下にある表情は、常に少し笑ったようで、大人びた優しさを見せる。生い立ちから漏れ出たものだろうか。ルーティアは違うだろうと考える。彼の表情や態度には、自身はそうあるべきだとしても云うような、作り物めいた感覚を覚える。

ペテンのように、騙そうという訳ではない。

彼の被るものは、おそらく自分に近いのだろう　ルーティアはそんな風に想像する。

自分が王女の仮面を被って生きるしかないように、彼もまた、何かを背負って生きている。何かがあるからこそ、時に余裕を持ち、時に焦燥する。そうした生き様を選んでいる少年だから、そこの若者が引きずっているような幼さは、既に失っているのだろう。

良くも、悪くも　である。

ルーティアは、色々な人間を見てきたつもりだった。騙し合いや足の引っ張り合いが日常茶飯事な王宮での暮らしは、ルーティアに否応なく人間の本质を見抜く眼を与えた。

信頼を置ける相手か、そうでないか。

その程度の判断であれば、一目でできる自信があった。その直感が、彼は少なくとも悪人ではないと告げている。

だが、どのような人間かと問われれば、答えには窮してしまう。彼が背負っている”何か”については、まるで見当もつかなかった。

「彼のこと、どう思う?」

周りの誰にも聞こえない程度の小声で、ルーティアはアルスに尋ねてみた。

「私には、ただの無害な小僧に見えますよ。つまり、毒にも薬にもならない、至って平凡な少年です。姫様のようなお人が、わざわざ気にかける程の相手ではありません」

言い切った後で、アルスはしばし思案する顔になった。

表情はほとんど変わらないが、付き合いの長いルーティアには、手に取るようにわかる。

「言ってみなさい」

促せば、しぶしぶと云った調子で、アルスが述べる。

「姫様の部屋で初めに目にした時、不審者と思い、反射的に剣を抜きました。あの時、私は本気でした。若輩者とはいえ、これでもアーカスの騎士です。こちらの微塵も隠さない殺気に対して……しかし、奴は、まるで怯まなかった。それどころか、こちらに向けて一歩、踏み込んで来たのです」

それだけのこと　と、ルーティアは笑い飛ばす気にはなれなかった。

アーカスの騎士団と云えば、シースーアでも最高峰の武人の集まりである。その中でも、天才と称される程のアルスである。その気迫を正面から受けたならば、大抵の者は臆してしまう。特に魔法に精通していない者ならば、自然と溢れる魔力の勢いで、腰を抜かしてしまう程だ。

「やっぱり、面白いじゃない」

ルーティアは笑みを浮かべる。

アルスが、これだから言いたくなかったのだ　と、大きく肩を落としていた。

第11話「魔道列車の旅」(3)

一般客の人払いがなされた通路を抜けて、魔道列車の発着場まで赴けば、既に王族専用の車両がその場に停車していた。

車両は、例えるならば、矢のような形をしている。定められた路線を、まるで放たれた矢のような速度で飛ぶことも、その印象を強くする原因だろう。車体は軽金属で作られているが、底面はこうした移動具の常で、石英が装着されている。

魔道列車の特徴は、その石英の使用方法にある。列車は、一般的な移動具である車とは異なり、定められた路線上しか走ることができない。路線　すなわち、大地に埋め込まれた石英の長大なレールの事である。

車は底面に配した石英に、単純に浮力を与える魔法をかける。

魔道列車の原理はそれと異なり、大地に埋め込まれた石英のレールと車両の底面に配された石英が、互いに反発するような魔法をかける。

軽金属とは云え、相当な重量になる車体を持ち上げることは至難の業であり、魔法の効果や効率が低い方法が採用されているということだが　実際の所、専門家ではないルーティアは、詳細まで知らなかった。

持ち合せているのは、あくまで教養としての知識だ。

むしろ、普段から頻繁に魔道列車を利用している者達でも、魔道列車と普通の車の違いなど、何もわかっていない者の方が多いのではないだろうか。長距離を素早く移動できる便利なもの　その程度の認識であっても、その利益を感受するだけならば何も問題は無いのだ。

この王族専用の特別列車は、併せて五両の編成になっている。ルーティアはアルスと共に、二両目の車両に乗り込もうとしていた。先頭車両は、動力部であり、操作室も兼ねている。三両目と四両目

は家臣団が乗り込み、五両目には積荷が乗せられている。

ちょうど振り返れば、最後尾の車両　五両目に、大量の荷物が運び込まれている所だった。武官であろう屈強な男二人が、大きな木箱を運んでいた。あれだけの大きな荷物となれば、中身は何だろうか。サルト地方の有力者に手渡す土産物にしては、少々大きすぎる気もした。

しかし、そんな慌ただししい光景は、遠くのものに過ぎない。今まさに二両目の王族用車両に乗り込もうとしているルーティアの周りには、喧騒とは切り離されている。そもそも王女に直接話しかけるような事は、相当の役職を持つ者にしか許されない行為である。高等文官や女中長を除けば、ほとんどの者はルーティアに近寄ることすらしない。

ただし、今回は例外がいる。

ユウの姿を探して、ルーティアは周囲を見渡した。

ちょうど三両目の目の前で、ユウはセシルと手を繋いで立っていた。セシルが魔道列車の色々な箇所を指差しては、ユウが納得したような顔でうなずいている。二人とも終始無言であるから、それは少し不思議な光景にも見えたが、事情を理解しているルーティアからすれば、微笑ましくもあった。

朝、呼び出したばかりセシルは、ルーティアの方が気の毒になるくらい、緊張した面持ちだった。その強張り、遠目に見える彼女の表情からは消えている。二人の性格の相性が良かったのか、それとも。

セシルについては、少なくとも、これまで城内で目にした顔ではなかった。しかし、無数の女中や小間使いを抱える王城にあっては、ルーティアと直接係りになるような者はごく少数であるため、これは当然とも云える。

その人柄について、ルーティア自身が直接確かめたわけではないが、そもそも今回の一団は、国王が選別した者達である。問題を持った人間はいないだろうという安心感が最初からあった。

「上手くいつているようで、良かったわ」

小声でつぶやき、さて　と、ルーティアはアルスに切り出した。
「ソーマもこちらの車両へ来るように、伝えて来てちょうだい」

もはや何を云っても無駄と悟ったのか、アルスは疲れたようにうなずき、手を繋ぐ二人の方へ向かっていった。

一般的な車両は、多くの人間が効率的に乗車できるように、規則的に座席が並んでいるものだ。しかし、王族専用の車両となれば、そこに乗車する者はごく一部に限られる。最初から少数であることがわかっていて、大量の座席を並べる必要もなく、車両内は、むしろホテルの一室と変わらない造りになっている。

ユウが感嘆するように表情を変えたことを、ルーティアは見逃さなかった。歩み寄り、彼の手を取った。

（神様の世界にも、同じように、列車という乗り物があると聞いたわ。それと比べて、シースーアの魔道列車はどうかしら？）

（一言で云えば、興味深い）

ユウは部屋の中を見渡しながら、そう云った。

（こっちの車両に乗る前に、後ろの方も見てきたけれど、普通だと思った。新幹線……ああ、いや、俺達の世界で云うところの列車に比べて、内装はそれほど変わらないと思ったばかりだったのに、この車両は特別だな）

（まあ、王族専用だから、当然ね）

そのまま手を引いて、ルーティアは部屋の中にあるソファアへ彼を導いた。すぐ傍らへ、ルーティアも腰掛ける。手は届く距離であるため、会話するにも問題なかった。

アルスに対しても、楽にするように声をかけた。

「ありがたく、そうさせていただきます」

アルスは腰に提げた剣を外すと、それを脇に置きながら、すぐ近くの別の椅子へ腰掛けた。

「到着時間は？」

「少々準備に手間取っているようです。その遅れを見積もっても、

夜までには着くでしょう」

小夜を終えて、既に昼となっている。

途中幾度か停車し、休憩する必要があることを思えば、妥当な時間だろう。魔道列車ではなく、車で旅をしていた時代ならば、もう少し長くかかる。さらに昔、馬などが一般的な移動手段だった時代ならば、数日をかけた旅になっていたはずだ。

（もしかしたら、セシルから聞いたかもしれないけれど、これからこの列車に数時間乗っていることになるわ。普段ならば退屈な時間だけれど、今回は有意義に過ごせそうね。あなたも訊きたいことが沢山あると思うけれど、それは私も同じことよ。さて、ゆつくりとお話しましょうか）

第11話「魔道列車の旅」(4)

窓の外に見える”太陽”の明度が下がり、世界が紅く包まれ始めている。

夕刻の訪れを見て、三両目内にいたセシルは席を立つ。その際、ひらひらと鬱陶しいスカートが気に障り、顔をしかめた。仕事と云い聞かせ、普段は着ないような女中の制服に身を包んでいるセシルである。その心中を察したのか、近くにいた誰かが、くすりと笑い声を漏らすのが聞こえた。思わずにらみつけるが、皆、素知らぬ顔をしていた。

ルーティア王女が乗る車両のすぐ後ろに連結された三両目は、三十名弱の人間で一杯となっている。文官や武官、或いは魔法官であったり小間使いであったり、その格好は様々だ。今は話し声も途絶え、重苦しい沈黙に満ちている。景色を見たり、本を読んだり、あるいは寝たふりをしていたり、各々が好きなように振る舞っている。セシルはそんな座席の間を抜けて、四両目に赴いた。

四両目も同じく人が乗るための車両であるが、今は、ごくわずかな人影しか見えなかった。最も入り口近くにいた上背のある男、武官の格好をして、まだ年若いその男に、セシルは声かけた。

「調子はどうだ？」

気安い言葉づかいである。

振り向いた男は、にやにやとした笑みを浮かべた。

「セシル、似合っているじゃないか。まだまだガキだと思っていたが、スカートのひとつでもはけば、ちゃんと女に見えるぜ。色街に立っていれば、酒臭い親父の一人ぐらいはカモにできるんじゃないか」

からかう物言いに對して、セシルはその向こう脛を思いつき蹴りあげた。男が悲鳴を上げる。セシルはにこりとも笑わず、むしろさらに剣呑な視線になって、男をにらみつけた。「冗談だよ、馬鹿

野郎」と男がうめいている。

「それで、どうなんだ？」

「ああ。まったく。首尾は順調だよ。なんの問題もない……って、云いたい所だが、あれだ」

男は蹴られた部分を撫でさすりながら、車両の奥の方へ顎を向けた。

武官の格好をした男と文官の格好をした男が、それぞれ一人ずつ、大きな木箱を相手に悪戦苦闘していた。服の袖を捲りあげ、たくましい腕を剥き出しにしながら、釘抜きを構えている。しかし、頑丈そうな木箱は、まだ開く気配もなさそうだった。

セシルは頭を抱えた。

「うちの一団が馬鹿なのは、いつものことさ」

そんな風に云って肩をすくめる男を無視し、セシルはさらに奥へ向かった。木箱と格闘している二人の傍へ近寄れば、床に何本か、太い釘が落ちてるのがわかった。虚しさの余り、傍らを通り過ぎる際に、木箱の側面を力いっぱい蹴りつけた。

「お嬢、やめてください」

釘抜きを持つ男の一人が、慌てたように云う。

そんな言葉を背中に受けながら、セシルは一番奥、五両目に繋がる扉を開いた。貨物室であるため、窓もなく、灯りのひとつもない室内は大変薄暗かった。目を凝らしてみれば、ようやく薄ぼんやりと、積まれた荷物などが見える。

その闇の中に、蠢く気配があった。

セシルはその気配の方に向かって足を進め、あらためて、片手の指を折りながら数を確認した。全部で七名である。問題は何もなかった。

仲間の仕事振りを疑うわけではないが、念入りにしておくことは、決して悪いことではない。床に転がされている七名を縛るロープや猿ぐつわについて、一人ずつ確認してみる。ほとんどは年配の高等文官と思しき者達だったが、一人だけ女性がいた。女中長である。

彼女はセシルの姿を見て取ると、猿ぐつわをかまされた口で、何事かうめいた。恐怖で悲鳴をあげているか、悪しざまに罵られているか、どちらかだろう。

「大丈夫だ。殺しはしない」

こんな状況下で優しい声を出しても、意味はないだろう。それでも、無駄と知りつつ、セシルは出来るだけ脅かさないように気をつけて云った。

「俺達の目的は、無駄な殺生じゃない。この後、五両目だけ連結を切り離す予定だ。そうしたら、自然と減速して、そのまま止まるだろうさ。縄はほどいてやれないが、どうせ救助はすぐ来るよ。それまでの辛抱だ」

そんな言葉と共に、縄や猿ぐつわを強く結びなおした。

立ち上がり、拘束されている七名を見渡せば、皆、恐怖に近い色を瞳に浮かべていた。荒事に慣れているとも思えない人間ばかりだ。こうして捕えてしまったならば、手抜きりはほぼ起こらないだろう。セシルはひとつ肩の荷が降りた気分で、再び四両目に戻った。

後ろ手に扉を閉めた所で、歓声があがった。

何事かと見やれば、男達が勝利の雄叫びと共に釘抜きを振り上げていた。

「馬鹿、前まで聞こえるぞ」

長身の若い男が、そんな風にたしなめていた。

セシルはふたつ目の肩の荷が降りたことを知る。木箱まで歩み寄って、最後の釘が抜かれたばかりの蓋を、手で払い除けた。それと同時に、箱の中から煙が浮かび上がるかのように、一人の大男が立ち上がった。

年齢は、四十前後である。セシルの胴回り程もありそうな太い腕をしていて、肌は浅黒く日に焼けている。醜男ではないが、その巨漢と禿頭も相まって、悪鬼のような印象を与える。人ごみの中でも一番に目立つような風貌である。

大男の名は、バージヤム・マクリールと云った。

「よう、糞親父」

「なんだ、馬鹿娘。女の格好なんてしているから、誰かと思ったぜ」
バージャムは、セシルの父である。

木箱から抜け出たバージャムは、半日近く押し込まれていた事もあつてか、凝った肩をほぐすように腕を振った。その豪快な動きを眺めながら、やはりどのようなように変装しても、この大男だけは周囲の目を誤魔化せなかっただろう　と、セシルは思う。

バージャムは四両目にいた男達に向かって云った。

「準備は？」

「終わっています。みんな、前の車両で待ちくたびれていますよ。
お頭が出てくるのを、ずっと待っていたんですからね」

皮肉めいた物言いに、バージャムは「馬鹿野郎」と吠えた。

「時間がかかったのは、俺のせいじゃなくて、釘を打った奴のせい
だろうが」

至極まっとうな物言いだった。

しかし、セシルは常々感じていた疑問をぶつけてみる。

「それはそうだけど、そもそも糞親父まで来なくてよかっただけじゃないのか？」

他の者とは違い、目立つ風貌ゆえに、バージャムは変装もできなかった。そのため、荷物にまぎれて潜入するという手間をかけた訳だが、その手間をかける必要があったのか　と、セシルは問うた。
「念には念を入れた方がいいからな。特に、今回の獲物はこれ以上ない逸品だ。粗野なお前達に任せて、傷つけられたりすると困る。
要は、いつもと一緒だ。俺はお前らの子守役ってわけだ」

そんな風に云い放つと、バージャムは三両目に向かった。

勢いよく扉を開けば、三両目にいた者達が全員、いつせいに振り返った。車両内は不思議な静けさに満ちていたが、それはすなわち、嵐の前の静けさである。良い意味での緊張感が漂っていた。バージャムは満足そうにうなずいた。

それから、声を潜めて、こう宣言した。

「待たせたな、お前ら。さあ、仕事を始めるぞ」

盗賊団『暁の死線』。

その頭目であり、無法者の王とも揶揄されるバージャム・マクリルが、獲物を目前にして笑った。

「お姫様を誘拐するぞ」

第12話「暁の死線」(1)

ルーティアは数時間、ユウとの会話を続けていた。

魔道列車が順調に走行を続けるように、情報の交換もスムーズだった。神の世界については、過去に保護された天使の調査で、多くの事柄がわかっている。既知の情報と照らし合わせながら、彼という個人の詳細も調べる形になった。

名前や生年月日、職業から家族構成と云った基本的な事項はもちろん、シースーアにおいて有用となる技術や知識の有無も含めて、念入りに聞き取りを行っていた。それらの情報は、然るべき書類にまとめた後、三大国連携の研究機関に提出しなければならぬ。

ただ尋ねるばかりでは、尋問と変わらない。

ルーティアは会話をするように努めた。

(やっぱり同い年だったわね)

(誕生日まで同じとは、予想外だけどな)

生年月日を確認した際には、のように笑い合った。両親が健在であり、兄弟がいないことを聞くに及び、ルーティアは自身の境遇も述べた。

(私のお母様……つまり、アーカスの正王妃であるセシリア・フェイメオールは既に故人よ。国王である父に、一般的な父親との関係性は望めなかったから、家族はいないも同然ね)

ただし、国王は側室を三人抱えており、腹違いの弟や妹ならば何人もいた。(王位の継承を巡って、いざこざがありそうだ)と、ユウは云う。王城に関わる者ならば口が裂けても云えないような感想である。

尋ねた事柄について、ルーティアは自身も同じだけの情報を与えるように意識していた。シースーアという世界を理解してもらうためには、そこに住まう人間を知ってもらうことが大切だ。自分という個を通して、シースーアの在りようを見てもらえれば良かった。

（あなたのお父上は、何をされているのかしら？）

ふと何気なく尋ねた質問に、ユウが云いよどむ。後ろめたいところがあれば、特に隠す必要もない事柄だ。ルーティアが不思議に思っている、ため息と共に答えがあつた。

（政治家）

ルーティアは思わず歓声を上げそうになった。神様の世界の政治形態について、常々、踏み込んだ内容を知りたいと願っていた。シリーズにおける王制の仕組みは、統一期から連綿と続いており、確固たるものと評価されて来た。それがジンドの崩壊、群国家バースタイムの誕生に端を発する民主主義の隆盛により、揺るぎ始めている。

新しい風が吹き始めている中、帆を畳んで縮こまっている余裕はない。学べるもの、参考になるものが目の前にあるならば、貪欲に吸収するべきだ。ルーティアは、そう考える。

互いの個人的な話から、それぞれの世界の大局的な話へ、内容が移った。ユウはやや辟易していた様子だが、ルーティアはあえて気づかない振りをして、あれこれ興味を持っていた事柄を聞き出していった。民主主義の利点と欠点、選挙のメカニズム、国民の総意について 等々。

非常に有意義な時間が流れた。

「姫様」

どれくらい経っただろうか。

時間も忘れるほどに話し込んでいた。

「お疲れではありませんか？」

魔法での会話には、それだけ集中力を必要とする。数時間にもなれば、倦怠感を覚えるほどだ。アルスに云われて、ルーティアは自身が予想以上に消耗していることに気づいた。一心不乱に本を読んでいた後のような、軽い眩暈すら感じた。

（ごめんなさい。少し、休憩にしましょう）

手を離れた後、ルーティアは深くソファアにもたれかかった。

頭を休めるため、何気なく窓の外へ目を向ける。高速で進む魔道列車ゆえに、外の風景も、近くに見えるものはあつという間に通り過ぎてしまう。視界を広くすれば、そこは広大な森である。出発してから時間を思えば、ちょうどアーカスとバースタイムの国境沿いに広がるシェイウツドの森だろう。

会話を一旦やめた後、ユウの方はソファから立ち上がった。室内を物珍しそうに見て回る。一番興味を示していたのは、書籍である。室内に備えられた小さな本棚には、暇を空かすためか、有名な作品や近年の話題作が一通り並べられている。

ユウはその一冊一冊を手に取り、中身を確かめていた。

本の内容ではなく、書かれている文字が気になるようだ。その内の一冊を手元へ持って来ると、まるで暗号でも解読するように文字を追いつ始める。どういった観点で眺めているのか、若干気にはなつたが、疲れもあり、話しかけることはしなかった。

「アルス」

ルーティアは、疲れを隠さず云った。

「お茶を淹れてくれるように、頼んでもらっていいかしら。そうね、ソーマに付けていたセシルがいいと思うわ。彼が望むならば、セシルに話し相手になつてもらえばいいでしょう」

アルスはうなずき、三両目へ向かった。車両内は広い。ルーティアは遠目にその背中を追いかける。連結部の扉で、アルスは手間取っているようだった。しばらく扉越しに問答があり、やや経つてから、向こうから扉が開けられた。

「申し訳ありません。扉に何か、引っかかっていたようで……」
顔を見せて言い訳する文官に対し、アルスは手早く用件を告げていた。

それからアルスが席に戻り、「遅いですね」とつぶやく程に時間が経つてから、ようやく給仕道具一式を備えたセシルがあらわれた。その表情をうかがえば、今朝初めて言葉を交わした時と変わらず、極度に緊張しているようだった。

年若い女中であれば、よくある反応だ。

だが、ルーティアはどこか違和感を覚えた。

「姫様」

アルスが常より低い声でつぶやいた。

その声に含まれたものを、ルーティアは敏感に察する。

「そこで止まれ」

主であるルーティアに許可を取る前に、アルスは行動を起こしていた。

低く抑えた声で一喝すると共に、彼は剣を抜き放っていた。ルーティアは顔色ひとつ変えずに、見守ることに決めた。傍らをつかえば、ユウは眼を丸くしている。

剣を向けられたセシルと云えば、身を堅くして、立ち止まっている。言葉も出ないようで、口を開きかけては、また閉じる。という動きを、何度か繰り返ししていた。茶器を載せた盆を持つ手が、かすかに震えている。

剣を向けられた反応としては、至極まっとうなものだ。ルーティアは眼を離さず、セシルの様子をつかがい続けた。

アルスはなおも警戒した姿勢を崩さず、慎重に一步步、セシルとの距離を詰めていた。剣先は、ぴたりとセシルの身体を射抜いたままである。剣の間合いぎりぎりの所で、アルスは一度足を止めた。どうするつもりだろうか。と、ルーティアが見守っていると、アルスは唐突に一步を踏み込み、剣を横薙ぎに振るった。

茶器や盆が床に散乱し、派手な音を立てた。

息をつめたような静寂を破り、時間が早送りで流れ出す。

セシルは後ろへ飛び退いていた。その動きを見て、まずはルーティアも確信する。アルスの剣を避けられる者が、ただの女中であるはずがない。そして、その違和感は、さらにわかりやすい形となって目の前に示されていた。

アルスが横薙ぎに払った剣で、セシルの着ている制服のスカートが一部、ざっくりと斬り落とされていた。元は膝下まで届く長さで

あつたが、太股まであらわになっている。そして、まさにその太股に、巻きつけるようにして大振りの短刀が隠されていた。

セシルは間髪いれず、その短刀を抜き放つ。手慣れている。身構える様に、戸惑いがない。先程までの緊張した面持ちから豹変し、その瞳が殺気に満ちていた。相手が隙を見せたならば、一足飛びに懷へ潜り込んでやろうという気迫が、ありありと見て取れた。

「姫様、どういたしましょうか？」

アルスは、涼しい声である。

「捕えなさい」

「かしこまりました」

刃物を持ち、殺気を放つ相手と向かい合っても、アルスの表情は何一つ変わらない。敵が短刀で、自分が長剣であるから有利を感じているわけでもないだろう。彼にはただ、戦う覚悟があるだけだ。

殺気がぶつかり、緊張が高まる。

まさに両者が動き出そうとした瞬間だった。

「邪魔するぜ」

それは、気が抜ける程に殺意も敵意もない声だった。

一人の大男が、車両の中へ足を踏み入れてきた。彼に続いて、文官や武官の格好をした男達が、それぞれ手に武器を携えてなだれ込んで来る。

ここで初めて、アルスの顔色が変わった。ルーティア自身、思わず目を見張っていただろう。セシルがただの不埒者であるか、どこかの間者であるか、それはまだわからないことだったが、少なくとも、大勢の仲間がいることは想定していなかった。

王城で雇われること、王族の傍へ仕えることは、それほど簡単ではない。身分の保障は絶対であるし、一定以上の身分を持つ者の推薦も必要だ。邪な目的を持つ者が一人潜り込んでいただけでも、大問題に発展するだろう。

それが、こんなにも大勢となれば。

「悪いが、この列車は制圧させてもらった。抵抗は無駄だと悟って

もらおう。お前達が部下だと思っていた者はほとんど、こちらの手の者だ。何人かいた真正銘の本物　そんな城の奴らは、最後尾の車両と共に退場してもらった。つまり、この列車内に、お前らの味方は一人もいないってことだ」

大男が、教え諭すように云う。

その言葉の内容も衝撃的だったが、男の存在自体も、同じ程度に衝撃的だった。厳めしい顔つきに、天を突くような巨体。その風貌は、ルーティアも手配書の類で目にしたことがある。犯罪者として、シースーアでは名が知られた男だ。

犯罪者として。

犯罪者の、王として。

「盗賊団『暁の死線』、その頭目であるバージャム・マクリール殿とお見受けします。盗賊王の御高名、アーカスの王城でも聞き及んでおります」

ルーティアは意を決した。

「アーカス第一王女、ルーティア・フェイメオール・ディルム、お初にお目にかかります」

立ち上がった。

名を告げた。

対峙する。

第12話「暁の死線」(2)

かつての大国ジンドが滅び、バースタイムが建国されて安定期を迎えるまでには、ごく短い期間とはいえ、大陸の情勢が不安定になった時期がある。治安が乱れ、犯罪に手を染める者が増える一方で、そんな無法者を束ね、秩序をもたらす集団が生まれた。

盗賊団『暁の死線』。

海賊『黒蜘蛛』。

傭兵ギルド『黄色い部屋』。

とりわけ巨大な勢力を誇った三つの集団、それを率いる三人の首領を、俗に《無法の三王》と称した。もともと後ろ暗い所を持つ者達の集まりである。《無法の三王》がそれぞれ率いる集団は、各国の討伐対象にされることもしばしばだった。

だが、現在では全面的な衝突が起こることは稀である。

彼らが社会の秩序を暗部から守っていることは事実であり、各国も暗黙の内にそれを認めていた。手配書や賞金はそのままだが、事実は野放しと云っても良かった。

そんな《無法の三王》の一人。

盗賊王。

バージャム・マクリール。

その風貌や人柄について、世間一般にも広く知られた男である。ジンド崩壊後の混乱期に登場した後、盗賊団『暁の死線』を組織し、義賊としてバースタイムの安定に貢献したという話だが、それ以上の出自は謎に包まれている。厳めしい風貌と裏腹に、決して弱者を蹴るような真似をせず、悪党だけを懲らしめる姿勢は、義賊として一部に持てはやされている。

そんな男が、どうしてこの魔道列車にいるのか。

「単純な話です、ルーティア王女」

バージャムは云う。

「俺達の目的は、あなたですよ。現状のアーカスで最高位の王位継承権の持ち主で、国王からの信頼も厚く、国民からの人気も高いそんなルーティア王女の価値は、どんな金銀財宝よりも高いと云えましょう。警備にはもつと気を使っべきでしたな」

軽口と共に笑いかけるバージャムに、ルーティアは反射的に云い返した。

「噂で聞いていた盗賊王の評価とは異なりますね。『暁の死線』は、刹那的に金銭を求めるような盗賊団ではないと聞いておりました。あなた達が狙うのは、あくまで非道を行う為政者や悪行によって富を蓄えた者達であると……」

「ええ、仰る通りです。別にあなたを誘拐して、アーカスから身代金をせしめようと云うわけじゃありません。俺達は、そうした尻の穴が小さいやり方は好きじゃない」

バージャムの言葉に、仲間達が笑い声を上げる。

「安心してください。俺達は悪い奴らしか狙わない。ルーティア王女、あなたを悪党だなんて思っちゃいません。だから、扱いは丁寧にいたしますよ。王城での暮らし程とはいかんでしょうが、まあ、粗野な盗賊団ながらの最高の持て成しは約束しましょう」

誘拐する 暁の死線の目的は、そういう事らしい。

三大国アーカスの王女を誘拐すれば、世界的な大事件になるだろう。各国と無法の三王の安定していた関係にも、大きな亀裂が入る。少なくとも、アーカスとは全面的に敵対することになるはずだ。

宣戦布告にも等しい行いだ。

盗賊王率いる暁の死線と云えども、ただの犯罪集団であることに変わりはない。一国の王女を誘拐するなど、彼らには何の利益も生み出さない。不要なリスクを背負い込むだけだ。

「あなたの目的は何ですか。私を、どうしようと云うのですか？」

感情的に叫んだわけではない。

ルーティアは、バージャムの真意を知りたかった。

「目的ですか。俺達に いや、その云い方は、違いますな。今回

『暁の死線』が動いた理由は、俺の個人的な感情による所が大きい。だから、こう云いましょう。俺に、目的なんてものはありません」

バージャムは、はつきりと述べた。

「あなたを誘拐することは手段ではなく、それ自体が、目的とも云えましょう。身代金や捕らえられている仲間の解放を要求するつもりもあります。あなたに何かしていただくつもりも、今のところありません。大人しく俺達と一緒に来ていただいて、ゆっくりとおくつろぎいただければいい。人気者のルーティア王女は、大変に多忙な生活をされていると聞いております。羽休めとも思ってください」

バージャムは不敵に笑った。

ルーティアは努めて冷静な振りを装っていたが、状況がかんばしくないのは明らかだった。車両を繋ぐ扉は、今は大きく開け放たれており、奥の車両の様子がよく見えた。だが、そこに居並ぶ者達も、バージャムに付き従うように沈黙している。ほとんどの者が彼らの仲間だったという話は、偽りではないのだ。

ルーティアは心の内で歯噛みする。

しかし、事実が残酷にもその通りであったとして、どうしても腑に落ちない部分が残る。

「わかりません。これ程の大規模な企み、いくら無法の三王と云えども、簡単に為せるものではないはずです。特に、王城に潜入し、あまつさえ王女である私のすぐ傍まで……」

言葉にしている内に、ルーティアは唐突に思い当たる。

自らの想像に、ぞっとした。

これ程の計画は、王城の中に手引きをする者がいなくては、とても成り立たないのだ。一人や二人の潜入ではない。ルーティアの供をする一団のほとんどが、盗賊団に取って代わられているのだから。内通者がいたとしても、相当な高位のものでなくては無理だ。

ルーティアは、思わず口を閉ざした。

震えるな。

自らを叱咤し、冷静さを顔に貼り付けて、バージyamをにらみつけた。

「なかなか、気丈でいらっしやる」

バージyamは、どこか楽しそうに、つぶやいた。

「まさに、セシリアの生き写しですな」

機会をはかっていたのだろう。

唐突にその瞬間、アルスが踏み込んだ。

消えた　と、思わせる程の速さである。常ならば、誰かが気付くよりも早く、相手の心臓を貫いていただろう。虚を突いた必殺の一撃。アルスは、まっすぐバージyamだけを狙っていた。

だが、血飛沫が舞うかわり、響いたのは、剣の打ち合う硬質な音だった。

胸元に迫ったアルスの剣を、バージyamは一瞬で抜き放った長剣で、苦もなく防いでいた。バージyamは笑った。アルスの無表情が、ほんの少し、驚きに染まる。だが、それもまた一瞬の事だ。

両者の間合いは離れず、そのまま打ち合いになった。

「てめえら、退いてろ。巻き込むぞ」

バージyamが仲間に向かって吠える。そのまま広い車両内を動き回っての剣劇になった。その巨体に似合わず、バージyamは素早い身のこなしで、アルスの剣を防いでいく。アルスの方も、倍ほども体格の違う相手が打ち降ろす剣を、真っ向から受け止めていた。

アーカスの騎士団で、若くして才能を見出されたアルスは実戦経験も豊富である。ただの盗賊程度であれば三十人が相手でも斬り伏せてしまっだろう。

しかし、相手は盗賊団『暁の死線』。

盗賊王バージyam。

たかが盗賊、真正面からの戦いには非力と、侮ることはできない。アーカスの騎士団が直接討伐に出向いた記録はないが、近隣の小国が、盗賊王の首を狙って自国の部隊を派遣することは、これまで何

度もあつた話だ。

結果、鍛錬を積んだ武人達は、ほとんどが返り討ちにあっている。卑怯な手を使われたわけではない。名のある猛者であればある程、バージヤムは正々堂々の一騎打ちを行い、その上で完膚無く叩きのめしてきたと云う。

「アルス」

結局、ルーティアは途中で戦いを止めた。

アルスは呼び声に反応し、素早くバージヤムとの距離を開いた。怪訝な顔で振り返るアルスに対し、ルーティアは心の内で謝った。アーカスの天才騎士と無法の三王、その戦いをもう少し眺めていた気持ちも正直あつたが、ここでアルスが手酷い怪我を負うことになつては困る。

そして、何よりも、ルーティアは確かめなければいけなかった。

「盗賊王バージヤム・マクリールよ」

王女らしい振る舞い。

王女らしい声。

王女らしく、ルーティアは呼びかけた。

「この計画を企てた黒幕は……」

ルーティアは思う。

生まれた時から身につけており、生涯、どれだけ忌み嫌つても己の肉体から切り離せなかった。王女の仮面というそれを、ほんのわずかでも、愛しく思う瞬間が来るなど、想像もしていなかった。

ルーティアは、最後まで、王女らしく努めた。

この計画を企てた黒幕は……。

「我が父、ウィルヘルト・ディルム国王陛下ではありませんか？」
アルスが、制された後もバージヤムへ向けていた剣を、ゆつくりと下ろした。部屋の隅へ退避していた盗賊団の男達が、頭目から何も聞かされていなかったのか、眼を丸くしていた。その中にいるセシルなど、思わず何事か大きく叫びかけて、他の者から「馬鹿野郎、黙っている」とたしなめられている。

動じていない者は、バー ज्याムただ一人だけだ。

なにを馬鹿な　と、笑われた方が楽だっただろう。

「ええ、その通りです」

予想通り、望まない答えが返ってきた。

「この計画を持ちかけてきたのは、アーカス国王ウィルヘルト・デイルム　つまり、あなたの父君です。その手引きがなければ、これだけの人数を王城へ潜り込ませることは不可能でした。そして、誘拐するのに都合の良いように、あなたを王城から外へ出すように仕向けたのも国王の発案です。これが全て国王の意思のもとに行われた事ならば、あなたに逃げ道はないこともわかりでしょう」

第12話「暁の死線」(3)

気を強く持つているつもりだったが、呆然となっていた。

「姫様」

アルスの頬を打つような声に、我を取り戻した時には遅かった。傍観者の一人に過ぎなかったセシルが、短刀を片手に詰め寄って来ていた。視界の隅で、アルスがこちらへ駆け寄ろうとして、バージャムに阻まれるのが見えた。せめて剣があれば　と、悔やんでも遅い。首筋にぴたりと吸いついた刃物に、ルーティアは動きを封じられる。

「動くなよ」

すぐ耳元で、セシルが脅しの言葉を吐く。

「おい、糞親父。これでもういいだろ？」

「馬鹿娘。勝手に動きやがって」

バージャムは迷惑そうに顔をしかめていた。そして、剣を収めた後、アルスの方を無言で見やった。

視線の意味を、すぐさま理解したのだろう。アルスは表情を変えないまま、剣を床に放り捨てた。静まった部屋に響いた音が、終わりを告げる鐘の音のようだった。

バージャムが仲間達に合図すると、控えていた数人の男がアルスの周りを取り囲み、その体を押さえつけ、両手を縛りあげていく。

ほぼチェックメイトだった状態が、完璧に詰んでしまった。

どう足掻いても、もう一手も動かすことはできない。

「さて、ルーティア王女」

バージャムは云う。

「これで、ご自慢の騎士殿も無力化しました。あなたに残された最後の武器も失った以上、抵抗は無意味だと悟ってもらえますかな？」

「ええ、わかっています」

そもそも首筋に刃物を押し当てられた状況だ。

ルーティアには、逆転の手立ては残されていなかった。仮に、この場をどうにか切り抜けたとしても、もはや逃げ場はない。国王が本当にルーティアを貶めたのならば、少なくとも、アーカス国内に居場所はないことになる。

王女という仮面。

それを失い、ただ一人の少女となった瞬間、こんなにも自分は無力なのだ、ルーティアは思い知らされた。

「色々と腑に落ちない点もございましょう。難しい話になりますので、それらは落ち着ける場所に着いてからということでもよろしいですか。ルーティア王女、今は、大人しく俺達といっしょに……」

バージャムが云いかけた言葉は、途中で、不自然に途切れた。

瞬間、悲鳴があがった。

痛みを訴える少女の悲鳴　セシルの悲鳴だ。首筋から刃物が離れたことを察し、ルーティアはその場を急いで飛び退いた。

振り返り見た光景は、予想外のものだった。

「ソーマ」

思わず、叫んだ。

これまで部屋の片隅で静観していた黒髪の少年が、背後からセシルの腕を捻りあげていた。悲鳴を上げたセシルは、さらに関節を強く曲げられて、とうとう短刀まで取り落とす。

彼はそこで足払いをかけると、セシルを床に押し倒し、片腕だけでその身柄を拘束してしまった。セシルは足をばたつかせて、悔しそうに叫んでいるが、背中から一人分の体重をかけられては逃げようもない。

ユウは、ため息をついていた。

困惑した視線を向けられて、ルーティアは、今の今まで、彼のことを蚊帳の外にしていたことを恥じた。そして、説明を求めるような視線を見て、これ以上ない感謝も覚えた。彼は、何も状況を理解できないまま、ルーティアを助けてくれたのだ。

天使である彼には、大国の王女である身分など関係なかったはず

だ。

使命感も打算も、彼にはなかったはずだ。

刃物を持った相手に立ち向かう　そんな危険を犯してまで助け
てくれた理由が、ルーティアにはわからない。出会ってから、一日
足らず。言葉は多く交わしたが、互いに踏み込んだ話をしたわけ
もない。

感謝という言葉では足りないだろう。

しかし、何かを伝えなければと思い、ルーティアは無意識に手を
伸ばした。

（大丈夫か？）

手を繋ぐなり、彼はそう云った。

ルーティアは言葉に詰まり、結局、溢れだした言葉をそのまま伝
える羽目になった。

（馬鹿ね）

盗賊団が踏み込んで来てから、言葉のわからない彼は、どのよう
な想いを抱いて状況を見守っていただろうか。右も左もわからない
彼が、突然に目の前で剣の打ち合いが始まったのを見て、不安を覚
えなかったはずがない。それなのに、今、ユウは自分のことよりも、
ルーティアのことを心配している。

（無茶をするわね。怪我をしたら、どうするつもりだったの？）

（大丈夫。どうにかなった）

それは結果論だ　などと、無粋な反論はしない。

ユウは短く、こうつぶやいた。

（あいつなら、きつとこうする。『代理』らしく、俺は……）

途中で言葉を切ると、彼は厳しい視線をルーティアへ向けた。

（悠長に話している時間はないよな。どうなっている……いや、ど
うする？）

迷いの霧が晴れた　と、言い切ることは難しい。

だが、足掻く気力ならば、不思議と湧き出でていた。

自由について、想う。

生まれた時に、自分の意思とは関係なく与えられた王女の仮面を、これまで切り離すことなどできなかった。自分の宿命を受け入れ、その責務を果たすこと。それを為さずして、自由を求めることはおこがましいと思っていた。しかし、一方で、自由というものを夢想した。

今、この瞬間こそ、ルーティアは何にも縛られない。

思うがままの行動を、ルーティアは初めて望む。

（ソーマ）

叫んだ。

（お願い）

心の底から願う。

（私は、ここから逃げたい。助けて）

第13話「代理」(1)

たとえば。

ぶらぶらと歩いていた繁華街で、何気なく見た路地裏に、暴漢に襲われる少女がいたとする。それに気がついていてる者は自分以外になく、助けを呼ぶ暇もなかったとする。

事情はわからない。

少女に危険が及んでいることは明らかである。しかし、わずかな可能性とはいえ、暴漢と思しき男達こそ、正義の側にあるかもしれない。少女が百人以上を殺した殺人鬼であつたり、あるいは少女の皮を被った化物で、暴漢はそれを捕らえたり、退治したりする正義の味方かもしれない。

だから、選べない。

考えれば考えるほど、身動きが取れなくなる。

「君は、馬鹿だ」

伊吹カナは、心底呆れた顔で、そう云った。

「正解は、既にある」

答えは、太陽や月のように、当たり前そこにあり、問いかける必要もないものだ、と、彼女は云った。そんなチープな説明をさせるなんて　などと、彼女は憤ってすらいいた。

「心に従え」

彼女のアドバイスは、明瞭だった。

「先のたとえ話だけれど、僕ならば、少女を助けるよ。有無を云わず、暴漢を叩きのめしてあげる。もしも、その少女が殺人鬼だったならば、僕はその次に少女を叩きのめそう。そして、暴漢と勘違いした男達に謝ろう。それだけのことだ。くだらない、くだらない」

彼女は、ヒーローだった。

伊吹カナならば、どうするか。

ユウは、いつでもそのことを考えていた。

何かを選択しなければいけない時、常に彼女のことを思い出した。その言葉、その意思を心にコピーして、彼女が為すべき事を、彼女が進むべき道を、自分が違えないように必死だった。しかし。

どれだけの犠牲を払っても、能力は足りず、実力は足下にも及ばない。自身が苦心する事も、彼女ならば口笛を吹きながら解決するだろうこと、ユウはとっくの昔にわかっている。

だから、滑稽だった。

間抜けだった。愚かだった。

カナは、一切の勉強なく、全教科で満点を取る。ユウは真面目に授業を受けて、日々の予習と復習を欠かさない。

カナは、一目見ただけで、書類の不備を見抜く。ユウは放課後残って、委員会やクラブの書類とにらめっこする。

カナは、いつでも余裕綽々で、敵を薙ぎ倒す。ユウは呆れるほど無様に、色々なものを失ってしまう。

全て、滑稽だ。

天才の所業を真似するため、凡人が見得を張っている。無駄な足掻きである。馬鹿にされて当然だった。そもそもユウ自身が一番、馬鹿らしいと思っていた。

それでも、考える。

それでも、考えてしまう。

伊吹カナならば。

彼女は、ヒーローだった。

ユウは、代理である。

だから、結局、答えは最初から決まっている。どれだけ困難な状況でも、立ち上がらなければいけない。どれだけ危険な状況でも、立ち向かわなければいけない。情けなく、無様でも、かまわない。滑稽な程に愚かしくも、泣きたくなる程に間抜けでも、それでも、

ユウはヒーローであることを願う。

たとえば。

一人の少女が、窮地に陥っている。

見た目にも悪鬼のように恐ろしい男が、リーダーなのだろう。手に武器を持った男達が、少女を逃がすまいと取り囲んでいる。刃を向けられながらも、少女は毅然として前を向き、凜とした声で敵に立ち向かっていた。

事情など、まるでわからない。

カナならば、どうするか。

ユウも、その選択肢を選ぶことをためらわなかった。

（わかった）

ルーティアの手を、強く握る。

（お前を、助ける）

さあ、足掻け。

考える。

何ができる？

ユウはずっと、状況を静観してきた。

先程は、アルスと大男が派手に争う光景を見たばかりだ。素人のユウが見ても、両者共に剣の扱いに熟達していることがわかった。戦いを生業にする者の熟練した技術。それは、同じ土俵で争っては、万に一つも勝ち目がないことを教えるに十分なものだった。

それでなくとも、この場を取り囲む敵の数は多い。単純な力押しで突破できるものではない。車両から外へ逃げ出すにも、列車は高速で動き続けている。この状態では、隙を見つけて飛び降りることもできない。

ユウ一人が暴れて、解決するような甘い状況ではなかった。単純な力押しでは、まず何の成果も上げられないだろう。

正攻法が通用しない。

カナならば真正面から突破するだろう困難に対し、代理たるユウは歯噛みしながら、姑息な手段を考えるしかない。

（ルーティア、奴らの目的は？）

言葉はわからなくとも、場に漂う雰囲気、言い争う表情から、ユウは大体の察しをつけていた。

（お前の誘拐が狙いじゃないのか？）

（ええ、そうよ。その通り。私の身柄が目的みたい）

ユウは、口の端で笑った。

（俺達の会話は、他の奴らには聞こえないな？）

（ええ、もちろん）

（奴らは、お前を何かの取引に使おうとしているのか？）

（わからない。でも、手荒な真似はしたくないみたい）

そこまで聞ければ、十分だった。

もたもたと時間をかければ、手詰まりになる。

覚悟を決めた直後、ユウは行動に打って出た。

片手で掴んだルーティアの手はそのままに、セシルを拘束していた手を解く。その手で、間髪入れず、近くに落ちていた短刀を拾い上げた。

左手は、ルーティア。

右手は、短刀。

その体勢のまま、強引にルーティアの手を引いて、車両の奥側へ後退した。取り囲むように身構える男達から、ちょうど距離を離す格好だ。

ふらふらと立ち上がったセシルが、目だけで射殺するような殺気を見せていたが、今は無視するしかない。捻り上げた関節がまだ痛むのか、彼女は悔しそうな顔で、仲間の方へ身を寄せていた。

敵のリーダーと思しき大男は、三両目の車両と連結する入り口から、わずかに進んだ所に立っている。アルスは拘束された後、既に三両目の方へ連れて行かれてしまった。そのため、この車両内に見えるのは敵ばかりだ。

「動くな」

ユウは叫んだ。

通じるはずのない言葉だが、問題ない。

激しさと語調だけでも伝われば、それで十分だ。

リーダー格の大男を含め、敵の一団全員が、驚いたように息を呑んだ。その反応を伺い、ユウはまず上出来と確信する。表面はマグマのように熱く装い、声を荒げ、目を血走らせる。内心は裏腹に、氷のように冷めた状態に努める。

片手に握った短刀は、ぴたりと、ルーティアの首筋に突きつけていた。刃先は、彼女の白い肌に、軽く押し当てている。ほんの少し角度を変えれば、血が吹き出すだろう。

（ルーティア、悲鳴を……）

後ろ手に彼女の動きを封じるような格好だった。すぐ間近にある深緑の瞳が、驚きに見開かれていた。その身体が、緊張して強張るのが感じられる。

張り詰めた静寂が満ちた。

ユウは短刀を持つ手に力を込め、再度、呼びかける。

（悲鳴をあげる。あいつらに……）

（いいえ）

返ってきた声は、予想外に冷静だった。

（ここで叫ぶのは、私らしくないわ。先程セシルに捕まった時も、悲鳴なんてあげなかったでしょう。だから、ここは、少しだけ驚いたような顔で、息を呑んで黙っているのが正解よ）

事前に打ち合わせたわけではない。

演技をするよりも、むしろ本気で悲鳴をあげてくれた方が、敵を騙すには良いだろうと考えていた。そんな浅はかな計画を、ルーティアは見事に飛び越えてみせた。

ユウは驚きつつも、嬉しくなった。

（お前、本当にただの王女様？）

（そちらこそ、見事なはったりよ）

敵の目がなければ、互いに笑い合っていただろう。

（説明は、特にいらないか？）

（ええ。上手くやりましょう）

出会ってから一日足らず。

実際の所、ルーティアという少女については、何も知らないのに等しい。その気質や能力は、まったくの未知だった。それが今、ユウの持つそれらと、歯車がカチリと噛み合わさるように、見事に合致したように思えた。

それ以上の言葉は必要なかった。自分がやるべきことをやれば、ルーティアも最善の動きを見せるだろう。窮地の場面において、それは不意に生まれた信頼感だった。極限の中で得られた、最後の武器だった。

ユウは再び、勢いよく叫んだ。

「離れる。近づくな。そのまま武器を捨てろ」

何を叫んでも良かったが、演技に熱が入るように、ユウはこの場に併せた台詞を吐いた。もちろん、何を云われたかわからない者達は、戸惑ったように沈黙するだけだ。

（ルーティア）

（任せて）

そこで、今度はルーティアの番だ。

彼女は必死の様相で敵方へ語りかけ始める。それは、ユウには理解できない言語である。果たして、どのように状況を動かすつもりなのか。ユウが見守っていると、その場にいる者達が明らかに狼狽した様子になった。

（何か叫んで）

と、ルーティア。

「黙れ」

ユウは声を荒げて、彼女の腕を締め上げるようにした。

実際はほとんど力を入れていないが、ルーティアは痛みに耐えるように、顔を歪ませる。

（それで？）

ルーティアの役目がひとまず終わったと判断し、ユウは問いかけ

る。頭の中、彼女の楽しげな笑い声が聞こえた。

ユウは内心で舌を巻く。その内心と裏腹に、ルーティアの表情は、毅然としながらも恐怖に耐えるように青ざめている。あまりに見事な役者ぶりだった。

（ごめんなさい。あなたには、悪者役になってもらうわ）

（問題ない。最初から、そのつもり）

肝心なのは、敵にどのように説明したか。

そして、どのように要求を出したか。

（まず、あなたが随分と混乱していることにしたわ。墮界したばかりの天使が、いきなり争い事に巻き込まれれば、それは戸惑って当然の話よ。激しい剣の打ち合いを見て、自分にも剣が向けられるかもしれないと恐れた。そこで、身を守るために人質を取った）

ストーリーとして、ひとまず破綻はないだろう。ユウ自身、想定していた流れはそのようなものだ。

（あなたの言葉は通じない。だから、私が、あなたの言葉を代弁する　という建前ね。あなたの要求は単純で、ここから逃げたいというもの。敵から十分に逃げられたら、私を解放すると云っているだから、私はバージャム……盗賊団の首領ね、あの大きな男よ。バージャムへ、ひとまず列車を止めることを提案したわ。列車を止めて、まずは要求に従う様子を見せて、この天使を落ち着かせるべき　そんな風に、提案してみた）

（なるほど、悪くない）

むしろ、現状を少しでも改善するために、ユウが狙っていた通りの展開だ。

（それで、反応は？）

（悩んでいるみたいね）

大男　バージャムは、渋面のまま、こちらをにらんでいる。禿頭の巨漢にそんな風に射抜かれ、あまり良い心地はしなかったが、今は我慢するしかない。せいぜい危険人物を装って、話の信憑性を上げてやるぐらいだ。

果たして、どう出るか。

列車が止まってくれば、少なくとも、外へ逃げ出す事が可能になる。それだけでは解決にはならないが、八方塞がりの現状よりは、まだ幾らかの可能性が出てくる。

ユウはただの演技というだけでなく、息を呑んだ。相手の出方次第では、さらに荒っぽいやり方も必要になってくるからだ。

第13話「代理」(2)

結局、列車は止まった。

空調の効いた車内だったが、気がつけば、額に汗が浮いていた。それくらいの時間、敵側は熟考していた事になる。

バージャムが仲間へ一声かければ、そこからの展開は早かった。やがてわずかな振動と共に、列車の速度が落ち始めた。窓から見える風景の流れが、徐々にゆっくりとなる。列車が完全に止まりきるまで、誰も一声も発さなかった。

(ルーティア、窓を破れると思うか?)

(無理でしょうね)

(やっぱり、ちゃんと出口から出るしかないか)

アクション映画のように、窓を破って、飛び出す方法が取れば楽だった。

相手の人数は多く、こちらが使える武器と云えば、はったりぐら이다。圧倒的に不利な状況下である。ぎりぎりの交渉が何度も成功するとは思えなかったが、まだもう少し、胃の痛くなるような駆け引きを続けなければいけない。

(とりあえず、外に出よう)

(ええ、まずそれからね)

ユウは「退がれ」と一喝した。すぐさま、ルーティアが翻訳に加えて、懇願を始める。先程とは違い、今度はバージャムの反応は早かった。すぐさま部下を三両目の方へ退がらせて、車両の出口を解放した。

(罠と思うか?)

(でも、行かない訳にはいかないわ)

警戒しながらも、ユウはルーティアを連れて、車外へ出た。発着駅でもないレール上で停止した列車の外は、ただの平原だった。走行中から見えていた広大な森が、すぐそこに広がっている。

だが、森へ逃げ込むことを妨げるように、盗賊団の面々が外を取り囲んでいた。

（三両目から先に降りていたのね。これでは、簡単に逃げられない）
ルーティアが云うと同時に、今出たばかりの列車の扉が閉まった。逃げ道をひとつ、封じられた事になる。背面は列車に塞がれ、目の前に見える森へ逃げ込むためには、ぐるりと取り囲む盗賊団を突破しなければいけない。

（バージャムが来たわ）

別の出入り口から降り立った大男が、ゆっくりとした動きで、こちらへ向かってきた。「止まれ、来るな」と叫んだユウに対して、バージャムはぎょろりと目を向ける。

歩みを止めない彼に対して、ユウは慌てて、短刀をルーティアの喉元へ近づけた。意図を察したルーティアが小さな悲鳴を漏らし、そこでようやく、バージャムも足を止めた。

（厄介ね）

ルーティアがつぶやく。

（おそらく、バージャムは疑っているわ。あなたの行動が本当に錯乱したものか、演技によるものか。今の一瞬も、それを確かめるために、あんなにも大胆に近づいて来たみたい）

（だけど、今の動きの止め方で、連中がお前を無事に捕らえたいことも確信できた。多少の怪我をしてもいいなら、こんな面倒はせずに、数に物を云わせて、襲いかかって来ればいいだけだ）

ユウは考えていた。考え続けていた。

読み違えれば、それがそのままゲームオーバーに繋がってしまう。（仮に、俺とお前がこの場から逃げるために、共謀していると見抜かれた場合、連中はどう出てくるかな？）

（それこそ、強引に打って出るでしょうね。その場合、あなたは私を傷つけないとばれてしまう訳だから）

（そうになると、やっぱり、俺は混乱した馬鹿の役目を続けられないといけない。ルーティア、次の一手は、むしろお前が……）

（大丈夫。云わなくても、大丈夫。あなたの考えている事は、予想がつくもの。本当に、驚いてしまうわ。こんなにも自分と似通った事を考える……悪知恵を働かせる人間がいるなんて）

（つまり、似たもの同士ということかな）

（そのようね。ご愁傷様）

方針が定まった。危険な綱渡りの再開だった。膠着してにらみ合う場に、朗々とルーティアの声が響き渡る。

ユウは追いつめられた鼠のように、きよろきよろと周囲を見渡してやる。想定している悪役像は、かなりの小物だ。さながら、灰道ツカサである。感情の赴くままに行動に出てみたが、それが悪手と気づき、袋小路に至ってから狼狽するという、滑稽な役所だ。

そして、聡明なルーティア王女と云えば、巻き込まれたこの状況に対し、自ら逃げる算段を立てるというわけだ。状況は先程から一転して、ユウの駆け引きから、ルーティアの駆け引きへ移行する。

ルーティアは敵に語り終えた後、その内容をそのまま繰り返してみせた。

（バージャム・マクリール。あなたもこの状況に混乱している事でしょう。幸いなことに、天使に我らの言葉は理解できません。私は、あなたへ天使の言葉を伝えるふりをして、協力を持ちかけます。このような危険な状況は、私も望む所ではありません。命すら失いかねない今の状況に比べれば、まだあなた方に大人しく捕まっている方が良いでしょう。しかし、このように刃物を持って人質を取られていては、そちらとしても手が出せないと思います。そこで、提案いたします。私は安全を手に入れるため。あなたは私の身柄を手に入れるため。協力して、この天使を騙そうではありませんか）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7132u/>

ワールドアウトサイダー

2011年10月8日18時49分発行